

も亦甚だ價值少きことなり。吾人は理想を想望し、之に到達せんことを務む、之れ道德的生
物として吾人が内心の必然なる結果として、吾人の務めざるべからざる所なり。而も理想は
唯現實を通じ、現實に依りて接近し現化し得らるべきものなることを記憶せざるべからず
夫の厭世者流は實に是の人生第一の要諦を逸す。

然れども人が他生物と異りて道德的生物なるは、實に其の理想的生物なるが爲なり。理想
の觀念を人心より取り去らば、人は横目縦鼻の犬豚たらんのみ。理想は自覺力の發達と共に
必然に吾人の心中に生じ來れるものにして、人は是の光によりて萬有の趨向する所を知り、人
生の究竟する所を察す。是に於てか人は常に現在に生息するのみならず、過去にも未來にも
生息す。是に於てか人は初めて自己生存の價值を知り、又隨つて其の人間としての義務を自覺
す。是に於てか活動の廣さと深さとは共に漸く増大し、幸福も亦隨つて増大す。要するに、
人の人たる所以は、是の理想を有するの點にあるなり、是の理想を認識し進歩し現化するこ
とに於て、人生は其の唯一の意義と價值と幸福とを有すべし。然れども吾人のくれぐれも注
意すべきは、理想と現實との關係にあり、即ち理想を現化するの適當なる方法を講ずるにあ

り。是の目的に向つて吾人は現實界の事物に就て十分の知識を有せざるべからず。從來の學
者、動もすれば、道德と實際的知識とを峻別して、二者相關する所無しとし、甚しきに至つて
は、二者相容れずとなす、蓋し大いに謬れり。吾人が所謂理想的状態は、人間全體の現化な
り、一部分の發達を言ふに非ず。心性の各部が圓滿なる生長を爲すに非ざれば、人間全體の
圓滿は望み得べからず。今、左に道德の發達と實際的知識との關係を一言せん。是れ理想と
現實との關係を會心するに於て缺くべからざる也。

一般に言ふ時は、道德に形式的及び實質的の二原理あり。前者は理想に關し、後者は現實
に關す。重に理想的道德を論ずるに當りては、吾人は形式を以て足れりとすべしと雖も、實
際或る特殊なる場合に於ける義務を定むるに臨みては、是の二面を併せ考へざるべからず。
嚴密に言ふ時は、總ての善は多少現實を超越するものなり、而も吾人は道德的生物として是
非とも善を行はざるべからず。是に於てか吾人は常に現實に撞着するの運命を免るる能はざ
る也。故に吾人は現實が吾人に容るる範圍内に於て善を行はざるべからず。吾人が理想的狀
態に達するは、現實を破壊し顯滅して新に理想と稱するものを製造するに非ず、唯、夫れ現

實を通じて是の目的を達し得べきのみ。吾人は理想的生物たると同時に現實的生物なり。現實的生物として吾人は現實界の存在を維持し尊敬し且つ發達することを務めざるべからず。理想的生物としては、吾人は現實に満足せず、造次顛沛の間も理想に向つて精進せんことを努めざるべからず。故に吾人は現實界が容るす限の範圍に於て、出來得る丈け多く理想界に近づかざるべからず。然れども、吾人は如何にして是の「範圍」を定限することを得るや。

直覺論者は形式即ち理想の一方に着眼し、功利論者は實質即ち現實の一面に執着す。道德の進歩に於て力無きことに至つては一なり。以上述べし道德的理想の觀念は、是の二者を調停して庶幾くは誤りなきを得んか。然れども實際上如何にして是の原理を應用するを得べきか。吾人の義務には少くとも二個の異りたる原理あり。吾人自らに對するものと、一般人間の生活に對するものととれなり。吾人が或る特殊の場合に臨みたる時は、是の二大原理の標準に照鑑して其の義務を欲せざるべからず。然れども吾人は如何にして之を爲し得べきか、如何にして或る特殊なる行爲の個人の現化若しくは一般人間の生活に對する利害の多少を考定し得べきか。之れ唯、吾人の實際的知識に依頼するの外無きなり。多くの場合に於ては、

個人に對する義務と、一般人間に對する義務と相一致せず、公私同時に兩全を期し難きことあり。是の時に際して、吾人は十分慎重なる考察によりて、比較上利益多き方向を取らざるべからず。故に道德的生活は即ち考察的生活なり。故に高尚なる道德は高尚なる知識を豫想す、知識は道德に於て缺くべからず、現實と理想とを調和するものなればなり。吾人は無知の人に向つて道德を要むべからず。夫の知識ある人は幸なり、彼は理想と現實との調和に於て其の多望なる未來を有すればなり。猥りに世を果敢なみ、不平慷慨の中に一生を送る人の如き、畢竟知識の足らずして道念淺きが爲のみ。予輩は厭世主義を奉ずること能はざる也。

吁、理想と現實と是れ洵に悲しむべき而も亦喜ぶべき對比なり。心に理想を持して而して身は現實に蹉跎す、是れ悲しむべし。而も身は現實に踟躕して心は理想に徜徉す、是れ實に喜ぶべきに非ずや。望なき生活はそも如何に悲しかるべきぞ。限られたる前途の中に生活するは猶ほ牢獄の中に幽囚せられたるに同じからざるか。理想は吾人に命と望とを與へて吾人をして不滅ならしむ。よしやゲーテが言へりし如く、吾人が望と謂へる所のものは *die Wandlung* zwischen denen man gefangen sitzt, mit bunten Gestalten und lichten Aussichten bemalt. ^{我々が囚は}

過ぎずとするも、是れはた何の妨ぐる所ぞ。人は其の心に信ずる所のもの外は何事をも信ずる能はざるなり。人生は多幸なり、何となれば多望なればなり。進歩と自由と活動とに於て、人生は其の唯一の幸福を發見すべければなり。希望は未來にあり、而も未來の『明日』の如きを悲しむなかれ。人生は *Schicksaal* なればなり。よしや太陽は漸く其の熱度を減じ、此世界は早晚冷却して、あらゆる生物の全く絶滅するの期ありとするも、希臘の文化は無益に非ず、沙翁の戯曲は不用に非ず、人生は決して虚無に非ざるなり。

Life is real! Life is earnest!

And the grave is not its goal,

"Dust thou art, to dust returnest,"

Was not spoken of the soul.

人生は現實、人生こそ眞面目よ、墓はその行く先にあらず。『汝は塵よ、かくて塵に歸らん』といへるは、靈のことにはあらず。——(嘲風譯)

(明治二十八年六月—八月)

東西二文明の衝突

人は己れの知る所の外は何物をも信ずる能はず、其の學ぶ所に偏するは洵におのづからなる勢ひなりと謂ふべし。是れを以て洋學者は一切事物を拘束するに西洋の學理を以てせんと欲し、時と處とに隨つて斟酌應與する所以を知らず、其の同を知りて其の異を見ざるの弊に陥るもの比々として然り。西學に闇き人は、之に反して重きを自國の特質に措くの餘り、知らずく己れを揚げて他を抑へ、偏へに其の異を見て其の同を察せざるの弊あるを免れず。偶、同異全分の差等を辯じ、勸解調和の必要を説くものあるも、一知半解の臆斷に終らざるもの罕なるは、是れ亦おのづからなる數なりと謂ふべし。

東西二文明の抵觸が漸く政治社會を去りて、文學美術の境域に移りつゝあるは、吾れ人の大に注意すべきことなりとす。是れ文化發達の途上に於て免るべからざるの階段として、吾等の素より豫期せし所、敢て今更の如く騒狂するを要せずと雖も、而も之に向つて適當の準

備を懈らざることは、吾人が日本文學に對する當然の責務ならずとせんや。

請ふ看よ、演劇界に於ける新舊二派の競争、美術界に於ける裸體畫是非の争ひ、小説界に於ける翻案可否の論、若しくは文體、國字、語法に關する諸説の衝突、是等は果して何事を意味するものなりや。其の形の上より見れば洵に瑣小の末事なるが如きも、而も其の由來を追跡すれば、何れか東西文明の抵觸に非ずとする。若し夫れ倫理、宗教、教育の問題に入るに及びては、兩洋の思想、各其の殊を保ち其の異を樹て、峻として柄鑿相容れ難きもの多きが如し。一葉以て天下の秋を知る、我國文學の士之に對する覺悟如何、敢問、敢問。

このごろ東洋の新美學を作れと唱ふるものあり、吾等は其深く東西二文明の調和に注目したるの言なるを喜ぶ。獨り其説く所の淺膚杜撰にして識者の一笑に資するに過ぎざるを憾みとするのみ。

西歐の美學は西歐特殊の思想を反映せる美術より歸納せる一特殊の典則のみ。(日本人第五號)

と言ふが如きは、論者自らが西歐美學に於ける知識の皆無なるを自白したるもの、是の如き意見を懷いて勸解裁断を口にするは、そもく分外千萬の事なりと謂はざるべからず。美學は美

術を説明するものなるも、而も美學は單に美術によりて立てられたるものに非ず。特殊の美術より歸納せる特別の典則は之れ特別なる美術の典則なるのみ、美學の原理にはあらざるなり。けにや例せば、人體の「シムボリック」、建築、音樂等に關して西人の説く所は、直ちに移して吾人の好尚を律すべからざるも、美學の原理に至りては、元より平等普遍の人心に根據し、牢として抜くべからざるもの無くんばあらず。之れやがて美學が一の科學として成立し得る所以に非ずや。且つ夫れ我邦の人の多くは美學を以て偏へに標準の學なりとのみ心得、其の本領の説明學に在るを知らざるもの如し。而して漫然東洋の新美學を作れなど叫ぶものあるに至つては、吾等は其の學風の輕佻にして其の思索の淺膚なるを悲ますんばあらず。物を調和せんと欲するものは、勿論双方に就て十分なる知識を有せざるべからざるなり。

吾等は想ふ、東西文明は遂に調和せられざるべからず、然れども是れ只忍耐と精勤と之を導くの遠大なる目的とによりて初めて成されべきのみ、一時無謀の客氣は之を謹まざるべからず。今日の青年は兎角獨創の意見を作らんことを急ぎ、動もすれば大言して曰く、

今日の書を讀むもの、死文死語を見るのみ。博く讀まんことを思ふて深く思ふことを爲さず、別に

一隻眼を具ふるにも非ず、特得の見地を有するにも非ず、徒らに其の讀み得たる死文と死語とを剪裁して其の識を銜ふの要に供ふるに過ぎざるのみ。此の如くにして已まば、是れ六尺の身を以て糊と剪刀との用を爲すのみ、嗚呼人にして獨創無し、鸚鵡と何を擇ばむ、猿猴と何を擇ばむ。

是れ東洋の新美學を作れと論ぜしと同じ人の語なり、當今是れと同じき考を有する一派の青年甚だ多きが如し。其の意氣や洵に嘉すべし、其の時弊に中れる所も亦全く應與の益なしとせず。而も只、一時の空論放言に止りて、實行の決して之に伴ふ能はざるは、論者自らの已に萬々承知のことなるべし。まことや、世界の思想は連續なり、生ける發達を爲しつゝあるなり。眞に世界文化の進歩の爲に貢獻する所ありし學者の思想は、今尙ほ昔の如く凛々として活き居るなり。プラトーン、アリストテレスの思想を死せりと謂ふものあらば、其人は學問の何たるを知らざるの人なり。誠に過去の思想を理解するものに非ずば、如何でか將來の學問に益することを得べき。明治の學術界は知新を名として近眼膚淺の弊に陥りぬ、との哲學雜誌の一記者の苦言は、洵に時弊に適中せりと謂ふべし。今や我邦の青年は、古典の研究は扱て措き、あらゆる先哲の思想を斥け、世界的思潮の外に身を抜き、單身赤手、所謂

「獨創」の思想を發揮せんとなす。腹空しく心のみ高き年少の銳氣、無邪氣にして愛すべきもの無きにしも非ずと雖も、而も實學に益なくして徒らに後生を誤るの少からざるは、識者の潛に眉を蹙むる所なるべし。今日我邦は残念ながら未だ西歐の思想を理解するに至らざるなり。よし東西思潮の優劣は暫く之を言はざるも、吾等は尙ほ未だ西洋の文明を綜合し得るの位置に達せざるなり。まして一思想の上に超駕して之を勸解裁斷し得るの日に至つては、尙ほ甚だ近からず。大いなる事業は大いなる準備を要す。深く考へ、博く學び、古今東西の思潮を尋究し、拆いて分朱と爲し、打つて一團となし、急がす逼らず、着々歩武を占めて不退轉に精進するの向上的精神を興奮し、以て世界的大思潮の先鋒たらんことを期せざるべからず。東西思想の抵觸を見ては急遽狼狽して東洋的科學の創作を叫び、先哲古典の浩瀚解し難きを、見れば意氣俄かに沮喪して漫りに獨創の意見を唱ふるが如き、之れ近眼者流に非ずんば、薄志弱行の徒のみ。吾等は再び前言を提起す、日本將來の學者に要する所のもの三つあり、曰く忍耐、曰く精勤、曰く遠大なる目的と。

世にはかゝる近眼者流の多き中に、間、古典攷究の必要を認めたる青年學者の卓拔なる意見

に接するは吾等の甚だ喜ぶ所なり。先には哲學雜誌に「現時の學術と古典の攷究」と題する快心の一論文を見、近頃また帝國文學紙上に、上田敏君のものせる「典雅沈靜の美術」と題する麗はしき一文に接し、一讀傾蓋の思あり。よしや、情熱の高きに眩みて君が論に幾多の矛盾と撞着ありとするも、よしや、薔薇花の如き美はしき衣を纏ひて、君が審美論のいかにも若々しく見ゆるとするも、よしや君の論の前置の餘りに長くして旨とする所のあまりに飽氣なしとするも、何はともあれ、吾等は古典攷究の價値と歴史的研究の必要とを認めたるの一點に向つて全幅の同情を寄するにためらはざるべし。

吾等をして古來の大思想の上に立たしめ、高遠悠大なる精神に鼓吹せられて其の建築に一片の瓦を添へ、其の織文に一縷の糸を加へて、後代の爲に一際美はしく豊なる遺物を造らしめよ。

實に然り。洵にシルレルが言ひけん如く、古の尊き知識はあらゆる時代に生き居るなり。世界の思潮は、幾千年の時を通じて賢き人に思想を與へ又貢がれて、遂に今日の文化を成ししなり。是の故に世界的思想の歴史に於ける自己の關係的位置を知らんと欲せば、歴史上の發展を知悉せんことを要す。是れ今日の所謂歴史的研究の、思想の修練上にも、發達上にも、

絶對的に必要なる所以なり。そは歴史的發展を外にして、所謂獨創の意見なるもの有るべき筈無ければなり。吾等の言ふ所を以て不急無用の論なりとなすものあらば、其人は當今文學界の如何に歴史的精神に乏しきかの實情を知らざるの人なり、吾等豈辯を好む者ならんや。

(明治二十八年十月)

其の天分を發揚せよ

國民は其の天分に安んぜざるべからず。希くば望むべからざるのことを望まずして、其の天分の資性を發揚せんことを務めよ。櫻花に向つて薔薇の香芳無きを嘆ずるを已めよ。天分はGabeなり、是れを發揚するは國民のAufgabeなり。吾等は深く吾邦に叙事詩なきことを悲します。

(明治二十九年七月)

島國的哲學思想を排す

人は言ふ、島國民族は概して氣宇狭少にして他を容るゝの量に乏しと。果して然るか、予輩は是の言の我が思想界の現狀に適切なるものあるを見て甚だ之を悲しむ。想ふに、殆ど全く世界文化の潮流に觸れずして東瀛の端に邦すること三千年、一旦文化の東漸に遇ひ、三十年來冉冉として移植摸倣に違あらずと雖も、深く國民の稟性に根蒂せる島國的氣習は俄に擺脫すること能はず、其の思想動もすれば偏狹固執に陥り、寛裕博雅の襟度を缺くは蓋し又已むを得ざるの勢ひならむか。遮莫、國民的思潮の前面に立ちて提撕指導の責ある學者諸君は、此際大いに戒心せむを要す。

予輩後學の徒、敢て此俤々の言を爲すは、先進の諸氏に對して少しく遜讓の意を盡さざるに似たり。然れども予輩をして忌憚なく言はしめば、從來我邦學者の思想は餘りに主觀的なるに過ぐるなり。勿論人に向つて主觀的ならざれと勸むるの無理なるは、尙ほ全く自己を捨て

よと求むるの無理なるに等しからむ。然れども予輩の望む所は、只、各自の主觀を擴張して成るべく客觀に近からしめよと謂ふにあり。試みに是の點より我が思想界の現狀を觀ぜよ、苟も少許の知識を有するものは早く已に一定の見地を占め、一切の事物之れに照準して其の是非を批評するの辭なきか。彼等は偏へに概括に急にして資料の精博ならむことを願はず、一部特殊の典則をとりて直ちに依りて以て全分の事物を拘束せむと要す、而も遂に同異全分の差等に就て其の妄を悟るに由無し。定形已に胸に成りて外萬殊の事物に接す、己れに同じきものは之を取り、異なるものは之を捨つ。是を以て事を制するや情を以てし、物を別つや類を以てす。於是偏執なるもの益、偏執となり、其の學愈、深くして其の迷ひ愈、大なり。彼等自らは素より公平至正なりと思惟す。是れ當に然らざるべからず。何となれば、人は其知る所のもの外は何物をも信する能はざればなり。既に成心を以て萬物を觀る、苟も一見己れに同じからざるものは深く討索尋究の道を悉さずして、一概に淺薄虛偽なりと罵倒す、故に碩學大哲は彼等に於て何等の研究を要むるを得ず、況や又何等の歎美をや。彼等が自信の強堅にして意の壯快なるは甚だ喜ぶべきが如しと雖も、偏へに己れを樹つるを知りて他を容るゝ能はず、徒ら

に其の異を知りて其の同を察せざるの少量は頗る憐れむべしとなす。彼等多くは素據る所無し、只、先入を是れ主とす。先づロックを讀みたるものは終生ロックを脱する能はず。先づカントに接したるものは終生敢てカントの外に出でず。畢竟彼等が胸襟の窄少なる、莞爾容與として優に比較的研究を爲すの餘地無きの弊に坐す。斯の如く觀來れば、彼等が所謂一定の見地なるものも亦甚だ有難きものに非ざる也。若し滔滔たる衆俗と偏見者流と相比周し、一世靡然として誤つて風を爲すあらば、島國民族の思想は將に永く苟安小成に踟蹰して遂に發達の期無からむとす。是れ深く憂ふべき事に非ずや。所詮是れ狹隘なる主觀的傾向が思想界の趨勢を左右するの致す所なり。是の當路の障壁を打破し、博大なる心を披きて汎く客觀的考察を獎勵するに非ずむば、争でか世界的思潮の前面に立ち、二十世紀の思想界に向つて日本の名譽を昂揚するを得むや。

東洋民族は概して實際的なりとは吾れ人の常に考ふる所なり。讀者若し試みに倫理、哲學、宗教の上より印度、希臘、支那を比較せば燎然として明ならむ。宗教は理想の上に立つものなり、支那日本に何等固有の宗教ありとするか。アリアン族の神話は明に其の想像的沈思的

の民族なるを證すと雖も、東洋遂に一の神話なし。塵に古事記ありと雖も、予輩は性質上大いに吠陀、アヰスタ、若しくは希臘、北歐羅巴の神話に異なるものあるを見る。希臘哲學の初期は純然たる客觀世界を以て其の思索の對象となしたりき。其の人生問題に入りたるは、ソファスト、ソクラテース以後にあり。然れども支那の詩、書、易は初めより人生の實際問題を離るゝ能はざりき。西洋に於ては哲學思想の歴史は常に進歩的なり、凛々として恒に活潑なる發展を爲し來れり。東洋の思想は之に反して多く保守的なり、退嬰辭讓を旨として、動もすれば獨り其の安心立命を樂まむと欲す、故に予輩は支那古代の哲學に於て所謂歴史的發展なるものを見る能はざるなり。予輩は日本民族の思想が全く支那的なりと信ずる能はざる幾多の理由を有す、然れども其のアリアン族に近きよりは寧ろ支那人に近きことは争ふべからざる也。日本人は支那人と同じく實に實際的思想に富めるの人民なり、是れ一の缺點なり。然れども實際的人民として日本人の思想は、印度歐羅巴族に見るべからざるの長所あることも亦大いに注意せざるべからず。蓋しあらゆる人間の活動は、其の有形無形を論ぜず、所詮其の能動者たる人間の活動なり、故に其の本來の性質上、當に人生に關して或る意義を有す

る限りに於て其の價値を有すべきものなり。是の點より見る時は、其の教義を以て直ちに實踐の主義となせし印度、希臘、支那の古哲は髓に人生及び哲學の全分を理解したるものなり。然れども後世文化進み學術開くるに隨ひ、アリアン族の思想は、漸く一方には益々抽象的に進み、他方には愈々實踐躬行に離る。是れ一分の學のみ、人生全分の學と言ふべからざるなり。是れ或は已むを得ざるの結果ならむ、而も東洋の實際的思想は、是の點に於て一等を西洋に駕するものと謂はざるべからず。よしや今日、東洋は哲學、科學に於て遂に西洋に及ぶ能はずとするも、其の學術、一として人生の實務に關して或る意義を有せざるもの無きの一點に於て髓に西洋に優れる也。實際的人民として吾人は常に唯一の目的を人生の上に置く。故に如何なる抽象的學術も一度び吾人の手に觸るれば、忽ち具體實際の意味を有し、社會人生の事物に向つて或る意義を有することを誤らざる也。自己を識るは最上の知識なり。實際的傾向の我が邦人の長所なるを認めたるの予輩は、同時に其の哲學思想として一大短所なるを認めざるべからざる也。

想ふに吾が邦人の思想の極端なる實際的傾向が如何に形而上學の進歩を妨げしか、また現

に妨げつゝあるかは、當路の士の夙に熟知する所なるべし。殊に獨逸哲學の如きは、未だ會て學ばざるものは遙に仰いで以て高遠となし幽玄となすも、遂に之を解するもの鮮し。少しく自ら學びたるものは、其の思想の抽象的なるに驚きて、漫りに排けて空理となし無益となす。若し夫れ眞に其の堂に上り、カント、ヘーゲル、ショーペンハウエル等と同一の平面上に對話するものに至つては、極めて寥々たるが如し。獨逸人はアリアン族の粹、其の思想は風土歴史の上より一種特殊の發展を爲せしもの、其言ふ所、東洋の日本民族に近からざるものあるは素より其の所なりとす。もし寛裕他に對し、沈靜自ら持し、具さに商量比較の勞を忍ぶに非ずむば、争でか茫茫たる學海に棹して彼岸に達するを得むや。物質的功利の有無を以て直ちに事物の眞價を推斷するが如きは、遂に思想的大國民の風度を缺けるものと謂ふべし。獨逸人も日本人も同じく人なり、嘗て三論、法相の空宗を歡迎したる國民は、奈何ぞ今日獨逸哲學の妙理を會心するの雅量を缺くべけむや。況や純正哲學的希望は敢て甚だ本邦人に乏しとなさず、是れはた人心の至性に屬するもの、區々の物質的知識を以て漫然之を空抑せむとするは果して學者の本分を盡したりと謂ふを得べきか。況や東西文明の調和を説く、今

日、弘く兩洋の思想に對して客觀的、はた含蓄的批判を以てするに非ずむば、如何ぞ二十世紀の思想界に立ちて、其の木鐸となり、先鋒となるを得べけむや。予輩は思ふ、東洋の實際的思想は、將來世界思想の恰好なる調和點となるべきもの、宜しく乗じて進むべく、守りて退くべからざる也。

近頃「教育時論」に木村鷹太郎君の『思想界の雜感』と題する壯快なる一文を讀むの榮を得たり。曰く『形而上學を喜ぶものは未だ知識論に淺き輩なり、獨逸の形而上哲學は思想の混亂と淺薄との結果なり』。又曰く『カントは思想歴史に大害を残したる人なり、英國に於て、カントの前に於てロック、ヒューム等の大哲ありて懷疑論——實驗論を唱へ、全く形而上的の妄を打破りたり。然るにカントは是等先哲の論を知らず、之を不問に附して又々形而上の問題を引き起し、今日所謂獨逸哲學と云ふ一種無益の哲學を成すに至れり』。又曰く『憫れむべきかな形而上學者、ロック及びヒュームを讀め、必ず從來の愚なりしを感ぜむ、カント學派の哲學は研究せずして可なり』と。斯く引用し來らば、氣早なる讀者の中には或は木村君の健康に就て疑を挟むものあらむ、然れども如此は寧ろ無禮なる疑なるべし。何となれば、木

村君は、よし一言も其の理由を述べざるも、斯かる結論を公告するまでには精細確乎たる論證を経たるべければ也。君が此文は古來碩學大家のものせらるゝてふ隨筆様のものにして、何等の證明なく、單に吾人末學の注意を惹起するものに過ぎざるを以て、之に對して予輩の意見を述ぶるの要なかるべし。然れども異を好む世人、淳朴なる地方教育者の、不幸にして未だ木村君の雷名を耳にせざるものは、或は其説を奉信するもの無きを保せず。且つ世の淺薄なる經驗學者が純正哲學を難するもの、百年以來同一の論法に出づるを以て、茲に二三言以て其の妄を辯ずるは穴勝徒勞にも非ざるべきか。

純正哲學は人心の至性に本づくものにして、知識終極の原理と宇宙の本體とを明にせむとするもの也。吾人は一個の人間として個々殊別の現象に終局する能はず、尙ほ一步を進めて實在の真相を知らむことを希ふ。個々の現象は多く散漫として矛盾に滿つ、吾人は其の原理の中に其の調和を見むことを希ふ。是を以て吾人は特殊の科學が教示する所の特殊の典則を以て満足すること能はず、進んで是の衆多の典則を貫通せる終極的原理を案定せむことを希ふ。斯の如きは一二學者が初め任意に想像して而して後世人之れに和したるものに非

ずして、人性本然の必至なる需要に本づく。木村君は哲學歴史を以て一二學者の製造物となすか。カントなか微せば獨逸近世の形而上學は興らざるならむと云へるが如き、洵に皮相幼稚の見なりと謂ふべし。然れども元來審美的嗜好に乏しき人にとりて、美術は何等の價值無きが如く、勿論如此慾望無き人にとりては、純正哲學は無用の長物たるに相違無し。蓋し木村君の如く生れつきたる人は、隨に知力的勞力の一半を節儉し得ることを上帝に感謝するの義務あるものなり。

純正哲學を言ふものは知識論を知らずと木村君は連りに言ふ、何ぞ事理を解せざるの甚しきや。けにや木村君が所謂曠世の大哲學者ロックは凡ての哲學的研究は先づ吾人が觀念の起原の研究を以て初まらざるべからずと説きたりき。木村君が所謂淺學無比なるカントも亦吾人が能力及び知識の範圍の批判は純正哲學の研究に先だたざるべからずとの旨意を以て、例の純理批判を著はしたりき。然れども是れ謬見なり。發達論と現實論とは其の意義の關係に於て全く其の範圍を殊にすることは、今日苟も哲學を口にするもの知る所、聰明なる木村君にして今日斯かる意見を吐露するは頗る奇怪なり。事新しく言はずものことながら、觀念

の起原及び歴史は、既に一たび觀念として顯はれたる後の意義及び眞僞を決定し得べからず。一の觀念の確否は全く觀念其物の現實的内容に依りて批判せらるべきものなり。空聞てふ觀念の起原は幾何學の命題の眞僞と何等の關係ありや。よしエムピリチスムスにして正しきも將たナチヂスムスにして正しきも、三角形の三角の和は常に二直角なり。幾何學の命題は其れ自らに於て其の眞僞を決すべきのみ。故に純正哲學の第一義は知識論によりて觀念の起原を知ること、非ずして、只、是の觀念の内容を明晰にし、且つ其の相互の關係を確實に知るにあり。是れ一見炬火よりも明なるに非ずや。且つ夫れ尤も明晰なる觀念は最も終極の發達に求めざるべからず、單に知識論によりて純正哲學の問題を決せむと欲するものは、冠履を顛倒せるものと謂ふべし。木村君の思辨は概ね是の類なり。更に君に向つてロック、ヒューム等自らの已すでに一大純正哲學的假定の上を立てることを看取せむを望むが如きは、抑、又無理の注文なるべし。而も口を開けばカントを淺薄なりと誣とがり、獨逸哲學の思想は幼稚にして學ぶに足らずと罵倒す、何ぞ其の自ら重んぜざるの甚しきや。予輩平生務めて寛裕ならむを欲す。而も我が學界百年の爲に斯の如き論法を歓迎する能はざるを恨みとす。今世紀の初めに當り

てオーギニスト・コムトは人心發達の歴史を區劃して神話的、純正哲學的、及び積極的の三段となし、純正哲學の時代漸く去らむとするを説き、形而上學は國民の病的思想なりとまで廣言せり。一時歐洲の思想界は隨に彼れが影響を受け、積極論的、はた非知識的傾向は到る所の新聞紙雜誌に現はれたりき。然れども人心は遂に此の如き驚くべき預言者の告示によりて其の本然の思想を枉屈する能はず、純正哲學に對する知識的慾望は既にロック、ヒュームの本國なる英國に於てすら益々盛んになり行けるに非ずや。人は、自然的なると同時に超自然的なり。純正哲學によりて安心立命の地を得むとするは人心の本然に本づく。夫の淺膚皮相の輩己れを推して他を強ひんと要するも豈久しく其功あるを得むや。純正哲學にして無用ならば宗教、美術、文學も亦無用なり。サムブルを取りてバランスを打ち得るものに非ずむば、一切事物凡て無用ならむのみ。予輩は斯かる黄金時代の來ることを望まざるなり。蓋し科學の方まきに開くるに當りてや、一時人心之れに眩惑して、依りて以て一切萬有を解説し得べしとなす。而れども漸く科學の性質本領を解するに及びて終極の疑問の遂に秤量規矩によりて釋了すべからざるを悟るや、茲に再び純正哲學の必要を感ずるに至るなり。科學自らも亦事物終

極の原理を解せむが爲に、預じめ知識の能否、範圍等に就て教を純正哲學に待たざるを得ざるに至る。予輩は斷言す。歴史は哲學に非ず、起原發達を以て一切を説明せむとするものは其の愚遂に及び難し、今日の極端なる經驗論者は今世紀の初期の哲學史を實地に復習するもの也。さりとは餘りに御丁寧過ぎたりと謂はざるべからず。

予輩を以て、木村君を捉へて故こゝさら言を爲すものと爲す勿れ。以上は只、我が學者の思想の如何に偏執にして實際的なるかの一例を擧げたるのみ。さはれ純正哲學の本領は從來多く世人に誤解せられたり。之れ洵に己むを得ざるものあるべし。然れども苟も世界の大潮に棹し、身學者を以て立たむと欲するものは、濶大なる胸襟を披き、眞摯なる客觀的考察と精細なる含蓄的批判とを以て他に接せざるべからず。予輩は、もし出來得べくむば、我が學者諸君に向つて一定の哲學主義を構成することの餘りに早急ならざらむことを乞はむと欲す。是れ實際望み得べからずとせば、予輩はせめて我が學者が外物に向つて常に忠實なる客觀的考察を爲し得るの餘裕を蓄へむことを切望せずむばならず。身未だ獨逸語を能くせず、而して獨逸哲學を學ばずして可なりなどと言ふが如き、意氣頗る勇ならずとせず、而も遂に思想的

國民の雅量に於て缺損する所あるを奈何。

我國人の思想の主觀的に偏するや、安心立命を以て直ちに哲學の能事終れりと思惟するもの少からざるが如し。安心立命、是れ素より哲學の目的なり、然れども是れ「安心立命」にして正確なる客觀的根據を有するものに非ざるよりは、何を以てか僧夫野人の迷信に異る所あるべき。思想の深淺は安心の高下を規定す。是を以て主觀的に満足を與ふるもの、必ずしも客觀的に正確なるものに非ず。哲學者が俗人と異なる所は世界最高の思想に駕して安心立命の地を求むるにあり。且つ夫れ人類思想の前面に立ちて、後代の爲に一片進歩の標章を留めずむば、學者の責任何によりて全うしたりと云ふを得べきか。予輩が近く吾友建部君の實在論に慊焉たらざる所以の一は實に爰に存す。斯の如きは所詮歴史的精神の缺乏に基因するに非ざるか。言ふまでも無きことながら、吾人は歴史の中に生息す。宇宙の事物は各、其の歴史を有す、吾人が爲し得べき最大の効果は、歴史的理想に向つて其の發展を獎勵し助長するに存す。あらゆる客觀的價値は歴史を外にして存在するものに非ざる也。經驗論者或は謂はむ、歴史は因果の繼續のみ、豈所謂理想なるものあらむやと。是れ甚しき謬見にして、經驗

論が遂に哲學として立つ能はざる主なる理由の一なり。畢竟是れ目的學に就て誤謬ある概念を有するの弊に坐す。予輩は信ず、器械的説明は其れ自らに於ては決して虚偽に非ず。抑、事物を觀察するに因果の點よりするものと目的の點よりするものとの二法あり。是の二者は由來異級の平面に在るものにして、其の性質上、毫も相衝突すべきものに非ず、唯、是の器械的説明によりて、或る事物の完全終極の解釋を得むと要し、又得べしと迷信する時、初めて虚偽に陥るなり。器械的説明は所謂 Progressus in infinitum なり、事物の終極に就て何等の説明を與へ得るものに非ず。是れ只、目的學の立脚地より初めて爲し得べきのみ。故に、若し宇宙の進行に就て或る合理的意義、即ち目的を案定する能はずむば、哲學は髓に其の一脚を失ひたるものなり。理想てふ觀念が純正哲學の根據に立つは洵に必至の理なりと謂ふべし、是れ倫理學、審美學が遂に全く經驗説を以て説明する能はざる所以の一なり。

序に木村鷹太郎君は「近來倫理學上に形而上學的の論を入ること流行す、之れ思想の退歩なり」と云へり。予輩は其の思索の偏狹卑淺なるを惜しむと共に、聰明なる氏が何故に識者の一疇を買はむが爲に故らに斯かる放言を臚列したるかを怪しむ。氏又曰く、「近來大學學

生中の或人等より發表せられたる倫理學說の傾向に由りて見る時は、大に形而上學的にして淺薄なり」と。予も亦今六月より九月に亘りて道德の理想に就て鄙見を吐露せることありしもの、木村君の言に對して聊か路傍の人と一般ならざるものあり。聞く、君は形而上學打破を以て自ら任すと。理由無き斷論を列ねて漫りに他を罵詈するをやめて、何ぞ正々堂々の論鋒を用ひざる。證據無き惡言は偶々自家を賤しうするのみにして、毫も他を輕重するの力無きものなり。遮莫、予輩は今日黃口の青年が動もすれば好んで大家碩學にして初めて爲し得べき隨筆様の斷文を弄ぶの弊あるを悲しむ。

以上少しく岐路に入りたるが如し。要は島國偏狹の習氣を擺脫して成るべく其の胸襟を潤くし、忠實なる客觀的考察と、精細なる含蓄的批評によりて、具に商量比照せむことを希望するにあり。比較攷究の必要は近時漸く學者の間に認識せられたるが如し。然れども其の識見卑淺にして其の思索の粗笨なるもの多きは頗る悲しむべしとなす。例せば、「嗜好は美學の基礎なり、日本の幽寂の美は西洋美學の二大範疇なる優美と壯美との何れにも屬する能はざるが故に、須らく東洋の新美學を作るべし」と論ずる者あるが如き、平生美學を專攷する予

輩と雖も呆然として言の加ふべきを知らざる也。予輩は我邦の青年學生に向つて、敢て獨創の意見を構成する前には、豫じめ十分純然たる客觀的考究に其身を委ねむことを勸告するものなり。且に一書を讀みて夕に一説を構へ、猥りに異を樹て新を銜ふは、遂に思想的大國民の風度に非ざるなり。

(明治二十八年十一月)

東西思想の比較一斑

木村鷹太郎君の駁論に對して

本論は予が養病の爲め昨年十二月より滞在せる温泉場の客舎に於て草せしものなり。座右に參考書少きが爲に已むを得ず記憶のまゝ、又は備忘録に記入せるものより例證を引きたれば、中には少々の誤謬なきを保せず。且つ病餘身心共に疲勞し居れば、其の行文おのづから木村君の如く雄壯なること能はず。讀者諒焉。(二月二十九日於熱海客舎。)

予が去年十一月の本誌(哲學雜誌)雜錄欄内に於て「島國的哲學思想を排す」と題せる時論

一篇を掲げしは、聊か今日學者の思索の方法が日に偏狹固陋に傾き、一向に己れを樹てむことに急にして、他に向つて眞摯なる含蓄的研究を作す者と少きを慨きてなりき。惟ふに當今學術界の公平なる觀察者は、夙に予輩の言を諒せられしならむ。然るに言の木村君の上及びべるものありしが爲に、端なくも篤學なる同君の激怒に觸れ、予が僅々數頁の所説に對し無慮數十頁の反駁を辱うしたるは、予輩の幾重にも好意を謝する所也。彼の一篇は其の目的單に以て學術社會の注意を喚起するにありしを以て、其の用語語氣の如き、素より精確なる科學的嚴密を以て一切を檢覈せむとする木村君の意に満たざりしものありしならむ。予は君の所論を讀み、予が用意の足らずして偶、君の誤解を招きしもの多きを知り、深く自ら之を慚づ。

然れども予は君が勇壯なる議論に於て毫も得る所無かりしを悲しむ。あはれ形而上學を排し實驗哲學の精神を明にせむと呼ばはりたる君が議論の如何に平凡膚淺なるよ。予はむしろ斯くばかり薄く弱き地盤に立てる君の聲の、如何にして斯くは大に高きを得たるべきかを想ひて、轉た君の大膽勇氣あるに驚く。なみなみには優に解し得らるべき章句の瑣尾を捉へて、

我れは顔に吐かれたる氣焔とやらの高さによりて、思想家たる君の面目の如何ばかり高まりたるかを見て、予は寧ろ君の爲に之を惜しむ。

總じて他の所論を評せむには、被讀者に對する讀者が當然の義務として、先づ前後の語意により大體の歸趣を誤らざらむことを務めざるべからず。彼の一有を捉へ、此の隻語を摘み、之を自家の成心に投じて之を云々するは、所謂揚足取の所爲のみ。予が先に掲げたる一篇はやがてかゝる論者の頂門に一針を加へたるなりき。予は失禮ながら木村君が公平なる眼を以て再讀の榮を給はらむことを望む。

木村君が予に反對する主點は、實驗哲學の精神を顯はさむが爲に形而上學を排するにあり、予も亦是の點に向つて氏が妄を辯すべし。然れども君は其他の予が所説に向つて數多の異議を挾めり。予を以て之を見れば、所詮是れ君が曲解詭辯の結果にして、木村鷹太郎君の名譽の爲には寧ろ不問に附するを可とすべしと雖も、君が揚足取の如何なる性質のものなるかの一例を示さむが爲に、且は其の問題の稍、重大なるものあるを以て、左に少しく之を辯ぜむ。

予は先に世界に於ける東洋思想の位置に就て一言せむが爲に、其の西洋思想に對する簡單なる比較を爲して曰へらく、東洋人の思想は實際的なり、彼れにとりては如何なる知識も人生の實務に利害の關係を有するの限りに於て其の知識たる價值を有す、故に彼は深く純理を思索し、形而上的事物に向つて幽遠なる考察を爲すこと無し、是れ彼れが長所にして同時にまた短所なり。西洋人、殊に亞里安人の哲學思想は之に異り、一方には其の思索は益々抽象的となり、他方に於ては益々實踐躬行に離る、是れ其の長所にして、又其の短所なり。東洋人たる吾人は、思想的大國民として世界の思潮に先鋒たらむことを期するの吾人は、吾人が實際的思想の素地の上に亞里安民族が純理的傾向をとりて勸戒調和するの勞を取らざるべからずと。炯眼なる木村君は予輩が此言を捉へて揚言して曰く、亞里安人は東洋人よりも遙に實際的なり、高山君が東西比較論は全然根據無き妄言妄語なりと。吁果して然るか、予が東西比較論は彼の論文の主題に非ざりしを以て、簡單なる數行の文字は素より予が意を盡すこと能はざりし也。予は何等の理由をも與へずして、漫然他を排斥する無法なる論者と論鋒を交ふるの無益なるを知らざるに非ずと雖も、已に他の爲に何等の根據無き妄言妄語なりとまで罵詈

せられたる以上は、言者が當然の責任として、先づ是の結論に達したる由來を明にし、以て讀者の高判に供し、次に木村君に向つて予が説を妄語なりと痛罵せられたる十分の理由を問はざるべからず。而して他の論點を措いて、殊に東西思想の比較論をなさむとするものは、獨り木村君に對してのみならず、世界に於ける我邦文化の位置を明にする必要あるの今日、殊に學者諸君の一顧を煩はさむと欲するが故なり。

數千年の歴史の中に現はれたる民族の特質は、其の最も至醇なる形に於て、古代に於て尤も明晰に發揮せらるゝを常とす。故に予は暫らく古代文明史に於て東西兩洋の思想を觀察せむ。(茲に謂へる東西は地理上より別てるに非ずして、東洋とは主として所謂チュラニアン民族を云ひ、西洋とは主として亞里安民族を指せり、故に印度波斯の如きは、西人の所謂東洋に邦すと雖も、予は之を西洋の中に編入す)。

先づ哲學思想に就て一言せむに、希臘哲學の歴史は何人も知る如く、宇宙論に初まり、學者が殊に倫理人生の問題に指を染めしはソファスト、ソクラテース以後なりき。即ちターレス以下のイオニアの自然哲學者は、専ら可覺的現象の區域に留まりしも、而も物質的原理によ

りて宇宙の成立を考索したる物活論者ヒロソフィストなりき。ピタゴラス派の哲學者は、數量を以て事物の形質を構成するの原理となし、バルメニデース以下のエレア派の哲學者は、實在の唯一不變なるを主張したり。要するに皆是れ客觀世界に對して其の存在變化の原理を究めしものにして、吾人は是の間に人生の實務に關する何等の教養をも求むる能はざるなり。夫のアナクサゴラスが *κόσμος* の自存と全能を説くころに至りて、希臘哲學の局面は一轉して詭辯學者に移り、茲に人間思想の確否に關して主觀的考察を爲すに至れり。而も是れ只、主として知覺、觀念、知識の現象に就て疑問を呈出したるに過ぎずして、慾望あり、道德ある人生の實際問題に入りて當來の實務を思議することを爲さざりき。ソクラテースに至りて初めて眞面目なる道德に就て立言し、獨りソファストの如く個々の知覺、觀念に就て爲すに止まらず、夙に知と徳とを以て人生最高の部能となせり。而も尙ほ未だ人生の價値問題に就て幸福の大小を論ずるに至らず。プラトーン、アリストテレスよりエピクル、ストア諸派に至るに及び、初めて哲學上諸種の問題を捉へて之を人生幸福の一契點に集中し、希臘哲學は茲に其の主觀的頂點に達したり。

希臘哲學の是の期に於ける發展の要領は、所詮客觀より主觀に進み、宇宙より人生に進み、知覺より意志に進み、物理より倫理に進みたるもの也。然れども是れ決して希臘哲學最後の歸趣を示すものに非ず。若し夫れ一轉して猶太、亞歷山の哲學に入り、再轉して新ピタゴリアニズム、新プラトニズムに入るに及び、舊時の思想を襲ぎて更に本來の新局面を啓きたりと雖も、其の發達の順序の如何に外界より内界に移りたるか、また其の推移の次第の如何に考察的なりしかは、吾人の注意を要する所なりとす。以上は苟も哲學史を解するものの何人も熟知する所なれども、後文支那哲學との比較を爲さむが爲に、特に讀者の一顧を煩はしたるのみ。

希臘半島に於ける亞里安族の哲學は略、上に述べたるが如し。今暫らく印度に於ける亞里安族の思想を尋ぬるに、其の思想變遷の傾向の甚だ希臘に似たるものあり。吠陀以前の信仰に就ては暫く言はず、そもく印度人も亦他の印度歐羅巴族の如く、隨時隨所、山川、草木、日月、星辰を神化して之を崇拜したるの時代あり。然れども漸く因果體相の理を辨へ、人間と自然との關係に想ひ到りたる時は、彼等は最早や、如是信仰を以て満足すること能はず、

進んで宇宙萬有の根本主義を知了せむことを欲す。「誰か秘密を知れりや、誰か茲に之を告示せしや、何處よりか是の限りなき物象の出で來りしや。神自らの存在せしは後世のこと也、誰か此の元宇宙の何處より出で來れるかを知るものぞ。最も高き天に在す最も高き聖者、彼は之を知らむ、否恐らくは彼れも之を知らじ。」（ブライデル宗。梨俱吠陀の詩人が斯の如き疑問を唱ふるに至りては、人格的神たるインドラ、アグニ等は最早や從來の如く宗教的主權を掌握すること能はず、吠陀教は如是偉大なる答案を呈出すること能はざる也。吠檀達教を初め、もろくの婆羅門哲學は是の解釋の爲に喚起せられたり。其の尤も著るしきものを吠檀達派の教義を含蓄する所のウバニシャッドとなす。ウバニシャッドは吠陀教の意義を一層幽玄に解釋したる一種の祕密教にして、由來首尾を一貫せる哲學的系統を爲すものに非ず、只、隨時隨所種々の方面より眞理を模索せむと務めたるものなりと雖も、其の遍通の目的は一身の「自己」及び世界の「大自己」を知らむと欲するにあり。是の自己は當初は物質的のものとして考へられしが、其の概念は人智の進歩と共に精神的となり、遂に肉體とは全く異なる自覺的自己として考へらるゝに至れり。其の教義に公開祕密の二部ありて、其の説明の方

法は多少相違せりと雖も、要するに梵天の唯一實在を豫想し、宇宙萬有及び個體的自己は凡て是の最上實在の分出せる一部にして、個々獨立自存せるものに非ず、賢人哲士は自己を眞想することに依りて宇宙の本體たる梵の大自我に還没し得べしと謂ふにあり。其他勝論派は宇宙を極微の結合なりと觀する多元論を主張し、瑜伽派は個體的精神を唯一なる宇宙的精神の發現となし、自然界即ち物質界を以て是の現象を生ぜしむる差別的原理なりとせり。其他各學派の所論多少相異れりと雖も、ソファスト以前の希臘哲學者の如く、何れも元宇宙の成立を解釋せむと企てたるものに非ざること無し。

印度の各哲學派は上述の如く各、其の宇宙論を有すと雖も、其の側面に於て實際的教義を有することを忘るべからず。

吾等は何處より來れりや。誰れによりて吾等は生存し、終に何處に歸せむとするや。吾等は誰れによりて支配せらるゝや。吾等は一定の法則を歩み居るか。吁、爾神を知れる人々よ。

ジユエターシユヅタラ・ウバニシャッドは實に是の疑問を以て生まれり。僧侶派は内面的考察に

よりて物質と精神との差別を自識し、其の自我の純一無垢にして現象世界にありて永劫不易なることを覺悟することを以て人生の至樂と爲し、闍伊那、瑜伽派の如きは殊に實際的教義を重んじ、肉體の苦痛を以て精神の解脱を得るを目的となす。波爾尼派は文法上の深遠なる考察によりて、吠檀達派と同じく梵の唯一實在を認識し、差別相の原因なる無明の束縛を打破し、梵に還没するを以て無上の淨樂となせり。また、斫婆迦派は瑜伽、闍伊那、諸派の嚴酷なる禁欲苦行の教義に反して快樂主義をとれり。如是實際的方面は、希臘に於けるソクラテース以後の主觀的哲學に相當するものと謂ふべし。

是れを要するに、印度哲學は吠陀及び吠陀以前にありては、主ら客觀世界の讚美と解釋とに向ひたりしが、六哲學派の興起するや、單に宇宙論に止らず、引いて實際の問題に入り、茲に解脱を以て人生至極の淨樂となすに至れり。解脱輪廻等の人生問題に關する觀念の起しは、實にウバニシャツドに初まりしものにして、吠陀讚稱の中には之を見ず、單に死者の靈魂はヤマの光明、天の上に至りて永遠の福祉を享くると謂ふに止りしなり。是の思想の徑行は希臘哲學に於てターレス以下の自然哲學者が主ら宇宙論を説き、ソファスト、ソクラテース以後に至りて初めて人生問題に容吻し、遂にストア、エピクル諸派に到達したると其趣を同うせりと謂ふべし。

翻つて支那古代の哲學思想を顧みれば、吾人は全く特異の面目を發見すべし。希臘、印度に於ける亞里安民族が、其の簡素なる心情を披きて大宇宙に面するや、兎にも角にも其の不全なる知力を以て少しも臆する所なく、其の存在成立に對して偉大なる解釋を與へんとしたるに反し、チュラニアンなる支那人は、外界に對して全く受動的の位置を取り、自然を説明し、自然に抵抗し、若しくは自然を厭離せむとする些の盡力を示すことなく、一意自然の勢かに屈從し、唯、現世に憑據して追從資緣、違はむことを是れ恐るゝのみ。現世を外にして彼等は何の求むる所なし、故に宗教、神話等の理想的產物は彼等の絶えて知らざる所なりき。亞里安民族が心性の外界より優秀なるを認めたるに反し、彼等は廣大なる自然界に對して人心の小弱にして言ふに足らざるものなることを認めたり。大自然界に對して唯心的説明を試みるが如きは、彼等の夢にだも想ひ到らざる所、其の唯一の目的は、只、自然の法則に順應して天分の幸福を享くるにあり。故に其の觀察の範圍は純はら具象相對の世界に止り、絶對な

る宇宙の實體等に關して殊に考察する所無し。彼等は時に是の超自然的實在を口にすと雖も、只、依りて以て人生實際の上に應用せむが爲なり、故に超自然界及び自然界は人事界に關係する限りに於て研究せられたるのみ。一言すれば、人は如何にして幸福なるを得べきか、是の問題は彼等が知識せむとする唯一の對象なりし也。

孔子は是の支那思想の實際的傾向を尤も明白に、且つ尤も誠實に代表したるものなり。後世の支那學者之れを以て正學と爲したるは洵に以ありと謂つべし。老子の學は孔子及び其他の學者に比すれば多少純理哲學の思想を含有し、明晰なる世界觀を有せりと雖も、而も道德經八十一章の主旨は哲學上の論據によりて世に處し身を全うするの道を講じたるのみ。其の世界觀として見るべき分出論の如きも、其の人生觀に於ける復歸主義、將た厭世主義を演繹する上に必須なる方便として説明せられしのみ、其の實際的傾向を主としたることは恐らく孔子に譲らざるべし。唯、人世の幸福を求むるの方法に於て一は出世間的にして一は世間的なるの差別あるのみ。且つ老子の復歸厭世の教義と雖も、決して印度亞里安族が内面的考察によりて解脱を愉悅したると同日の論に非ず。印度人にありては、解脱を得る方便は唯心的

活動に依りて法界を厭離し、若しくは之に反對し、若しくは之を絶滅するにあれども、老子にありては、只、大道の自然に結合し、從順し、若しくは適應するにあり。故に涅槃と復歸と其の形同じきも其の實大いに異なる所あり。ストア派も亦自然に順へと教へたれども、老子の教とは多少異なる所あり。即ち是の派にありては徳に達するの道に積極消極の二法あり。力行勉強、我れより進みて自然に合する積極的方法を以て、寧ろ退嬰消極的方法よりも主要なるものとせり。然るに老子にありては只、消極的方法のみにして、勉強力行を排し、却つて勤生勞神の末道となせり。(道德經十六、二十二、二十八、五十二等、參考)

支那最古の哲學として見るべき易及び繫辭傳は、更に明に是の傾向を表はせり。抑、繫辭傳の哲學は進化論なれども、進化論其物を説明せむが爲に非ずして、依りて以て人生の實行に應用せむが爲なりき。蓋し以爲く、天地萬有の運行し變化し又發達する所以の道只、一のみ。太極より天地剖判し、乾坤より男女成り、日月推移し、四時代謝し、生死交はり、榮枯相繼ぐ、皆是れ同一陰陽の理、隨時隨處、萬殊の事物に待應して其形を變じたるのみ、易の道即ち是れなり、之に順ふものは榮へ、之に逆ふものは亡ぶ。人事に吉凶あり、禍福あり、生

死悲歡兩々相對して人は其間に輾轉す、是れ則ち易道の順逆に依りて二氣兩面の反影を見るのみ。故に身を全くし、生を壽ながうせむと欲せば、須らく是の大道に順應せむことを要す。故に『君子の居を安んずる所は易の序也、居る時は其の象を觀、動く時は其の變を見る、是を以て天之祜を祐く、吉にして利あらずと謂ふこと無し』と。予輩は是の短文に於て一々舉證引例すること能はず、讀者は繫辭傳に於ける一、二、四、六、七、十一、十二諸章を参照せられむことを望む。

是れを要するに、チヌラニアン、及び亞里安兩民族の哲學思想は根本的に其趣を異にす。勿論予輩は印度哲學を以て亞里安族の思想なるを預想せり。何となれば、博士バルドキン氏が熱心に論證せる如くバルドキン氏史前史の民族、よし亞里安人が天竺半島に南下するに先だち Aethiopian Cushites が印度に植民したりしにもせよ、戰勝者たる、而も後世まで雜婚を禁じたる亞里安族の根本的思想は依然として保存せらるべきを信すればなり。若し夫れ印度、希臘の兩哲學は其の發達に於ては大に異なるものありと雖も、所詮風土の關係の然らしめし所にして、其の元精的部分に於て其の軌を一にせるものなり。

更に一步を進め、哲學者其物に就て之を見る時は、東西兩洋一層明らかなる差別を見るを得べし。東洋の學者にありては、其の知識は即ち其の生活なりしなり、彼は其の信する所の眞理を以て直ちに生活の原理となす。彼等が知識は實際のものに限りしを以て、即ち實行すべからざる何等の教義を有せざりしを以て、其の知識は多く自らの生活なりしなり。故に論語は孔子の生活にして、道德經は老子の傳記なり。人生問題に於けるソクラテース以下の希臘哲學者は、多少其の教義によりて生活したりと雖も、是れ寧ろ少數のみ。亞歷山、希臘、羅馬の哲學より近世に至れば、其の教義は愈々其の生活に離れ、知識と實際とは哲學者に於て毫も相關する所無きに至れり。蓋し支那には純理哲學無く、自然哲學無く、又論理哲學無く、只倫理哲學ありしのみ。其の教義の人生に密接せしは怪しむに足らざる也。是れはたチヌラニアン人種の特徴なりとす。更に一步を進め、哲學歴史の進行に就きて之を觀る時は、這般の事體は更に明瞭なるべし。支那の學者は數千年の間、一向に孔孟を祖述して敢て其の樊裡を脱する能はざりし間に、如何に亞里安族の思潮が宗教證典の束縛を破り、不羈自由なる理論的考察に依りて活潑潑地の發展をなしたるかは、中世紀に於ける歐洲哲學史を解せるもの

の、何人も熟知する所なり。印度の如き宗教的民族にありても亦然り。吠陀教の僧侶は一時宗教的はた社會的特權によりて一切の外道を壓制したりしが、思想の獨立自由を求むる反抗は、已に六哲學派の中に陰に顯はれたり。勝論派若しくは僧徒派の如きは殆ど無神論に近し、即ちカピラが最上實體の存在を否定し、カナダが元子最初の活動をアドリシタに歸せしが如き、予輩は、彼等と、彼等が陽に排撃せむとせし、異教者との間に、何等の差違あるを見ず(ジエーゴフ氏「吠陀」薄伽梵歌は吠檀達と共に吠陀の最も忠實なる辯護者として知らるるもの、而も『溢れたる泉を以て繞られたる處に井水の用無きが如く、眞智を有せる婆羅門には吠陀は何等の用あることなし』と喝破せるに非ずや。其他カピラが吠陀讚稱の神聖を否定し、ラーマヤナと、マハーブハーラタは自ら吠陀に等しと稱し、マヌの法典に『取るべきものは精神のみ』と訓へしが如き、何れも吠陀に對する反抗の氣焰に非ざるは無し。是の懷疑的傾向は明に六哲學派に萌芽し、佛教に至りて其の頂點に達したるものなり。斯の如き考察的活動の濼々たる發展は、退嬰辭讓を旨とし、目前實際の利害に資縁せる支那人の夢にだも知らざりし所のもの也。

次に宗教的文學に就て少しく比較し見むに、印度歐羅巴民族は各、其の祖先がバクトリアの祖國に於て作りたる神話と傳説とを有し、外界の狀態に隨つて多少之れを變形せりと雖も隨に之を繼續せり。吠陀、アエスタ、ホメール、獨逸及び北歐羅巴の神話は是れなり。印度、希臘の神話は世人多く之を知れり。今波斯の所謂マゾデイズムに就て一言せむに、自然界に不易なる法則の存在すること及び争闘あること、而して是の争闘に善惡の二素あること等は、全く印度イラニアン族の思想にして、純粹なるイラニアン族の關り知らざる所なり。印度にありては、惡鬼は追々宗教的思想より離れたれども、波斯にありては永く其一半を領し、アフラマヅダとアングラマイニユの反對せる善惡の二主義は、マゾデイズムの首尾を貫通せり。而も印度に於ける Indra が Ahi に對する如く、波斯にありて Atar は Azi Dahaka に對し、Indra Vritrahan の Verethraghna に於ける、はた Yama の Yami に於ける等、吠陀的信仰の痕跡を留めて掩ふべくもあらず。且つ七アフラの中の Ahura Mazda が漸くあらゆる神の父として考へらるゝに至りたるが如き、吾人をして吠檀達の梵天に對する印度思想の、一神的傾向を想はしむるものあり(東方聖書中ダラムステラル氏「ゼンド・アエスタ」所載を考)。獨逸及び北歐羅巴の神話も皆亞里安族

固有の宗教思想に本づくものにして、何れも想像力の富贍なると、宗教的向上精神の確實不撓なるとを證明せざるは無し。吾人翻つて支那を見れば、其の最古の記録と雖も、吾人に一の神話を語るもの有らざるなり。支那人は未だ曾て自然現象の中に彼等の宗教心を挑發するものを認識する能はざりしなり。エベル氏は史前の支那人が神話を有せるの證として、周の祖先(?)が巨人の足趾を踏みて孕めりと云ふ傳説を挙げたれども (Weber, Weltgeschichte, I. 56. f.)、是れ決して其の證と爲すに足らざるなり。支那人が思想の理想的ならざりしこと、又其の想像力に乏しかりしことは想見するに餘りあり。

亞里安民族とチュラニアン民族との間に想像力の差違あることの一例として、予輩茲に死に關する亞里安族の思想を擧ぐべし。そもく死てふ現象の怪奇不可思議なることは、夙に印度歐羅巴民族の想像を其の解釋の爲に苦しめたり。波斯人は以爲く、人の死するは Drug Nasu 即ち屍渣が地獄より來り、之に觸るゝものを不潔にし、又之を殺す、之れ惡神 Angra Mainyu 即ち Ahriman の作用なりとせり。希臘人も亦是れと同様の考を有せり (Darmesteter, Zend-Avesta I. Intro. IXXXVI)。印度人も亦然り (Rigveda X. 18. 1)。皆死を一の力と見

なせるなり。屍體を焼く風習は、畢竟、不潔を清めむが爲に出でしものにして、元と亞里安族より起原せるもの也。支那人にありては、亞里安人がかくまでに怪しみ究めたる幽玄無比なる現象に對して何等の疑問をも呈出することを爲さざりき。否、彼等は凡てのものに向つて無益なる疑問を呈出せざりしなり。死は只一例に過ぎざるのみ。

今、世界に於ける宗教的經典を數ふれば、其の主なるもの凡そ六あり、即ち印度に於ける吠陀及び佛教、波斯に於けるゼンド・アエスタ (Vendidad と Khorda avesta とを含む)、猶太教の舊約全書、基督教の新約全書、及び回々教の聖書コラーン是れなり (マックス・ミュラー氏は聖書の五生所と題して支那をも加へたれども、支那の詩、書、易、孝經等は宗教的經典と稱すべからず。マックス・ミュラー氏「宗教の起原」及び「聖書」五三―五五三頁参照)。然るに面積、歐洲に超え、人口、世界の四分の一を

有する支那の大國に於て、一卷の宗教的經典を發見する能はざるは、寧ろ驚くべきことに非ずや。勿論世には聖書無き宗教もあれば (マックス・ミュラー氏「宗教の起原」五三―五五三頁参照)、之を以て全く支那に宗教無しと斷すべきに非ず。然れども予輩は他の理由よりして支那に宗教なく、よし、ありとするも其の意識は極めて薄弱、且つ特殊のものにして、亞里安、セミチックの諸民族に見る如き宗教

の概念を以て之に臨むべからざることを信するものなり。勿論、天、帝、等の文字は、詩、書、以下の古典に數々見る所なれども、其の意義大いに今日の宗教に所謂神若しくは天、帝と異なるものあり。殊に詩經の如きは黍離に「悠悠蒼天、此何人哉」と云へる殷墟の嘆(?)を初めとして、天作、昊天有成命、時邁、執競、思文、敬之、桓、般等に昊天、上帝のことを言ふもの甚だ多しと雖も、吾人は一も宗教的渴仰を認むる能はず。思文の章に天に配すと謂ひ、又天に従ふと云ふが如きは、只、之れ冷淡に自然法を説けるものに過ぎずして、後世の道と同一なり。敬之の章には天は高く上にあれども近く人間を瞻視すと云へるが如き、多少宗教的なれども、而も人生に對する何等の關係勢力を言はず、宗教的意識の根本たる恐怖讚美の情の如きは絶えて之を見ず。頌の如きは、皆君侯に捧ぐるの頌にして、神を頌美するものに非ず(周頌、魯頌、等)。そもく勇者は、各國民族の幼稚なる宗教心にありて神として崇敬せらるゝを常とす。勇悍偉大なる人物に於て、國民は自己より大なるもの、神々しきものを認め、自己の愉快渴仰する理想の實現を認むるを以て、恐怖讚美の情は遂に彼れを神として崇拜するに至る。故に宗教心に富める民族は一神教に達する第一歩として自然の宗教と共に英雄宗教を

有す、是の故に亞里安民族は到る處として其ヘルドを有せざるは無かりき。希臘のベルソス、ヘラクレス、エーデブス、羅馬のロムルス、ロムス、獨逸のジークフリード、ナルフ、デトリヒ、印度の Rama, Krishna、波斯の Kyros 等、數ふるに違あらざるなり。而も古代の支那人は一の勇者を有せざるなり。彼等は見ゆる物の外に見えざる物を要せざりき。あらゆる説明は日常の物質的生活の利害に關して其の價値を有せしのみなりき。

宗教發達の時期を大別して自然的、人視的、心理的の三期となすことは何人も異論無かるべし(マックス・ミュラー氏「宗教哲學」)。自然的とは凡ての現象を作動者として考ふるの謂にして、マックス・ミュラー氏が所謂 All that had to be expressed had to be changed in to actors. の時期なり(同氏「自然宗教論」三九二頁)。之れ人視的時期に達するの階段にして、或る學者は是れを活勢的時期と稱せり(モッフアー氏「なりと記す」)。人視的時期は、吠陀及び舊世界宗教の全體を包含す。心理的時期は即ち婆羅門教、回教、佛教、及び基督教の時代なり。或人が宗教なりと稱する支那の儒教が何れの時代に屬すべきものなるかを考すれば、予輩は更に明に該民族が無宗教の民族として、如何に想像信仰に乏しき乾燥なる實際的生活を営みたるかを想見するに足らむ。

更に一步を進めて文學美術に就て簡單なる觀察を下さむ。ホメールの詩人が二大叙事詩、ペリクレス時代の諸戯曲は言はずもあれ、若しエンヂダード、吠陀、及びブルミーキの諸作を以て支那の古文學に比せば、理想的冥想的なる亞里安族の思想と、實際的記實的なるチュリアン族の心性と、兩々相對して、益、其の特性の顯著なるものあるを見む。英雄崇拜の缺乏せる支那人は、一卷の *Epos* をだに有せざるなり。小抒情詩は詩經以下の諸典に乏しからずと雖も、其の情淺薄、其の意近實、熱誠を缺き、想像に乏し。格調の形式を重んずるの弊は詩的情熱を以て人心を感激するの力に乏しく、散文を以て優に其の目的を達し得べき教訓記録典故を配列して詩人の能事となすに至れり。理想力が自然力に打勝ちて、自然と心靈との間に適當の調和を保ちたるは希臘美術の特性なり。よしやプラトーンの哲學の如く、其の表象は一向に理想的はた共同的にして、未だ個人的特性を發揮するに至らずと雖も、*フオテアス*、*ミュロン*、乃至ブラキシテレースの塑像は、其の理想の高遠にして其の技術の卓絶なることに於ては希臘民族が萬世に誇り得べき所なり。希臘人が精神の健全なる主權を將來に得るの準備として、先づ自然と精神との調和を爲したるに反し、印度人は其の幼稚なる精神はた大膽

なる想像を使役して一意自然を支配せむとしたる結果は、遂に徒らに神祕誇大なる妄想の中に陥りたり。然れども自然美を愛するの精神が躍躍として其の美術の上に顯はれしことは、同じく東洋に邦せる埃及、巴比倫の美術が單に數量的なりしに比して、明に亞里安族の特質を表はせるものと謂ふべし(リユック美術史一、七四—七六頁参考)。其の宗教的目的の爲に作られたる偉大なる建築物、即ち *Tope*, *Vihāra*、若しくは塔(*Stupa*)の如き、後世をして彼等が出世間的信仰の爲に灑盡したる熱誠の如何に莫大なりしかを想はしむるものあり。然れども宗教なく勇者なき支那民族は其の文學に於て叙事詩を有せざるが如く其の美術に於て殿堂(*Tempelbau*)を有せざるなり。建築に關して古代支那人が吾人に残したるものは、水道、壁道、長城の類のみ。彼等は「無限」に感動して、大宇宙の不可思議力の讚美の爲に、彼等が美衣美食を購ひ得べき勞資を抛つ、非實際的なるを覺りしなり。佛敎傳はりてより印度の *Pagoda* 風の建築入り來りたれども、勿論美術的發達を爲さずして已みにき(カリエール文明史に關する美術、史二卷二七—一八頁参考)。繪畫も實用に供するのみにして、壁畫の如きもの、古代に於て之れ無かりしが如し。音樂は儒敎の重器にして、孔子の如きは

を認識するが如きは、彼等の想ひ到らざる所なりき。總じて支那人は美の觀念に乏しき民族なり。蓋し美を愛するの心は自由の心なり。美術はジャスレルが所謂 Die Erfüllung des Gesetzes auf originelle und zwanglose Weise なり。利用厚生の爲にあらゆる精神的活動を束縛せられたる支那人には、自由高尚なる美術を有すべき因縁を缺ける也。希臘人が美術に對する觀念も亦ボサンケー氏が精論せし如く、全く實際的思想を解脱する能はざりしと雖も（ボサンケー氏美學史、吾人はプロチヌスが實感と美感とを別ちたるの教義の已にプラトーン、アリストテレースの中に胚胎せるを見るに難からず。之を支那人に比すれば其の思索の徑行に天淵の差別ありと謂ふべし。

是れを要するに、宗教無き民族は其の思想の理想的ならざるを證するものなり、宗教は所詮理想の上に建立せられたるものなれば也。美術なき民族は其の心性の自由ならず、且つ想像に乏しきを示すもの也。斯の如き民族を實際的なりと謂ふは誤りなるか。一の宗教なく、一の神話なく、一のエポス無く、一の純理想學無く、一の自由技術なく、有る所のものは教訓典故、衣食居住の作法、座作進退の禮儀、君臣父子、戰爭、貨殖に關する教義のみ。如此

民族を實際的なりと謂ふは果して誤れるか。チュラニアンは實に如此民族なりしなり、支那人は實に如此民族なりしなり。

予輩は哲學、宗教、文學、美術に於ける東西兩洋の思想に就て簡略なる比較を試みたり。事體元重大にして、此一小論文に於て其の精細を望むべからざるも、庶幾くは公平なる讀者は予輩の意を領せられしならむか。木村鷹太郎君は予輩が『哲學雜誌百五號』に載せし文中の兩洋比較論を以て全然妄言妄語なりと斷言せられたり。木村君の誤解は予輩敢て之を意とせず、又木村君の理由なき言によりて其の所信を動かすの讀者あるを信ぜずと雖も、予が不文なる、高明なる讀者の中或は木村君と同一の誤解を懐ける者なきを保せざるを以て、茲に言者の責任を充さむが爲に、聊か予輩の説を敷衍せり。妄言妄語と高罵せられたる木村君も亦其の責任を盡されむことを希望す。もし君にして尙ほ予輩の説の詳細なるを望まれれば、予輩は更に筆を起して數十倍の長論文を草するに躊躇せざるべし。

以上は木村君に對する反駁に於ては寧ろ餘論のみ。次回には形而上學と經驗哲學との關係を論じ、木村君の餘りに科學的なる眼孔は全く予輩の意を誤解せるを辯じ、且つ氏が所謂經

驗哲學の性質價值に就て聊か反對の意見を陳述せむと欲す。茲に予輩の豫じめ注意し置かむと欲するは、予が故らに木村君に反して主ら論證的筆法を用ひたる事なり。蓋し他人の足跡に依傍して其の言疵語弊を捉ふるは、極めて容易なる事なれども、之れむしろ俗目を瞞着せむとする、所謂揚足取の卑劣なる所爲にして、眞摯なる思想家の屑とせざる所なりと信ずれば也。

(明治二十九年二月)

木村鷹太郎君に答ふ

予が木村君と辯難の筆を交ふるや、其期する所は世上詭辯家の徒らに言疵を捉へ讒罵を恣にするに倣はず、持久執着具さに事理を曲盡し、各、意見の窮極の異同を明にして而して、已まむとするにありき。そは純理哲學と實驗哲學との關係論は決して一二學者の私論に非ず、吾邦今日の哲學界に於て明に決定せざるべからざるの疑問なりと信じたればなり。然るに不幸にして微意

未だ全く癒ゆるに至らず、醫師は出來得る丈け讀書執筆の時間を制限すべきことを懇切に予に忠告したり。故に甚だ遺憾ながら本號には單に木村君に對して同君が二三の誤解を正すに止む。且つ木村君の問題に對する所論は、既に公にせられたるものみにては甚だ粗笨簡截にして、未だ同君が立脚地を十分に明にするに足らず。故に一兩月の後、予が微恙全く癒ゆるの時、又、木村君が其間に六合雜誌、眞理、及び本誌(哲學雜誌)等に顯はれたる諸種の論議に對し、更に十分精細なる積極的論證を公にせられたらむ時に於て、予の鄙見を遺漏無く陳ぶるも亦晚きに非ざるべきか。世上の識者及び木村君は、予が筆の短きを怪まず、意行きて事從はざる予が衷情を憐察せられなば幸甚。

(一) 木村君が與へたる純理哲學の定義の、全く歴史を蔑視したるものなることは、今更言を待たず。随つて君が所謂純正哲學者とせらるゝものは、殆ど過去の或學者に就て、若しくは君が行論の都合の爲に、抽象せられたる一個の空想に過ぎず。而して是の如き概念の下に予をも投入せられ、實際予の有せざる種々の屬性を強ひて附着せられたるは迷惑是の上も無し。君は何處よりして、予を以て君が所謂形而上學者とせらるゝデータを得られしにや、予はそれを聞かむことを望む。君は他人を認識する方法に於ては獨り非實驗主義を探らるゝ

や、いと覺束無し。

(二) 實驗てふ文字の意義は、木村君の論中に於て甚だ不明なり。君は是の字義を以て殆ど自明のものにてもあるかの如く用ひられしが、予は今日實驗哲學に關しての一要疑問は、實に是の實驗てふ文字の意義を明にすることにありと信する也。實驗を以て毫も純理を取扱はざるものと見むには、實驗科學なる語は自家撞着なりとの批難は、慥に木村君の辯明を待つ程には道理あるものと信する也。

(三) 木村君はロック、ヒュームを楯にして云々せられ、是の二氏の説の已に純正哲學の論據に立てるものあることを注意せし予を以て、他人に内兜を見はすものなりと嘲られたり。よしや木村君は少讀主義(君の造語に倣ふ)の人なりとも、君が古今の大學者と尊崇せらるゝロック、ヒュームは已に熟讀せられたるべし。然るに是の如き言を爲さるゝに至つては、予は聊か君が言行一致せるや否やを疑はざるを得ず。ロックが本體若しくはアリストテレースが第一本體に重きを措かざりしは事實なり。去りながら、知識は諸種の觀念の調不調、若しくは結不結をば、夫の四種の關係に縁りて見たるものなりと云へるは、果して何を意味せるものなり

や。所謂差別と云ひ、關係と云ひ、俱存と云ひ、實在と云ふ、是れはた實驗を超越せざるものなるか。況してやロックが所謂合理的判斷と云ふものの如きは、寧ろやがて木村君の説を否定するものには非ざるか。ヒュームに就て謂ふも亦然り。經驗の反復は吾人をして觀念の連結を感じしめ、遂に知らず／＼是の感を外物に移植するに至るてふ彼れが説は、とりも直さず彼れが拒否せむとする因果の觀念の客觀的基礎を建立せむとするものには非ざるか。加ふるに彼れが所謂習慣其物と雖も、所詮精神的の因果連絡に屬するものに外ならず。されば是れ亦ヒュームが所謂實驗以外に於ける因果の客觀的基礎を是認するものと見ることを得べきに非ずや。獨りロック、ヒュームのみならず、嚴密に謂ふ所の實驗によりて毫も純理の思索を要せずと呼號する學者は、何れの時代にありても、自家撞着に陥らざるを得ざるべし。

(四) 木村君は元來奇言を好む人と見受けらる。形而上學無くば世界は散漫矛盾なるかと論する一項の如き、予は切に君の言辭の輕躁なるを惜しむ。天文學は客觀的に宇宙を統一的に説明し、心理學は一切の事物を將て之を所謂主觀的に説明す。科學豈宇宙を統一的に説明し能はざらむや、と論せられしが如きに至つては、予は敢て君を以て純正哲學の趣味を解せ

ざる人と言はむ。

(五) 予が木村君に於て惜しむ所の一は、君が辯論の世話に謂ふ揚足取に類するもの多きことなり。自家の定見に憑りて他を檢覈せむとする素より論無し。而も充分他の論旨を辨へず、ひたすらに己れによりて人を推すの弊は、其の究まる所遂に偏へに己れを樹つるに非ざれば已まざるの獨斷に陥るべし。一例を挙げむに、君は予が用ひし觀念なる語を捉へて滔々數百言の反駁を試みられしが、予が所謂觀念は廣義に所謂獨逸語のイデーを翻譯したるものなることを諒せられなば、毫も異存あるべき筈無きに非ずや。言語は思想の符號なり、殊に譯語に至つては今日未だ一定するの運に至らず。然るを毫も他の意を忖度するの勞を取らず、自家の用例によりて直ちに他を律し、彼れの此れに非ざるを批難するが如きは、所謂平地に波瀾を起し、故らに事を構へて辯を弄するの地を造るものと云ふべし。木村君の予に對する議論は無慮數十頁に餘れども、少くとも其の小半は斯の如き揚足取的の文字に過ぎざりしは、予がくれぐれも君の爲に惜しむ所なり。

(六) 哲學必ずしも安心立命を與へずとの君の持論は、予之れを領せり。然れども予は君

の意見に従ふ能はず。予の見る所を以てすれば、所謂安心なるものは、君の思惟する如く必ずしも神の存在、若しくは靈魂の不滅の證明の上に立つものに非ず。君が謂ひし如く、洵に哲學は朴訥漢なり、有りのまゝに直言して憚る所無し。眞理は裸體のもの也、或は其の不快なる醜體を示すことあり。然れども人は事實の認識によりて其の命を立て其の心を安んずること能はざるべきか。樂を樂と觀じ、苦を苦と觀じ、裸體なる眞理の當に然かあるべき理法を觀するを得ば、人は是の單純なる認識によりて安心立命するを得ざるべきか。予思ふに、世人は多く(木村君も亦)安心立命と云ふことと、幸福と云ふことを混雜せるが如し。安心立命せるもの毫も厭世家となりて自殺し得ざるの理由あらず。人は靜平なる心狀と確實なる意志とを以て自殺を決行し得べきなり。安心と満足とは由來其の類を異にするもの也。予は夫のスピノザが、世には厭世もなし、樂天もなし、只、認識あるのみと云ひしは實に哲學者たるものの安心を尤も明に表明したるものと思惟す。予が先に哲學者は人間最高の知識の上に其の安心を求むるを得べしと謂ひしは、是の意に外ならざりしなり。

(七) 木村君は議論の方法に於て、吾々素樸漢の未だ學び得ざる(又學ぶを欲せざる)幾多

の長所を有す。俗に所謂我田引水法の如き、蓋し其一也。君は「日本現代の哲學者中、聞高、山君の如き主義の人ありと雖も、有力なる多数は、恐らくは實驗論に傾向せり」とて、外山、元良、井上、中島の諸教授を引かれたり。知らず、君は何によりて予の主義なるものを知り得しか。予の主義なるものの井上、中島の諸教授と大いに同じからざることを如何にして知り得しか。知らず、又是等の諸教授は木村君の所謂實驗論者と稱せられて果して満足せらるべきか。予は寧ろかゝる手近の事項を斷ずるにさへまかく非實驗的なる木村君が、如何にして獨り君が深遠なる哲學に於て實驗的なるを得たるべきかを驚くなり。

(八) 嚴密に謂ふ所の實驗的知識が、世に所謂實驗科學となるの順序と、所謂實驗科學なるものが、所謂純理哲學に移るまでの徑行とは、其の方向に於ては同じきも、世の純理哲學を主張するものの論ずる如く、其の性質に於て全く同じと謂ふを得ざることは予之れを認む。然れども已に所謂實驗科學の成立を以て一部の事實を説明するに必要なりとせるものは、何故に獨り純理哲學によりて全分の綜括を爲すことを拒否するか。蓋し是れ世に解すべからざるものの一なり。

(九) 純理哲學は素より實驗哲學に基く。實驗科學の不斷に進歩せむ限りは、是等科學の結果を綜括して根本原理を案定する純理哲學も亦不斷に改造せざるを得ざるべし。故に原理自らとしては絶對的に眞理たるを得べからずとするも、當代學術の進歩の程度に於て、最大なる蓋然理を以て案定し得らるべき最高級の原理たるに於て毫も妨ぐる所無し。若し實驗科學の最後の發達を竣ちて而る後、初めて斯の如き原理を案定すべしと謂はば、吾れ人は未來永劫如何なる哲學的世界觀をも有すること無かるべし。何となれば、科學は今日吾人の想像し得る限りに於ては、何れの時代に於ても常に發達の餘地を有すべければなり。吾れ人が今日の狀態に於て今日の純理哲學的考察を要すること、洵に已むを得ざるなり。

(十) 木村君の如き人は、かゝる案定を無用なりと謂はむ。予は如是笑ふべき批難に答ふる代りに、試みに君に反問せむ。人間の或者は何故に哲學を要するかと。哲學を要せざる人に哲學の必要を悟らしめむことは、何人も恐らくは能はざる所、是を以て獨り予に責むるはそれは酷いと云ふもの也。純理哲學を案定するは人心の至性なるを證せよと木村君は頻りに迫れども、予はむしろ哲學史の事實なるを承諾せむ人の、如何にしてかゝる無謀なる質問

第 二 期

（期一第）案思及論時

を試み得べきかを君に反問せむとす。

最後に予は木村君に向つて、予が目下の事情に於て爲し得べき最大の敬意と愛情とを捧ぐ。
文壇の敵、私交の一味、學者の雅量、當に然かあるべきものに非ずや。

（明治二十九年四月）

明治思想の變遷

(明治三十年史總論)

明治初年以來三十年間に於ける最近の歴史を述ぶるに先^さちて、それが根柢となれる國民思想の推移を尋ねむに、そもく維新の當時にありては、幕府^{たふ}仆れて王政^{いじ}古に復^かへりたれども、未だ然るべき政體だに定まらず。嘉永このかた、一國の怖れとなりし外國の事情も定かに知る由もなく、尊王討幕の餘焰は未だ志士の胸に消えざれども、誰れありて國論の向ふ所を一にし、萬邦對峙^ちの中に我國民に千萬年の進路を示せしものなし。「廣く天下の公議を盡し聖斷を仰ぎ、同心協力共に皇國を保護仕候へば必ず海外萬國と可^こ並立^り候」とは慶喜將軍が大政奉還の奏聞中の語なれども、狼狽爲す無きのさまはこゝにも自^{おの}から現はれたり。洵に數百年の長夢より目ざめたる國民が、頭を擧げて世界の大觀に眩惑し、一朝かゝる亂離の世に處し、剩^{あま}へ外邦の交渉を控へたるもの、如何でか明確なる國民思想を作り得べき。今や王政維新を

促したる國學神道は是の國家の大局面に何の力もなく、往にし日の攘夷の志士も亦爲すに所無く、國民一般の思想は謂はば渾沌の裡に自然の成行を待てる有様なりき。幸に聖天子上に在りて、銳意勵精、補弼の翼贊を納れさせられ、天佑を保全し、大業を克復し、茲に新政の大本、百代の鴻謀を立てさせられ、天下の人心を率ゐて向ふ所を一にせられたるは、洵に天地の佑澤、我國家の慶事なりとこそ謂ふべけれ。誠にかゝる危殆の世にありて、國家の中心として萬民を率ゐさせられたる我皇室の稜威功德の程は、我國人の夢忘るべからざる所なり。されば維新以降の國民思想は、一に聖天子の睿慮によりて其の方向決まりと謂はむも不可なし。明治元年三月、畏れ多くも聖上には親しく紫宸殿に臨ませられ、公卿諸侯を率ゐて天地神祇を祭り、五事を以て天下の億兆に誓はせ給ひしは、とりも直さず我國民上下の思想を統一せむとの聖旨なりき。後年の國是は一に是の五事よりして定まれるものなれば、こは吾等臣民の金科玉條として日夕體認すべきものなり。

- 一 廣く會議を興し萬機公論に決すべし。
- 一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

一 官武一途、庶民に至るまで各、其志を遂げ人心をして倦まざらしめむことを要す。
一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。
一 智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

是の五つの事は、洵に當代の急務にして、かねて永世の基礎なり。勅意の宏遠なること誠に感銘に堪へざるなり。上は國交政治より、下は文學美術に至るまで、一として是の主旨に本づかざるものなし。廣く會議を興し萬機公論に決すべしとは、まさしく立憲代議制の濫觴にして、官武一途、庶民に至るまで各、其志を遂げしむとは、即ち門閥の舊習を打破し、廣く人才を天下に求むるなり。智識を世界に求むとは、廣く世界の文明を收容し、長短互ひに相補刪して我邦の新文明を開くなり。三十年間明治の歴史は何れか是の大御心に本づかざるべき。けに是の五事の詔勅は明治思想の根源とこそ謂ふべけれ。

遮莫、維新の革命によりて、社會百般の制度は殆ど其の根蒂より破壊せられたれば、世はさながら餓ゑ渴えたるものの如く、苟も是の缺陷に投じて新世紀に處するの道を示せるものは、最も熱心に歡び迎へたり。けに聖詔の示す所によりて、大體の方向は定まれるものから、

實行の機に臨みて聊か望洋の嘆を免れず。時の人が新に唱へたるものが果して永世の主義として依頼するに足るものか、其利、何處にありて其弊、何處にかある等の問題は、未だ思料するの遑なく、ひたすら目前の急需に迫られて、新なるものを迎ふるに忙はしかりしぞ自然なる。斯くて先づ入り來れるものは西洋主義なりき。こは一旦國を開きて西洋の事物に親しめば、見るもの、聞くもの、想ひしに優りて驚かるゝもの多かりければなるべし。

是の主義を輸入するの縁となりし事情はくさくあれども、朝にありては貴顯高官の人々歐米諸國を視察し、歸りて彼邦の文物の我れの比に非ざるを唱へしと、野にありては福澤諭吉、中村正直（敬字）などの諸學者が私學を開きて盛んに洋學を世に擴めしとは、其最も直接の縁となりしならむか。就中福澤氏は、慶應年間より已に是の目的の爲に今日まで是の年號の名を冠せる私塾を東京三田に開き、政治、道德、風俗、習慣、一に西洋の功利學によりて子弟を訓へたるは、是の主義の擴張にはゆゑしき勢力なりき。其の所記の一二の例を舉げむに、我國人は古より天理人道を一定不變、萬古動かざるものの如く思惟すれども、こはいみじき誤りなり。『忠臣二君に仕へ、甲州武士が徳川其他に仕へて働きたるも、また天理人道に

戻りたるに非ず。年若き寡婦が落髮して尼寺に入り、亡夫の菩提を弔ふも天理人道なり。再緣して子を生み、よく其子を教育するも天理人道なり。今の世に兄弟同胞が夫婦とならば天理人道に戻るならむと雖も、アダムとイブの子供等は誰と縁組したるや。また日本書紀に仁徳天皇は八田の皇女を皇后とすとあり、然るに皇女は天皇の妹なり。今より思へば不思議なれども、其の時代には矢張り天理人道に基きし也』云々と説きて、本邦古來の固陋なる道德を根本より覆へし、又『權論』と云ふを説きて、『楠正成は我邦にて古今に双び無き忠臣の鑑と稱せらるれども、湊川にて死なでもよきに死したるは、是れ權兵衛が禪にて首をくゝれると同じ事なり』と論じ、苟も事の實際に益なくば、其の行爲毫も賞するに足らずとの意を述べたり。また世の人が空名に拘はりて實益を知らず、爲す所概ね迂濶なりとて、『學校に石盤を用ひて數學には明なれども、店先の帳合には暗く、作文誦誦は上手なれども、手紙の文句は出來ず、窮理書は讀みたれども、竈の築き様と流しの水はきには工夫を用ふるを知らず、化學の吟味は經たれども、甘酒の作り様と豆腐の製法は未だ之を聞かず。或は十二三の娘子が西洋流の學校に入り、又は西洋人の手に就き、西洋音の唄を習ひ、西洋風のメリヤスを組

み、却て黽袋の縫ひ様も知らず。或は和漢洋の書を読みて三十一字も少しは出来れども、人身窮理は忘却して自分の體の骨も知らず、風を引いて容體を述ぶることも知らず」云々と説き、從來の教育が實際の世事に疎遠なるを諷せり。福澤氏の是等の説は、今日より見れば何でも無き事なれども、維新草創の當時、廢れたりとは謂ひながら古來の武士道、儒教、國學の教尙ほ人心に浸潤せりし際に於て、敢て斯かる説を唱道していさ、かも忌憚する所無き其の識見と膽勇とは、眞に敬服すべきものなり。斯かる人ありて是の實益功利の學を呼號し、其の荆棘を披き置きたればこそ、爾來諸般の西洋文物の斯くは容易に入り來り得しなれ。想へば日本の新文明が是の「三田の先生」に負ふ所如何ばかり大なりけむ。其説の往々奇矯にしてやや正徑に遠ざかれるものも無きに非ざれども、病に應じて藥を與ふるの道としては、寧ろ其の眼識の明を稱うべきなり。「福澤全集」が明治の小歴史なりとの意も是の邊りに存すべし。福澤氏の外に中村正直氏ありて、東京小石川に同人社と云へる私塾を開き、均しく西洋の功利主義に本づきて社會の教育に力め、英人スマイルズ氏の諸著を譯して「西國立志編」、「西洋品行論」などを公にせしは、福澤氏と共に其功没すべからざるものありき。されど其説

は、福澤氏のかた遙に平民的、通俗的なりしが爲に、社會の感化力に於ては中村氏のかた遙に劣れりしは是非も無し。

斯く上下の風潮、西洋主義に傾きければ、西洋語、殊に英吉利語を學ぶもの年毎に増さり行き、随ふて幾多の著譯書は踵と跡と相接して世に出でぬ。其三四の例を挙げむに、歴史には萬國新誌、泰西通鑑、西洋英傑傳あり。地理、風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞録あり。修身倫理には、智氏家訓、勸善訓蒙あり。政治經濟には、新政大意、立憲政體略、萬國公法、民約論、銀行論あり。其他、開化問答、文明開化、世渡りの杖、道理圖解等、一々枚舉に遑あらず。鐵道電信より衣食住百般の有形的事物が、靡然として洋風に化しつゝある間に、是等の著譯が諸官私立學校の洋學教授と相呼應して、如何ばかり當時の人心を風化せしやは、恐らくは今の人の想像し得ざる所なるべし。「民約論」の如きは殊に甚し。是の書は前世紀の佛蘭西人ルソー氏の著にして、極端なる民主論なり。其の要旨は「社會の主は人民なり、君主政府は人民が自己の利益の爲に造作したるものなれば、人民に都合悪ししと見る時は、何時にても是れを改廢するの權は人民にあり」と云ふにあり。是れ佛蘭西大革命の一原因

を爲せるまで彼邦にては勢力ありたる書なり。是の書一度ひとたび中江篤介氏によりて譯されてより、急進改革を喜ぶの士は、争ふて是れを讀み、其説を鼓吹し、民権自由の聲一世を聳動せり。西洋に心醉せる當時の社會も亦漫然まんな是の詭激の言説を看過して多く怪まず、一部の保守の士、もしくは先覺の士の外は、そが我が民情國體と相容あひまれざるものなることを認めたるものなき程なりき。けに代議政體は明治元年の五事の御誓文に本づけりと云ふものから、そが開設をして一日を速はやからしめたるは、是の「民約論」の如き書によりて淘汰せられたる急進者流の運動うご與つて力ありと謂はざるべからず。

斯く民間思想の大勢が西洋主義に靡ける間に、朝廷にありても人材公選の詔あり（明治二年）。明治四年には廢藩置縣を斷行し、五年には初めて京濱間の鐵道を開業し、同じ年に從來の太陰曆を廢して太陽曆を用ひ、八年には政體改革の詔を發し給ひ、かの御誓文の意を擴充し、元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置きて審判の權を鞏かたくし、且つ地方官會議を召集して民情疏通の途を披ひらき、漸次に立憲政體の完成に近つかむことを期せり。當時朝野の心を一にして改進の道を急げる様は是等の事實に就て見るも略明ならむか。

茲に是の革新の氣勢を助長するに少からざる力ありしは新聞紙なり。こは朝野の間に立ちて、當時にありては活眼達識の士を多く記者として網羅したりければ、其の説く所は幼稚なる當代の社會にとりて、光明となり指針となれるも少からざりしなるべし。新聞の由来を尋ねむに、元治げんちの頃、米人某が横濱に於て毎月數回、期を定めて刊行せし「新聞紙」と稱せるが本邦新紙の嚆矢ならむ。其他維新の前後、京濱間に萬國新聞、内外新報、内外新聞、藻鹽草等の數種ありしが、其頃のものには社説と云ふもの無く、唯、公私の報導を秩序なく臚列せしに過ぎず。新聞紙本來の品性は、其の當事者にも知られざりし程なれば、まして社會の是れに對する眼も甚だ低かりしものなるべし。されば兎にも角にも新聞紙の體裁を具へたるは、明治五年以後に出でたる東京日々、京濱毎日今の毎日、報知、朝野、曙の諸新聞に初まれりと謂ふべし。是等新聞の記者は如何なる人々なりしかと云へば、東京日々の福地、末松、京濱毎日の沼間、報知の矢野、藤田茂吉、朝野の成島、末廣、曙の岡本武雄等、當代の名士にして、中には然らざる人もあれども、其の多くは何れも西洋思想を抱持し、所謂新文明の先覺を以て自任せし人々なりき。されば其の主張唱道は、其説に漸急の差別こそあれ、西

洋思想を以て一世を率ゐるむとせるものに非ざるは無し。人若し當時の新聞紙をとりて其の論説を讀まば、西洋主義、歐化主義が紙面に横流せるを見む。

けに當時の社會に最も勢力ありしは、一言すれば歐化主義なりき。是の主義は其の現はれたる形の上より見れば種々あれども、其の根本の目的は我邦一切の文物を西洋化するにあり。嘗に其の衣と食と住とを洋にするのみならず、嘗に鐵道を布き、電線を架し、其の外部の生活を洋にするのみならず、國體も、民心も、出來得るならば其の髪をも、眼をも、皮膚をも洋にせむとするにあり。素より當時の急進者流と雖も、斯くは明に其の目的を自覺せず、唯、漠然何とはなしに洋風を欽慕して是れに摸倣せしならむも、其の形迹に就て見れば、一般に甚だ極端無謀なりしなり。随つて是れより漸く尊外自卑の風習を刷致したるは、是れ亦おのづからなる勢ひなりき。是の外を尊ぶの傾向は、明治の初年にも已に明に存せしことは、當時の横濱日刊新聞に左の如き記事あるにても知らるべし。

此程横濱に居られし大原前侍從殿、昨十一日九ツ半(編者註、今午の午後二時)に御入城に相成る。……さて通行の道筋にては、家々戸を鎖し、細き紙札にて目張りをなしたり。通行の時、道

路にありし士民は皆平伏蹲踞せり。然るに西洋人は、更に我國人の爲す如くせずして、馬上にありて傲然と是れを見物するに、誰も咎むることをせず、聊か故障あること無し。實に日本人の開けしことは是れにて知るべし。云々。

數年前には、一諸侯の行列を横きりして外人を斬り捨てにせし勢ひなりしに、今は却て外人の無禮を咎めざるを開化せりと賞讃す、時勢の變遷を見るべきなり。横濱は夙に互市場なりければ、外人崇拜の風も最も早く行はれたるべく、之に反して全國是の風潮に靡きしは、明治十年近くにもありしも亦怪しむに足らず。當時の國民は、外を容るゝに急にして内を顧みるに遑無く、遂に全く我が國粹を抛却して偏へに外物を尊びしも、一國思想の發達上已むを得ざる一階段なりと謂ふべし。然れども是の傾向に對して全く反動無きに非ず。明治六七年度の頃一時盛んなりし皇學の如きは、其一例として見るべし。

願ふに尊皇敬神を以て立てる國學が幕府と相容れざりしは自然の勢ひにして、斯道の豪傑平田篤胤の如きは殊に慘酷なる迫害を受けたりき。然れども幕府の權威漸く衰へ、其の根柢漸く搖ぎそめし頃より、國學者流は多年の壓制に對する反動として、陰に陽に尊王討幕の氣

勢を助け、維新の大業を成就する上に於て多少の力を寄與したり。然れば、維新以後の社會が上下を擧げて偏へに西洋に心酔し、是の大業を成すに力ありし本邦固有の國學を顧みず、却て是れを芟除せむとするの有様を見て、争でか多少の反動無くして已むべけむや。殊に一方には、朝廷にては國學の徒を用ひて復古の政を助けしめ、明治元年の祭政一致の詔を初めとして、同三年には神靈鎮祭の詔あり、大教宣布の詔あり、教部省を設け教導職を置き、神道國學を布く上に於て多少力を盡せしかば、歐化主義の大勢動かすべからざる際にも、社會の一部には國學の餘焰全く消えずして残りき。是の餘焰は明治六七年の頃に至りて一時に揚がり、國學神道の研究を以て東京に遊學せる書生一時頗る多かりき。されど、其勢固より旭日中天の勢ひある歐化主義に比すれば十の一にも足らず。例へば一枚の板を提げて江河の横流を防ぐが如く、何等著るしき効果を貽さざりしは、是非も無き勢ひなりと謂ふべし。

かくて所謂皇學者流の些細の反對を蹴倒して、歐化主義は一瀉千里の勢ひを以て進行せり。是の際、社會上下の事の注目すべきもの多々ありと雖も、是の歐化の傾向は板垣、副島、後藤、江藤、四參議の民選議院設立の建白、及び是等の諸氏を中心とする愛國公黨の組織に到つて

其の頂點に達せりしが如し。

所謂民選議院設立の趣旨と稱するものは、今日より見れば誠に單純幼稚なる思想にして、所詮は歐米各國の政體の美に眩惑し、民約論的思想を以て是れを解釋し、是れを我邦に施さむと力めたるものに過ぎず。我が國體民性の特質、歴史、及び當世の現勢に就ては殆ど顧みる所無し。其の觀察素より一面に偏れるの詆を免れず。四參議等の建白の要旨に曰く、「方今政權の歸する所、上皇室に在らず、下人民に在らず、而して獨り有司に歸す、是れを以て政令百端、朝令暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ。是れを振肅するの策、唯、天下の公議を張るにあり。天下の公議を張るは、民選議院を立つるにあるのみ。夫れ人民、政府に對して納税の義務あるものは、理として當に其の政府の事に關與するの權利あるべし。是れ天下の通論にして、民選議院の據りて立つ所の原理なり」と。同時に建白者諸氏が組織したる愛國公黨の「本誓」に左の一條あり、以て當時民選議院を主張したる諸氏思想の如何に「民約論」に感化せられしかを知るべきか。曰く、

我輩の斯の政府を視ること、斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外なかるべ

し。而して吾黨の目的は、唯、斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして
自主自由獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ。

同じ「本誓」の中に、『斯の主義は愛君、愛國、一片至誠の上よりの發憤』なりと辯じ、天
皇陛下御誓文の旨意を遵奉するの意に外なしと述べたり。されど當時諸氏は、是の如き極端
なる民約論的民主思想と兩立すべき『忠君愛國』の道とは、果して如何なるものなるべきか
を明に自覺したりしや否や、洵に疑はしき次第なり。是の時、民選議院の主唱者の一人板垣
氏が、高知(板垣)の青年を鼓舞して起したる立志社の趣意書を見るに、實に左の如き言あり。

夫れ我輩(板垣)しく日本國の人民たり。則ち三千有餘萬人盡く同等にして、貴賤尊卑の別な
く、常に其一定の權利を享有し、以て生命を保ち、自主を保ち、職業を勤め、福祚を長
じ、不羈獨立の人民たるべきこと昭々乎として明白なり。是の權利なるものは、威嚴以
て是れを奪ふを得ず、富貴以て是れを壓するを得ず、蓋し天の均しく人民に賦與する所
のものにして、而して斯の權利を保有せむことは、亦人民の宜しく勤勉すべき所のもの
なり。云々。

こはまさしく天賦人權論にして、帝王にも乞食にも同等の權利ありとするものなり。

斯かる極端にして且つ幼稚なる思想によりて國家の大事を料理せむとしたるも、所詮は明
治初年以來の歐化主義の頂點に達したることを表はせる也。是の過激なる歐化主義は、端な
くも國民の間に枉屈せる保守主義の反動を惹起し、其の結果は遂に民選議院反對論となりて
顯はれぬ。こは當時獨逸學者の泰斗なる加藤弘之氏によりて其緒を啓き、西周、森有禮諸氏
是れに和して一時新聞紙上の論壇に兩派互ひに火花を散らして戦へり。其の意見の要に曰く
『制度憲法を創定せむには、先づ邦國今日の世態人情を詳察して、是れに恰當適切なるもの
を撰ばざるべからず。今日未だ進まざるの民智に委ぬるに民選議院を以てせば、是れ愚人を
して愚論を闘はしむるに過ぎず。民選議院の主論者は、ルソー氏の説により、政府を以て全
く約束より成るとするも、政府の事を與知するの權利は納税と相對する權利にあらず。況や
一國の政府は、必ずしも約束に起るものにあらず、古來歴史上の沿革、其の源を異にするも
のあるに於てをや』と。

是の保守説の見るところは、歐化主義者流の見るところとは大に異なるを認むべし。歐化主義

者流は飽くまで民を以て主となし、政府君主を以て民の爲に存在せるものとなす。然るに保守主義者流は、各國特別の歴史に本づきて、政府と人民との關係おのづから定まれるものがあるが故に、政府は必ずしも人民任意の約束に成るものにあらずとなす。兩者正に相反す。然れども當時の言論に就て見れば、保守論者が指摘せるは、我政府と人民との關係は歴史的に成りて歐米諸邦の比にあらずと漠然と言へるのみにて、一も國體と云ふことに言及せず。想ふに政體と國體との差別の如きは、其の深く區別せし所に非ざりしならむ。且つ我邦にありて「政府と人民との關係」の如何なる點が、如何に歐米各國と異なるか、其の歴史上の沿革の那邊に彼此の差ありや等の疑問に對する精細なる解釋に至りては、是等の論者一言も説き及ばざれば、其説に果して如何程の確實なる論據ありしやも知り難し。想ふに唯、漠然たる信念と觀察とに本づき、其の保守的感情に導かれて、歐化主義の極端説に反對せしに過ぎざるべきか。

民選議院に反對するものには、尙ほ早しとするものと、絶對的に非なりとするものとの二種ありしが、廟議は遂にかの五事の御誓文に本づき、欽定憲法制定の詔を奏請し(明治九年九月、

後に到りて國會開設の期をさへ定めたり(十四年十月)。こは素より萬機公論に決する當初の御誓文を貫通する聖旨に出づと雖も、抑、又一世輿論の向ふ所を容納させられたる大御心に依らずむばあらず。

政治上に於ける歐化主義の流行は、國民思想全體の反射とも見るべきものなれば、それが社會の内部に於ける影響も亦推し測らるべし。されど社會の上に於ては、一國の政體に於けるが如く直接の利害未だ甚だ明ならざるを以て、是れに反對する主義も亦現はるゝこと比較的に遅かりき。されば民選議院反對の聲可成りに喧しき時にも、帝政黨の如き保守主義の政黨の現はれし時にも、君父に對する義務よりも自己に對する義務を先にせる「勸善訓蒙」、「智氏家訓」等の譯書は依然として倫理教科書として國民教育に用ひられ、殊に西南戰爭終りを告げて、西洋心醉の政治家内閣を組織するに及び、西洋の文物は上下の社會を擧げて歓迎せられたり。自由主義の政黨が其の機關新聞紙上に鼓吹せる民權論自由論は、依然として一部の社會を司配し、其の首領が、「板垣死すとも自由は滅びず」と叫びたる言葉は、改革に熱心なる人人には殆ど聖者の福音として傳へられき。天賦人權の説は更に男女同權の論を産み出だし、

女子にして所謂憂國の志士と共に囿圍の人となるものすらあり。革命に關する翻譯小説は盛んに讀まれ、リットン、ヂスレーリ等の政治小説も亦盛んに世に出でき。當時和漢學者の間に多少の反動はありしかども、さしたる効果もなく、從來の漢字を排せむとする「かなのくわい」、さては國字をも共に捨てむとする羅馬字會等、踵を接して起りき。獨り學術の上にて西洋の我れに優れるのみならず、其の文學にまれ、美術にまれ、我れに取るべきもの無しとせられたれば、和漢の古書畫は殆ど其價を失ひき。西洋風の假裝會、舞踏會は盛んに獎勵せられ、大學學生が女學生と混同して英語にて忠臣藏を演じたるも是の頃なり。西洋人と云へば、何處か我れよりも高等なる人間の如く思はれ、社會一切の事物の中にて我れに取るべきもの殆ど無しと思惟せられき。斯かる時に弘道會の如き日本固有の道德主義を唱ふるもの起りたれども、其の説く所は固陋に過ぎて、汎く時の人に容れらるゝに至らず。佛教界の人は是等守舊派と連衡し、破邪顯正の旗幟を翻へしけれども、基督教は歐化主義の後援に據りて前後比類なき全盛を極めたり。世界的眼光を以て日本を觀察すと呼ばはりたる徳富蘇峰氏の「將來の日本」は、一世の讀書社會に歡迎せられ、續いで世に出だせる雜誌「國民の友」

も亦青年書生に愛讀せられき。然れども其の唱道したるは「民約論」の亞流なる平民主義なりき。其の系統より云へば、無論歐化主義の一產物にして、我が國體民性の特質、本邦固有の美所長所等に就ては一も言ふ所なかりき。兎に角、明治二十年の頃まで、國民思想の大勢を壟斷したるものは、西洋主義、歐化主義、隨つて外物摸倣主義、外人崇拜主義なりき。茲に一言すべきことは、吾人が是迄西洋主義、もしくは歐化主義として呼び來りしものの中に就て、審らかに是れを検すれば、更に數種の小分派の對立を見るべきことなり。其の旗幟の最も鮮明なるもの凡そ三あり。第一は英吉利流の功利主義にして、こは福澤氏を首めとして、すべてミル、ベンサム等の説に私淑するもの唱ふる所なり。第二は佛蘭西流の自由主義なり。こは「民約論」の譯者たる中江氏を首めとして、大井、板垣、諸氏の祖述したる所なり。第三は獨逸流の國家主義にして、こは加藤、海江田、諸氏の唱ふる所にして、近世獨逸の國家學者スタイン、ビーデルマン諸氏の説に本づく。是の中、尤も根蒂深く且つ勢力あるは、無論英吉利流の功利主義なり。然れども是の主義は主として社會の實利にのみ注目し、政體等に關する大問題には比較的冷淡なりき。然るに佛蘭西流の自由主義は、社會の根本的

改革の根源を政體の革新に存せりとなし、目前卑近の功利を措きて、羣地に是の大問題を捉へて是れを鼓吹せり。是れ民選議院の首唱者が福澤氏一派の功利論者に非ずして、主として佛蘭西流の自由論者なりし所以なり。若し夫れ獨逸流の國家論者は、本邦の舊習を打破して西洋の新思想を輸入することに於ては、他の二派に均しと雖も、政治の問題に關しては全く佛蘭西流の自由論者に異り、飽く迄君主の無上權を主張し、萬民平等の權理を認めず。是れ民選議院の設立に反對せるものの中に、純然たる保守論者の外に獨逸學者の多かりし所以なり。社會上の勢力の上より見れば、獨逸派の勢力微々たりきと雖も、政府の要路に當れる人々の中には、彼地に遊びて國家學の講義を聞き、もしくは其の感化を受けしもの割合に多かりしを以て、官吏社會には勢力ありき。かく西洋主義の中にも、おのづから三黨分立の姿ありけれども、民選議院の問題に關しては、繁を避けむが爲め其の大勢の上より歐化主義と保守主義の争として説述せり。先に述べたる如き歐化主義の勢力漸く其の極端に近づくに隨ひ、二十年間の新教育新時勢を経験せる國民は、漸く中心に於て其弊を覺り來りぬ。今や一反動の提起せらるべき時機は方に迫りぬ。是の反動の氣勢を代表して駭起したるものは雜誌

「日本人」を機關とし、志賀、三宅、諸氏によりて唱へられたる所謂國粹保存主義なりき。國粹保存主義とは如何なる主義ぞと云ふことに就きては、當時區々の論戰ありしが、詮ずる所、其名の示すが如く、我が國粹を保存するにあり。既に保存すと云ふ以上は、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや論なし。而して特に是の國粹を保存すべきを主とする以上は、是れを打破するの反對主義を預想するも亦勿論なり。國粹保存論者は、素より夫の歐化主義を以て其の反對主義と思惟せること明なれども、保存せらるべき國粹の何なるかに就きては、明に説示する所無かりしが如し。唯、漠然彼れの長を取りて我れの短を補ふは、是れ眞に一國文明に裨益する所以なり、夫の一も二も無く外邦の文物に心酔して、我れの長所美所を拋棄するは甚だ不可なりと説けるに過ぎず。されば其の所説の多少明確を缺きたるより、反對論者より無差別に歐米の文物を排斥し、我が佛のみ獨り尊しとする固陋なる保守者流と同一視せられたり。こは誠に誤解なるべけれども、其説の消極的方面を説くに精しくして、積極的方面を説くに粗なるが爲に、國粹論者が自ら招きたる廉も多少あるべしと思はる。所詮は國粹其物の性質に就て、確的なる科學上の説明を缺きたるの弊なりと謂ふべきか。

然れども國粹保存主義其物の價値は如何にもあれ、それが國民思想を覺醒し、是れまで徹上徹下に跋扈し來りたる歐化主義の適否に就て一大猛省を促したる功績は、明治歴史の上に特筆すべきものなり。けに一個の主義の勝敗は、一時の論戰に於て決せらるべきものにあらず、其の主義の依りて以て起りたる國民思想の根柢にして確乎不動のものならむには、終には最後の勝利を占むべきなり。國粹保存主義は、決して二三氏の創意に興りたるものに非ずして、維新以來、歐化主義の爲に多年の屈辱を忍びたる國民精神の自然の發露なりとすれば、根柢たる國民の精神にして衰へず渝らざる限りは、依然として其の勢力を保持すべし。其名或は變らむ、それを唱ふる人も或は變らむ、其の説く所の説の形も亦或は變らむ、されど其の主義の實質に至りては時勢の進歩と共に益進歩して、決して衰退すること無かるべし。國粹保存主義は髓に是の如き主義なりしなり。

けに國粹保存主義の唱へられたる頃より、國民思想の漸く其の方向を轉じ來れることは掩ふべからざる事實なり。從來にありては、國民の思想を動かしたる主力は、常に西洋思想なりき。かの民選議院の爭論の際にありて、是れを主唱せるものは素より論を待たず、是れに

反對せる主力も亦西洋學者なりき。國學神道の系統を引ける純粹なる日本主義論者も是の中にありしかど、それは極めて少數にして、特に言ふに足らず、爭論は主として西洋學者の爭論なりき。故に加藤氏一派の獨逸學者が民選議院を尙早とし、若しくは否認するにも、其の論據は一に西洋の學理にあり、一も本邦固有の國體民情を根據として立論したるものあらざりき。然るに國粹保存主義は、其の根本の精神に於て是等の説とは異り、其の立論の基礎を外邦の學理に求めずして、翻つて本邦の特質に求めたり。其説は如何に粗笨にもあれ、其論は如何に幼稚にもあれ、兎に角、獨立の日本思想によりて歐化主義に對壘せしは、實に是の國粹保存主義を以て初めとすべし。是の點に於ては、是の主義は髓に今日の日本主義の先驅たりしもの也。

斯く國粹保存主義の勃興によりて代表せられたる如く、國民的意識は漸く其の自覺の域に進みたれども、未だ俄に歐化主義積年の勢力を凌駕する能はず、其の争ひ漸く激しからむとせり。宗教界に於ては、佛教は保守思想と相呼應し、以て歐化主義と密接の關係ある基督教を攻撃して甚だ力め、漢學は國學と相携へて遙に佛教に聲援せり。明治廿二年二月に於ける

憲法の發布は、我が欽定憲法の性質を明にし、かの英佛諸國に於ける諸種の憲法と日を同うして論すべきものに非ざるを知らしめしかば、多年佛蘭西風の民約憲法を望みたる自由論者は、定めて多少其の空想したる所と違ひたるを驚きたるべし。然れども是れより政體上に關する急進論者の聲は、憲法解釋の上に多少の異議を挾むの外、氣勢頓に衰へ、獨逸的國家學と抱合せ一種の國體論は、汎ねく國民の政治思想を其の根本に於て統一せり。然れども社會上教育上に於ては、西洋主義猶ほ未だ力を失はず、國學、儒教も亦一方に割據して各其の雄を競ひ、人々其の信する所によりて左支右吾し、一般國民の其の適歸する所に迷へるの觀あり。偶、教育勅語の煥發するあり、國論是に於て一定し、忠君愛國、舉國一致を以て國民道德の主旨趣として奉體するに至れり。是の勅語の教育上、社會上に於けるは、猶ほ憲法の政治上に於けるが如し。共に人心を統一し、國民思想の大方向を規定するの一大要素なりき。

斯く記し來れば、我が皇室が實に我が國民全體の依頼する大支柱、大中心なるの事實は、いよく明なりと謂ふべし。先に維新草創の際、舉國亂離して爲す所を知らざるに當りてや、かの五事の御誓文を以て天地億兆に誓はせられ、茲に明治新文明の大方針を示し、民をして

其の向ふ所を知らしめられき。西洋心醉者流が、民選議院の設立を建白するや、國體の特性民情の現態を鑑みさせられ、假すに年月を以てし、國民をして其の準備を致さしめ、更に明に先だちて欽定憲法を發布して我國體の萬邦に冠絶する所以を示し、以て國民の覺悟を定めさせられ、今や又維新以來麻の如く亂れたる徳教の爲に、是の千古不磨の大詔を下し給はり、民をして國民道德の大本歸趣を知らしめ給ふ。實に國民の盲動を導き、各、其の正路に就くことを得せしめ給ふ欲慮の程は、我國民の幾重にも感銘奉體すべき所なり。

遮莫、教育勅語一たび下りてより、從來の國粹保存主義が一轉して國家主義の思想となり、益、其の全捷の途を急ぎしには反して、自由平等を言ふこと厚くして忠君愛國を説くこと薄かりし從來の歐化主義は、今や其の所信を枉げ、詔勅の示し給へる國家主義の道德に調攝せざるべからず。西洋心醉の風、是れより漸く衰へ、基督教も亦漸く其の世界的性質を改めて國家的となり初めぬ。國家主義は其勢ひに乗じて次第に歐化主義の城壘に迫り、茲に端なくも最も激烈なる爭論を惹起しぬ。所謂教育宗教衝突論是れなり。時方に明治二十五年の暮なりき。

是の爭論は讀者の記憶せる如く、井上哲次郎氏が宗教と教育との關係に就て「教育時論」

記者に對する談話に其の萌芽を發し、次で『教育と宗教の衝突』と題する一論文に枝葉を成し、而して當時の宗教教育社會に、民選議院の爭論以後に倫ひなき論戰の花を咲かせたるものなり。氏の説の要に曰く、『(第一) 耶蘇教は國家の差別を認めず、其の説く所の道德は純然たる出世間の道德なり。是れを勅語が忠君愛國を以て國民最高の徳と爲せるに比すれば、全く兩立し難きものなり。(第二) 耶蘇教は既に出世間の事を主とすれば、常に重きを未來に置き、現世は僅に未來世界の門戸に過ぎずとなす。是れ勅語の精神が全然現世的なると相容れざるなり。(第三) 耶蘇教説く所の愛は無差別的博愛なり、然るに勅語示す所の愛は差別的の博愛なり。是を以て二者互ひに衝突するを免れず。(第四) 耶蘇教の缺點として特に著るしきは忠孝を言はざる事なり、嘗に言はざるのみならず、往々是れに反する教旨あり。是れ勅語が示す所の克忠克孝の教と容れざるなり』と。氏は博引旁證、最も銳利明快なる論法を以て其の旨趣を敷衍せり。是れ實に基督教徒の死活問題を含蓄せる最も手痛き攻撃なりしを以て、本多、横井、二氏を初めとして、苟も耶蘇教内に身を置くものは、筆に口に極力其の論を駁し、就中高橋五郎氏の如きは、『偽哲學者の大僻論』と題する長論文を雜誌「國民の友」

に掲げ、井上氏の論旨を反撃し、且つ讒謗罵詈を極めたり。和漢學者及び佛教徒は是れに反し、井上氏に左袒して基督教徒に當り、甲論乙駁、歸結の決すべき模様なく、裁斷を後年の輿論に残し、數月を経て漸く鎮靜せり。當時是の爭論の盛んなりしことは實に驚くべきものにして、新聞雜誌として是の爭論を掲げざるはなく、知名の學者にして贊否の聲を發せざるは無き有様なりき。以て如何に是の問題が當時の社會に重きを爲せしかを見るべし。其の源は井上氏にありと雖も、實は是れ歐化主義を代表せる基督教と國家主義との格闘にして、殊に防禦の位置に立てる基督教にとりては、嘗に盛衰の問題たるのみならず、實に死活の問題を包有したるなり。

是の爭論の勝利何れにありしや、單に議論上の争としては、基督教徒にもそれなく道理の取るべきあり、勿論最初より攻勢を取れる井上氏のかたに多小の優勢を認むと雖も、何れを全勝、何れを全敗とは決し難かりしに似たり。然れども事實の上より見る時は、基督教徒の勢力是れより俄に頓挫して、全く教育上に其の根據を失ひ、唯、其の堡壘を守りて自活の道に汲々たるの勢ひあり。偶、同教の中に改革の士あれば、そは從來の世界主義を捨て、其説を

國家主義に調和せむと務めたるの人たるに過ぎず。基督教の逢迎主義はれより漸く明なり。是れに反して國家主義の道德は、是の論戰によりて愈々其の教育上の基礎を固うし、其の勢力延いて廣く社會の四邊に及び、漸く一世の思想を統一するの途に就けり。

然れども當時國民一般の思想未だ幼稚にして根柢より國家主義の眞精神を會得すること能はず、其の所謂國家主義なるものも、形式上より勅語を解釋し、漫りに自尊の氣習に驅られたるの形迹無きにあらず。先覺の士にありては、素より是の事なかりしなるべしと雖も、國民の全體に就て是れを視れば、所謂國民的意識は未だ十分明瞭に醒覺し了せられざりしに似たり。此事は當時の論文記事を一讀して知るべしと雖も、尤も手近き例は、佛教徒が教育宗教の衝突論に際して専心銳意井上氏を援助し、共に基督教徒を攻撃したることなり。是れ今日より見れば甚だ笑ふべき矛盾なるにも係はらず、當時の名僧智識達^{たち}が、眞面目に是れに従事したるを以て見れば、當時の人には國家主義の甚だ曖昧の中に誤解せられありしを想ふべし。それを如何にと云ふに、抑、先に掲げたる井上氏が、據りて以て基督教に大打撃を加へたる四箇條の何れか移して以て佛教攻撃の好利器とならざるべき。井上氏は耶蘇教を攻撃して曰く、

「國家の差別を認めず、純然たる出世間の道德を以て唯一の道德とする宗教は、忠君愛國の上に立つ勅語と兩立すべからず」と。而して佛教は實に是の如き宗教にあらずや。井上氏は耶蘇教を攻撃して曰く、「重きを出世間に置き、現在世を以て未來世の門戸と爲す如き宗教は、勅語の現世的精神と相容れず」と。而して佛教は即ち是の如き宗教にあらずや。井上氏又曰く、「平等無差別の博愛を説く宗教は、差別的博愛を説く所の勅語と正に相反せり。又忠孝を以て道德の基礎となさざる宗教は、即ち勅語の敵なり」と。是れ亦やがて佛教の性質と正に相適合す。是れによりて見れば、井上氏は特に耶蘇教に就て言へりと雖も、其の實は佛耶兩教に對して均しく打撃を加へたるなり。畢竟、氏が挙げたる四箇條の如きは、佛耶兩教の通性たると同時に、一切宗教の本旨なれば也。故に佛教徒たるものは、基督教徒と共に氏の説に對して駁撃せざるべからざる位地にありしなり。然るに事是に出でず、却て井上氏に従つて基督教を攻撃し、敢て恠まざりしは實に奇怪千萬なりと謂はざるべからず。是れ佛教徒は、其の多年仇敵視し來りたる基督教が、偶々攻撃の對象となりたるを見、欣喜の餘り、一も二もなく己れの敵とする基督教を攻撃するものは即ち己れの味方なりと夙斷し、そが却て佛耶

兩教の共同の敵なることに心附かず、其の淺慮短見眞に憫笑するに餘りあり。所詮は基督教攻撃の一語に眩惑して、其の攻撃の趣旨の如きは、一々精細に吟味するの邊なかりしに依るとは云へ、抑、又教育勅語が國民道德の原理たる所の國家主義の性質を明にせず、随つてそれと宗教との關係等の諸問題は、未だ解了するに及ばざりしなり。想ふに是の佛教の援助を受けたる井上氏は、中心意外の思ありたるべく、又早晚佛教徒が、基督教徒に對したると同一の攻撃は即ち自家に對するの攻撃なることを知覺するの秋あるべきを思ひて、彼等が自己の淺見に慚愧するを氣の毒に思ひしならむ。而して當時は知らざる爲して、佛教徒の來援に任せしが如きは、氏も亦策士の術數を有せりと謂ふべし。

何は兎もあれ、是の一事にて如何に當時のや、教育ある人すら、國家主義の眞精神に通せざりしかを想見するに足る。當時、史學社會に喧しかりし久米氏の「祭天の古俗」と題する一論文に對して、國學家、神道者流が學術界には許すまじき無法の迫害を行ひしにても、國家など云ふことの國學者間にも解せられざりしを見るべし。されば歐化主義も亦是の罅漏に乗じて尙ほ其の餘勢を保ち、動もすれば捲土重來の勢ひを示したり。是の時に當りて外部よ

り思ひ掛け無き一大刺撃の國民思想を根柢より播撼し、所謂國民的意識に明白なる自覺を與へたるあり。明治二十七八年に於ける日清戰爭即ち是れなり。

言ふまでも無く、日清戰爭は我邦が東洋平和の維持の爲に國命を賭して闘ひたる國家生存上の一大危機にして、随つて本邦政治史上の最大事實たると共に、また明治思想史の局面を一變したる契點なり。こは最近年の事なれば精しく説くの要は無かるべけれど、是の戰爭は社會の上層下層に論なく、孰れの方面に向ひても最も活潑なる國民的運動を催起し、多年、理論、否寧ろ空論によりて教育せられたる國民に向ひ、死活、興亡の嚴肅なる事實によりて、國家國民の眞意義を教へたり。國家と世界との關係は如何に。個人と國家との關係は如何に。世界に邦し國家に人となるに於て、國家と國民とは什麼の覺悟無かるべからざるか。一國の道德主義は如何なるものならざるべからざるか。是等の問題を、今や國民は其の血と涙とを以て經驗し、研究し、且つ解釋せり。是に於て教育勅語は更に新なる光明に照らされ、多年稜稜の間に半信半疑したりし忠君愛國の眞精神は、今や最も適切に會得せられたるを覺えぬ。是の如くにして國民的意識は、從來に較ぶれば一層明瞭に、一層具象的に、又一層生命と活力

あるものとなれり。素より戦勝の結果として、一部の國民の間に自尊自負の氣象を生じ、随つて排外の風を示したるもの無きにあらずと雖も、こは國民全體の上より見るも、又一世の先覺にして國民指導の位地に在るものに就て見るも、極めて少數、且つ一時的のものに過ぎざりき。兎に角、所謂國家主義は日清戦争以後に及び、他年對壘し來りし歐化主義に對して、おしなべて全勝を収めたり。

是に於てか國民思想は更に一步を進め、將來海内にのみ注ぎて自家域内に其の反對者を認めたる眼を轉じて、今は即ち廣く世界に注ぎ、顧みて世界の一國として我日本を觀察せむとせり。先には國民思想は内に争ひたり、今は則ち外に向ひたり。素より國內に於ても、例へば世界主義と國家主義と個人主義等の争はありしかど、そは從來の如く、國粹保存主義と歐化主義との争の如く、其の眼界、國內に終始せしものみにはあらずして、廣く世界に對して一國の位地を考察したるより起りたりと見む方妥當なるべし。されば、外面上の形迹は相似たれども、内面上の精神に於ては大に相異なるものありき。世界主義、個人主義を唱へて國家主義に反對するものも、其の説く所は、從來の如く徒らに西洋に心酔し歐化を唱ふるものにあ

らずして、少くとも表面上にては世界の大勢より打算し來りたる主義なりと稱す。されば二者の争は何れにせよ、謂はば共に日本の世界的觀察に本づけるものにして、從來の歐化主義と國粹保存主義との争の偏狹なるの比に非ずと謂ふべし。

既に世界の一國として日本を觀察し、悠久なる其の前途の爲に國民の實行主義を規定せむとする以上は、廣く知を世界に求め、而も國體民性の發達に裨益する程のものは、如何なるものをも是れを攝取し、また國利民福の増進に有害なるものは、如何なるものにも是れを排斥するの覺悟なかるべからず。されば、是の廣濶なる國家主義者流の眼には、地の東西によりて好惡の情を挟むなく、時の古今に随つて褒貶の意を寄する事無かるべし。是の公平無私なる取捨撰擇よりして、茲に從來國家主義の方法上に一新生面を拓き、爲に社會の人心を一時攪亂するの已むべからざるに到れり、是れ明治思想史の上に於ける一大進歩として特筆大書すべきものなり。

それを如何にと言ふに、從來國民間の思想の争に於て明に現はるゝが如く、明治十年代に於ける西洋主義と保守主義との争にありては、其の區別の根據は主として西洋と日本との土地の

差別にありき。故に保守者流は、西洋のものとし云へば一も二もなく一概に反對し、翻つて國學、神道、漢學、佛教等は古より日本に在來せりとの廉にて聯合し、力及ばずながら西洋主義に當りたり。二十年前後の國粹保存主義にありても、また多少の跡あり。即ち是の主義に同情を表したるものは、國學者、神道家、漢學者、佛教徒なりき。蓋し彼等は歐化主義とし云へば、彼等と先天的に相容るべからざるものと思惟し、日本在來のものとし云へば、先天的に一致すべき性質のものと速断し、單に西洋、東洋の名稱の差等によりて離合したりし也。是れ他なし、彼等の目的は歐化主義其物を攻撃するにあり、されば其の事業は國家國民の將來の爲に確乎たる道德主義を造ると云ふが如き遠大なる理由ありて爲されたるものに非ざれば也。謂はば彼等は何の理由もなく、何の目的もなく、(もし強ひて理由を求むれば、歐化主義の跋扈は彼等にとりて不利なるが故に) 主として名目の上に就て所謂毛嫌ひを爲したるなり。然れども、今や褊狹なる盲動は、國民的意識の覺醒によりて其の謂はれ無きこと漸く明になれり。國民は其の國粹の保存と云ふが如き事の以上に於て我が國家國民の世界的位地と其の前途と云ふ廣大且つ嚴肅なる問題に遭遇し、茲に其の國民的大主義を樹立するの必要を

自覺しぬ。今や徒らに我佛獨尊的の陋見を固守すべきに非ず。如何に古より我國に存在せしものにて、又我邦に固有せるものにて、苟も將來の國家國民にとりて益無きもの、若しくは害あるものは、猶豫無く排斥せざるべからず。謂はば世界一切の事物に就て、名目の東西に拘らず、其の所在の彼我に泥まず、無私公平の秤量によりて是れを取捨し、撰擇せざるべからず。是れを以て從來味方なりと思ひて相許したるものも、今や案外にも兩立する能はざる仇敵なること、又は從來不俱戴天の驕として相嫉視したるものも、今や思ひがけなく一堂に握手する等の奇觀を呈するに至れり。けに從來の有様に比すれば奇觀なりと雖も、實は當然の事にして、敵味方の區別なく其の名目に泥みて同居したる是迄の有様こそ却て奇觀と云ふべけれ。是れを要するに、是迄は單に名目の異同によりて離合せしものが、今や其の内部の本質の如何によりて去就を決したるなり。是の新運動の主動者となりたるものは、素より國家主義論者にして、そが據りて以て斯く一切外物に對して公平なる撰擇取捨を爲したる標準は、我が國體及び民性なりき。是の國民思想の新運動を代表して興りたるものを日本主義となす。是れ昨三十年五月の事なり。

日本主義は以上述べ來りたる如き氣運に驅られて起りたるものなれば、その國民思想に對する態度は、實に雄大なるものなり。即ち素是れ一定の標準に本づきて全國民の思想を統一せむと企つるなれば、其の關係影響するところ廣く且つ深し。而して是の主義の所謂一定の標準なるものは、我が國體及び民性の科學的研究に本づけるなれば、其の取捨撰擇も、從來のもろくの主義に見る如く、杜撰粗笨にして菽麥を辨せざる儕ひにあらず、随つてそが一時社會を動かし、物議を醸したるも避くべからざる勢ひなりと謂ふべきなり。是の新運動は明治思想の發達上に最も重大なる意義を有せりと思惟するを以て、聊か其の主張者の説を紹介せむに、概ね左の如し。

日本主義とは、『日本國民の守るべき主義』と云ふ義なり。精しくは國體民性に基き、皇祖建國の不圖を體認して、其の國家的大理想と國民的大抱負とを實現せむことを期する所の實踐道德の主義を謂ふ。大凡そ人種土地を異にする所の國家國民は、其の發達の理想も亦同じきを得ず。故に世界の人文は一規にして律すべからず。國家國民の真正なる發達は、其の國民の自覺心に基かざるべからず。日本主義は、是の所謂國民的意識の上に立てるものなり。蓋

し君民一家は我國體の精華なり、實に是れ我皇祖皇宗の宏遠なる遺謨に基き、萬世臣子の永く景仰體認すべき所なり。されば國祖及び皇室は、臣民たるものが無上の崇敬を捧ぐべき所なり。是の故に日本主義は國祖を崇拜して、建國の理想を奉體せむことを務む。また我國民は由來公明、開潤、有爲、進取の人民なり、退嬰保守と憂鬱悲哀とは決して其性に非ざるなり。されば日本主義は光明を旨とし、生々を尙び、夫の退讓を重んじ禁欲を訓へ厭世無爲を勸むる所のもろくの教義を排斥す。また億兆一姓に出で、上下其の心を一にし、内に臨みては棟蓐相親しみ、外に對しては毎に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず、是れ我國の宇内に冠絶せる所なり。是を以て日本主義は平時にありても武備を尙び、いよく國民の團結を鞏固にせむことを務む。然れども妄りに自ら尊びて他を容れざるに非ず、國內を修めて海外に臨み、輿邦と共に永遠の平和を樂しまむことを希ふ。されば日本主義は世界平和の維持を希ひ、更に進みて人類的情誼の發達を期す。要は我日本建國の大理想を發揮し、我國民の大抱負を實現せむとすにあり。

日本主義の新運動は、茲に述べたる如く、國體と民性とに基けるが故に、差當り其の攻撃

の衝に當りたるものは、基督教、佛教にして、儒教、獨逸風の形而上學、及び佛蘭西派の自由主義も亦多少排斥せられたり。而して他方に於ては、獨逸流の國家主義と英吉利流の功利論とは、大體より歓迎せられたり。それを如何にと云ふに、日本主義は、我皇祖建國の不圖の中に我國家主義の大理想を認め、又其の歴史上の研究に本づきて開闢、生々、尙武等のもろもろの現世的性質を國民の特質として認めれば、出世間的、非國家的なる基督教と佛教とが先づ排斥せられたるは極めて自然なりと謂ふべし。かの宗教教育の衝突問題の際、基督教と共に業に既に打撃を被らざるべからざりし佛教が、是の日本主義に於て遂に其の必然の運命に遭遇したるは、是非も無き次第なりとこそ謂ふべけれ。而して日本主義主張者の重なる一人は、實に往年「教育宗教衝突論」を草して意外にも佛教徒の來援を受けたる井上氏なるにても、佛教徒が今更の如く是の打撃に驚きたる迂濶さは知らるべし。若し夫れ、從來常に歐化主義の先天的反對者として、維新の初めより我が固來の思想と提携し來りし儒教が、是の日本主義に歡ばれざるのみならず、却て排斥せらるゝの傾きあるは、全く是の教の保守退嬰的なるところが、やがて日本主義の進歩的なる所と衝突すればなるべし。然れども日本主義は、

儒教の全部を舉げて攻撃するものに非ず、忠孝を尙び、現世的なるの點に於ては、二者其軌を一にせるものなれば、其の反對は佛耶兩教に於けるが如く烈しからざること亦自然の勢ひなるべし。又是の主義と佛蘭西流の自由主義との相容れざるは論無きことなり。さりながら憲法發布以來、是の種の極端論は、政治界には殆ど其跡を留めず、唯、社會の中に一種の社會主義となりて存するに過ぎざれば、其の反對も他に比すれば微々たるを免れず。獨逸の純理哲學は、學理の研究としては擯斥せらるゝに非ず、只、世の空論を高尚となし、毫も實世間の事に關與せざるもの、是の派の學者に多きが故に、是の點に於て、日本主義論者の攻撃を被れるのみ、無論根柢的に相容れざるものにはあらざるが如し。是れに反して、獨逸風の國家論が歓迎せられたるは、最も自然の事にして、現に憲法を初めとし、今日の國家主義論者の説は主として是れに據れり。是れ獨逸のと我れの國體とは、英佛等のそれよりは比較的に我れに近きが爲なるべし。然れども日本主義論者の國家論の根柢は、飽く迄我國の歴史に本づくものにして、只、其の性の近き所に從つて彼邦の説を参照したるに過ぎざるなり。次に英吉利の功利論の歓迎せられたるも、そが我が國民性の現世主義と近ければなるべし。然れども

日本主義の現世主義が、かの福澤氏一派の拜金宗杯と同日に論すべきものに非ざることは、是の派の人の所論にて十分に世の誤解を辯ずるに足るべし。

言ふまでも無く、歐化主義の流れを汲める洋行歸りの人を首めとし、宗教によりて衣食する僧侶牧師は言ふを待たず、元來國粹保存主義の系圖を引ける人々の中にも、眞に國家國民など云ふ事に就て科學的意義を解せざるものは、其の外面の運動が所謂八ッ當りに類するに驚きて、何れも反抗の氣焔を揚げ、曾て宗教教育衝突論の當時、高橋五郎氏が井上哲次郎氏に向つて爲せるが如く、日本主義論者の人身攻撃をすら敢てするを憚らず、論難に繼ぐに罵詈を以てし、罵詈に繼ぐに讒誣を以てし、百方其勢ひを挫かむと力めたり。日本主義論者の中にも、一時の客氣に驅られて詭激の言論を弄びしものありしは、世をして是の新運動の性質を誤解せしむるに力ありしが如し。是れ同主義の人々の心潜かに嘆惜する所なるべし。されど是等は、最近時に關はる事なれば、其の影響の大小、勢力の消長は、今日豫じめ知り難きこと勿論なり。されば茲にはすべて臆説を爲さざるべし。

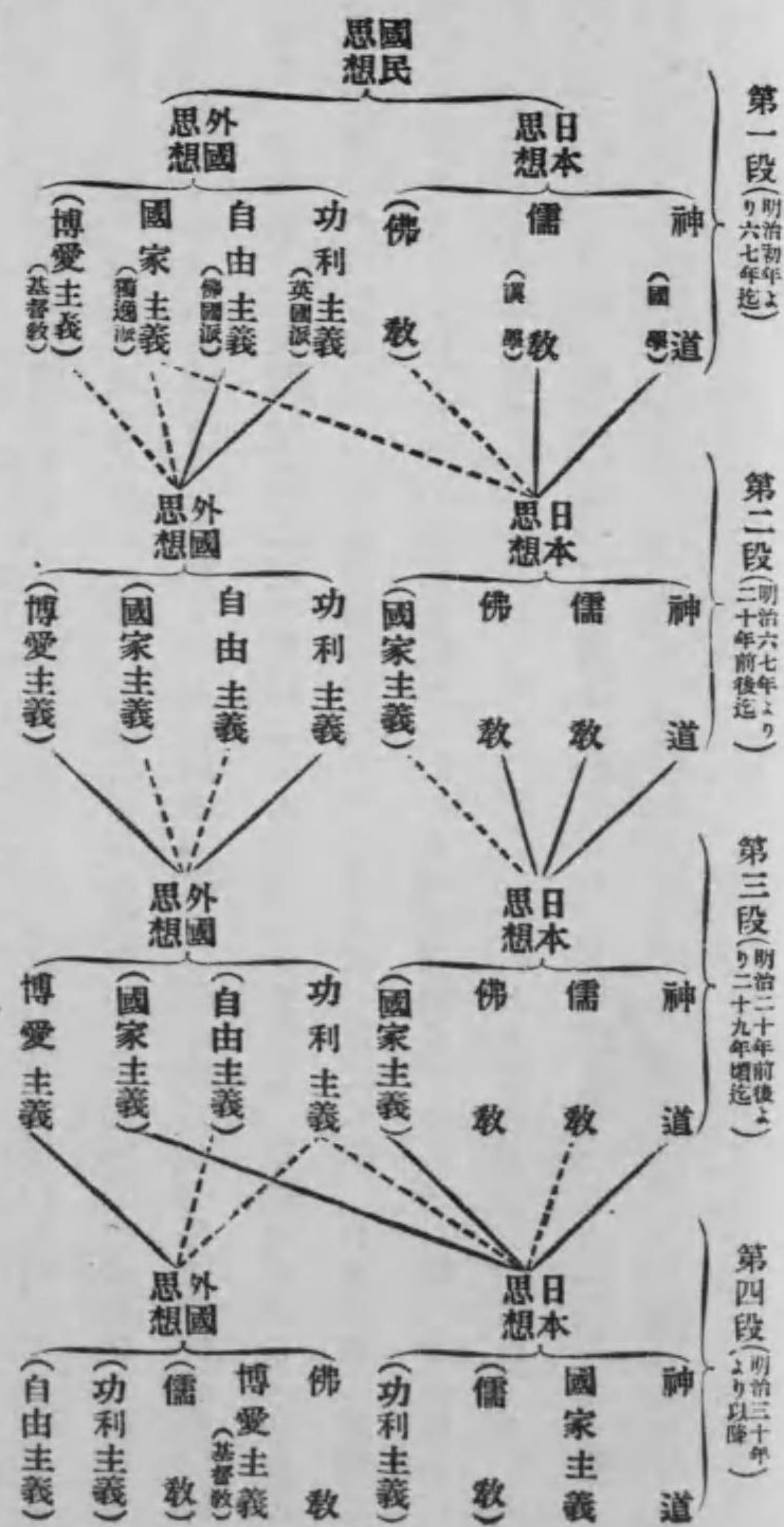
され、記者が是の主義に對する私己の關係を離れ、上に述べ來りたる歴史的觀察にて明

に下し得べき程の判断によれば、日本主義の運動は決して一二人の創意に成るものにあらずして、實に深遠なる根據を國民性の中に有するものなり。其の系統を言へば、そは髓に明治初年の所謂皇學によりて代表せられたる保守主義の流を汲めるものなることは明なれども、其の性質に於て殆ど見紛ふまでに進歩し來れることは、猶ほ人間が猿より出でて而も其の性質に大いなる差別あるが如し。皇學的思想は、其の本を糺せば本邦歴史と共に初まり、物部守屋の排佛論となり、和氣清麿の忠節となり、菅原道眞の和魂漢才論となり、眞言天台以下の佛教諸宗派を日本化する中心勢力となり、北畠親房の神皇正統記となり、徳川時代の諸國學者の神道國教論となり、一時維新の改革に遭ふて其力を失ひ、更に十九世紀新文明の光によりて新に其の赫灼たる本來の光輝を反射し來りたるものなり。今の日本主義は、やがて其の系統の正嫡にしあれば、其の根柢は決して抜くべからず、其の枝葉花實は年と共に盛んになり行くべき也。けに是迄皇學、國粹保存主義等の幾度か起伏せし如く、一時の汚隆は或は是れ無きを保せじ、又其の名稱の如きは或は滄ることあるべし、唯それによりて代表せらるゝ精神實質に至つては、時と共に發達進歩して、早晚遂に其の當初の大目的を實現するの期に遭

遇すべきは蓋し疑を容れざるなり。

以上は、明治維新このかた三十年間の國民思想變遷の一斑なり。一國の事、素より多様、多端、又多岐にして、必ずしも唯一の主義方針によりて活動するものにあらずれども、概して言ふ時は、國民の思想が其の道德主義によりて決定せられ、随つて間接に其の萬般の活動を影響すべきは、毫も一個人に於ける場合と異らず。されば一國民の根本思想の變遷として主として其の道德主義の發達を述ぶるも、強ちに不倫とは稱すべからじ。是の短論文は、素是れ根本思想に就て讀者をして一目瞭然たるを得せしめむことを期したれば、故らに煩瑣繁縟の事實を臚列して、さなきだに解し難き思想史に一層の複雑を來すを欲せず。想ふに讀者は是れによりて、最近三十年間の思想史に就て少くも大體の觀念を得たるならむ。最後に、讀者をして是の發達の徑行を一層明らかに了解せしめむが爲に、左の圖表を添へたり。

明治思想發達一覽表



是の表は、假りに三十年間の思想の變遷を四段に分てり。第一段は明治初年より六七七年の頃に至るまで、即ち所謂皇學の幼稚なる保守的の反動が、幼稚にして而も強大なる歐化主義に對立したる時代なり。第二段は、民選議院首唱者の政體改革論に對し、保守論者が獨逸流の

國家主義論と共に前代に比してや、強硬なる反抗を試みたる時代なり。第三段は、二十年前後に於ける國粹保存主義の勃興、及び其の結果として是の二主義がや、鮮明なる反對を現はせる時なり。二十五年に於ける教育宗教衝突論も亦是の時期に屬すべし。第四段は、昨三十年春に於ける日本主義の新運動が、國體民性を規準として國民思想の統一を唱へたるときより、今日及び今日以後に及ぶ。是の時期にありては、日本思想と外國思想の區別全く明瞭となれり。精しくは本文と圖解とを對照すべし。圖中の線は、各時期によりて諸種の思想の離合を示す。中に就き、連線は其量に於て點線よりも大なるを表はし、括弧内にあるものは點線と共に其量の小なるを示す。又是の表の中に日本思想と名づけたるは、日本固有の思想及び是の思想が中心となりて外來の思想を統一したるものを總稱す。一言すれば、日本固有の思想が主となりて外國の思想を客とせるもの也。而して是の日本固有の思想の中にも、中心核子となれるものは、神道に本づける國家的觀念なり。又外國思想とは外國の思想を主として日本固有の思想を客とせるものを云ふ。讀者もし第一段より第四段までを通覽する時は國民的意識の漸く明瞭となるに隨ひて、是の二個の思想の差別も亦次を逐ひて明晰となり、

殊に日本思想が我が國體民性の歴史的研究に本づき、外に向つては外來の文化を同化し、内に於ては異分子を淘汰せる形迹は尤も著るしきを視るべし。但し是れ素より大體の觀察なれば、讀者も其心して覽るべきなり。

(明治三十一年四月)

國史の教育的研究

武藏坊辨慶、兒島高德の有無を論ずるものあるを聞く、而も未だ一國史家の國史に對して、精透なる教育的の觀察を施したるものあるを聞かざるなり。所謂國學とは國體の學なりと謂ふ、然らば國體の學、是れを何處より得たりとするか、果して國史の教育的觀察を經由したるものか、教育的觀察は國民道德の樹立に極まる、國民道德の樹立は世界的知識を要す。吾人は日本主義が所謂洋學者間に唱道せられたることの偶然ならざるを見る。

(明治三十一年)

過去一年（明治三十一年）の國民思想

一 明治二十一年以前の國民思想

歳とし革あらたまり人老ひとおいたり、『新しき日本』も何時しか三十一の齡を數へ了りぬ。（編者曰、以下は上巻を概陳したるものなるを以て省畧す）
（記「明治思想の變

二 日本主義と世界主義

吾人の所謂日本主義とは、一言すれば日本の國性國體を第一義とし、外より來れる一切の勢力を個中に調攝し同化せむとする主義の謂ひなり。漫りに世界の文明と謂ふ、こは抽象の觀念に過ぎず、實在せるものは獨り國民の文明あるのみ。人の人たる所以に於て同する所あるべきは言ふまでも無し。されば抽象の觀念としては、素より天下に人道ありと謂ふを妨げ

じ、されど人道の名によりて存在する實際の勢力は是れある無き也。若し夫れ理想としては人類平等の生活を希望するも不可ならず、されど是れに到達する方便としては、換言すれば實際上の主義としては差別見に據るの外無く、所謂差別見の標準は國家なり。されば日本主義は日本國家の繁榮進歩を以て國民倫理の規準となす。實踐道德の規準としては國家以外に求むる所無し。

斯く日本主義が國家を以て實踐道德の規準と立するの故を以て、直ちに個人の幸福を蔑視し、人道の發達を希望せざる主義と見做さむはいみじき誤謬なるべし。個人を離れて別に國家無く、随つて個人の幸福を損害して別に國家の繁榮を希ふの矛盾なるは言ふ迄も無し。又同じ人類として生を斯世このよに享けたるもの、若し得べくむば博愛平等の生活を營まむの願は、恐らく人類先天の性情なるべし。日本主義、争いでか如上の眞理を認めざらむや。唯、是等の目的に到達する實際上の主義として、國家に至上の權能を認めたるのみ。そは異りたる人種が異なる風土に邦して茲に數千年の歴史を經由せば、おのづから國性國體の他邦に殊なるものを生ずべく、随つて世界平等の主義を以て直ちに是れに臨むは、即ち是れ國性國體を無視し、

其邦の自然の發達を拘束するの結果、所謂角を矯めて牛を殺すの弊に陥らむを恐るればなり。又個人主義によりて直ちに個人の幸福を現じ得べかりし時代は、既に／＼歸らざるべし過ぎ去りたり。今の世にありて人類の集合生活は國家を單位とす、されば個人の幸福は國家の富強繁榮を通じて、間接に到達し得べきのみ。如上の意味に於て、國家は個人の幸福を實現し、人道の發達を期成する方便なりと觀むも、隨に一面の眞理なるべし。されど同時に認むべきは、國家が是の場合に於て唯一の方便なることなり。既に唯一の方便ならむには、即て是れ實際上の目的にあらずや。是れ日本主義が同時に國家主義たる所以なり。

若し夫れ世界主義に至つては、全く別種の原理に本づくを見る。是の種の思想によれば、世界上の人類は其の等しく人たる所以に於て歳時方處の差別を容るべからず、人類生存の目的素と平等絶對なる人道の圓滿なる實現に存する以上は、國性國體の差別見に執着し、國家を以て倫理の標準と爲さむは褊狹なるに過ぐ、人類の道德的意識の欲求する所のものは、さる褊狹なるものに非ず、遙に高上に、遙に偉大なる理想にあるなり。畢竟、國家は個人の爲に存するもの、個人が國家に盡すべき義務あらば、そは個人自らの幸福に利益あるが爲のみ。

人の人たる所以の目的は、單に其人の住する國家の幸福を圓滿に現するに依りて果さるべきものに非ず、唯、吾人人類が世界永久の眞理と認めたる所に從ひて、天地と共に悠遠の生命を保つにあるのみ。かの國家主義の如きは、國家てふ一の形式を捉へ來り、強ひて個人を拘束せむと擬す、取りも直さず方便の末に走りて目的の本を遺れたるもの、謬れりと謂ふべし。我が國民はその人たるに於て世界の何れの國民とも同じく、我が國家はその國たるに於て世界の何れの國家とも異らず。さらば國性國體を言ひて偏へに差別の一面に拘泥せむは謬らずや。忠君愛國を以て實踐倫理の標準と立するも亦やがて人道究竟の大理想を蔑視して、一國家一國民の小理想に執着するものと謂はざるべからず。且つ夫れ世界には世界の夫れあり、鎖國攘夷の昔ならばいざ知らず、苟も世界の一國として國際關係の中に存立せる以上は、是の大勢に背戻せむは極めて無謀のわざなるべし。日本國民は、如何に忠勇なりと稱するも、土地小にして國貧し、是の貧小を以てして世界列國の強大と並立せむと欲せば、世界の夫れ大勢を迎合し、隨伴して、敢て抵抗せざらむことを務めざるべからず。若し國性國體にして是の世界の夫れ大勢に適せざるものあらば、宜しく我れを枉げて彼れに調攝すべし、是れ今日の世に

處し、我が國家の安全及び發達を企圖する上に於て、萬已むを得ざるなり。かの日本主義、及び國家主義なるものは、己れを見ること餘りに高くして是の主客の辨を顛倒せり。

是の如きは所謂世界主義の主張なり。是の種の論者の中には、或は世界主義の名によりて呼ばるゝを好まざるものあらむ。されど世界を先にして國家を後にする點に於ては、隨に是の名稱に適應せるもの也。

三 兩者の比較

今是の世界主義と、先に述べたる日本主義とを比較せむか、目的に於ては兩者必ずしも相容れざるにあらず、そは個人を省いて別に國家無きを認むる點に於て兩者相同じく、所謂幸福とは意識あり人格ある個人に就てのみ言ひ得べしとする點に於ても亦兩者相同じかるべく、また人生究竟の目的を平等圓滿なる幸福の實現に存すとする點に於ても亦兩者恐らくは相同じかるべければなり。さらば其の争點は是の究竟の目的を實現する方法の上に存すと見るの外なし。日本主義は國家を以て是の究竟の理想に到達する唯一の方便となし、唯一の方

便なるが故に、實際、上國民道德の最高標準となす。そは國家は偶然にして成立せるものにあらず、既に成立し又漸く發達するに隨れ、先には是の特殊の國家を成立せしめたる所以の要素は益、其の差別性を開發し來りて、遂に國家と實際上相容れ難き諸他の性質を現じ來るべし。されば世界に於ける各國民の到達すべき究竟の理想或は同一なりとするも、そを實現する所以の方法は、各國民に於て各、異らざるを得ざるべければなり。是に於てか、日本主義は國性と國體とに本づきて國家主義を執る。世界主義は即ち以爲く、國家は方便なるが故に國家主義者流が思惟する如く爾かく尊重すべきに非ず、されば國性と云ひ、國體と云ふもの、時宜に依りて更革もしくは破壊するも亦必ずしも不可ならずと。されば世界主義は形式論の上に於ては、國家を唯一方便とするに於て必ずしも日本主義に異なるに非ざれども、而も國家其物の實質に關しては、必ずしも國性又は國體の動かすべからざるものあるを認めず、是れそが日本主義と異なる要點なるべし。

國家の概念に就て世界主義の日本主義に異なること既に是の如し、其他もろくの實踐倫理問題に關して幾多の異説あるは、洵に己むを得ざるなり。其一二を言はば、世界主義は日本

主義がやがて國家主義なるに反して個人主義なり。獨り社會道德に於て然るのみならず、政治上に於ては、個人を以て君主と並立する重要原素なるを認めむと欲す。されば、朕は國家なりとのルイ十四世の言によりて尤も適當に言ひ表はさるべき我が國體に關しては、絶對的に日本主義と其の解釋を異にせるもの也。世界主義の側にある人は、我が國民が忠孝に關して有する道德的意識を以て、人道の理想に反れる虚偽の觀念となし、それを勸奨する國家主義の道德を以て褊狹固陋なりとす。彼等は歴史を見ること國家主義者流の如く爾かく重からず、されば歴史によりて結成せられたる文物は必ずしも國民性情の中に抜くべからざる根柢あるを信ぜず、随つて是の如き文物にして彼等の理想とする所に違ふものは、外來一時の勢力によりて容易に矯正し、又は打破することを得べく、且つ是の如き矯正もしくは打破は、必ずしも國民性情の満足を傷くるものに非ざるを信ず。是の點に於ても世界主義は全く日本主義と正反對の主張を有するものと謂ふべし。

是の二主義の異同、略、是の如し。世には兩者の争を以て名義上に過ぎずとなすものあれども、それは類同の一面を見たるのみ、實踐の倫理問題に關しては、兩者は當然相争ふべき理由を有するもの也。顧みれば維新このかた三十一年間の國民思想史は、所詮是の兩者の頽頽消長に外ならざりき。殊に最近の過去一年に於て争點の最も分明となれるを見る。是れ明治三十一年の思想を瞥見するに先だち、特に從來の思潮並びに日本主義と世界主義との綱領を明にしたる所以なり。

四 明治三十一年に於ける二主義の消長

一度び教育勅語に頓挫し、再び教育宗教衝突論に挫折し、三度び日清戦争以後に於ける國民精神の勃興によりて大打撃を被れる世界主義は、明治三十一年に入りて漸く反動の氣勢を昂め來れり。一正一反の常理、むしろ自然の趨勢とや言はまし。そはすべての物、其の昌榮の極みに達すれば、人これに狎れて漸く其の徳を感ぜず、却て其の缺處を自覺し初むればなり。國家主義、今や累年の積勢に乗じて縦横無盡に思想界を蹂躪したりしかば、其の主張或は中正を離るゝあるを免れず、茲に漸く一部人心の不滿を招き、遂に世界主義者流の反動を誘致するに到れり、是れはた勢ひなりと謂ふべし。

是年の一月、世界主義を以て目せられたる西園寺侯は文相の椅子に憑れり。侯が國民新聞の記者に語りて、「日本の文明は西洋流ならざるべからざる」を公言せしは、流石に時勢に憚りたればにや、其の聲高からざりしかど、一國の文相が學政上の意見としては、慥に世界主義者流の耳には野に呼べる人の聲とも聞えしなるべし。基督教の雜誌「世界の日本」の一記者等は、空谷の跫音として是れを讚美せり。佛蘭西の一僧侶は、「世界主義と日本主義」と題する一冊子を公にして、日本主義國家主義の褊狹なるを駁撃せり。佛教と耶蘇教とは同舟難に遭ふて吳越も其怨みを忘るゝの聲に倣ひ、神道を味方とする日本主義に對して攻守同盟を作りたり。無節操なる國民新聞の如きは、しばしば國家主義の頑迷を呼ばはりたり。教育報知記者は「日本主義と世界主義」と題し、日本主義の偏執を論じて「感情によりて立てる極端説」なりとせり。世界主義主張者ならざる一部の思想家にも亦反對の意見を公にするものあり。建部水城の如きは、「明治思想の變遷」を「日本」紙上に論じ、日本主義を以て時勢を知らずとなし、「十年前の國粹主義の靦然たる踏襲に過ぎず」と揚言せり。耶蘇教の舊派を以て目せらるゝ人々は「新世紀」と名づくる一雜誌を發刊し、主筆小崎弘道氏は其の初號に於て

「若し吾人にして泰西の政治主義を執らむか、吾人は并せて其の宗教主義(即ち世界主義)をも執らざるべからず」と公言せり。凡そ是等の事實は、明治三十一年の後半期に於て世界主義的思想の鬱勃として再び興り來らむとするの徴なりき。

されど如上の反動は大勢に於て素より言ふに足らず、社會は依然として國家主義に謳歌せり。されど偶然なる政治上の事變よりして、一時是の主客の位地を顛倒せしめたるは、三十一年に於ける思想史上の一大事實として特に大書し置くべきなり。政治上の事變とは言ふまでもなく七月に起りたる所謂政黨内閣の樹立を云ふ。

五 政黨内閣と國民思想

所謂政黨内閣の樹立が國民思想に及ぼしたる影響として見るべきもの、一にして足らざれども、所詮は世界主義の擴張に在り。是迄世界主義は言論の上こそ唱へられたれ、未だ會て政治上の勢力によりて扶育せられたる事なし。一西園寺侯ありしと雖も、二十年來國家主義によりて結成せられたる教育社會をば如何ともする無かりき。基督教會并に宗教學校は、

世界主義の實行の爲に多少の力を濫したりと雖も、日本主義が國家教育によりて鼓吹せらるるに比すべくもあらず。世界主義の無勢力は、素より國民性情に稱はざるにも由るべしと雖も、抑そが政治、教育の上に何等の根柢無きことも亦其一主因なりしなり。されば所謂政黨内閣の樹立は是の主義の宣傳にとりて百萬の援兵にも較ぶべかりき。

議院に多數を占むる政黨が内閣を組織すとは、取りも直さず政治上の勢力が人民の手に移りたるの謂なり。我國體が果してかゝる意味に於ての政黨内閣を容れ得べきや否やは茲に論ずる迄も無けれども、當時伊藤侯に代りて内閣を組織したる憲政黨の多くの政治家は、實に是の如き謬見を懐きしなり。されば彼等は君主の信認を形式上の事なりとし、議院に多數を占むる政黨には即ち時の内閣を組織するの實力ありと思惟したりし也。内閣は憲政黨の本店なり」と公言するを憚らざりし一輩の政治家が、英吉利流の民主政治を以て我邦に擬せしは寧ろ明白なる事實なりとす。かゝる大謬見の上に憲政黨の内閣は兎にも角にも組織せられたり。彼等は二十年來夢想したる彼等の無何有郷が一朝偶然にして實現せられたるに狂喜し、英佛流の突飛なる思想より目覺めて國體國性を熟考すべかりし時機なるをも辨へず、忌憚な

く是の大謬見を宣傳せり。彼等の言は最早や空想にあらずして事實なり、而も是の事實たるや、一國政權の上に現はれたる最高の事實なり。世界主義はかゝる目前の大援に會して如何ばかり其心を強うしたるべき。さなきだに鬱勃たる憂憤の情遣り難き折柄なれば、反動の氣勢はさながら堤を決したらむ如く、蕩々然として社會に迸發せり。

憲政黨員の理想は英國流の民政主義にあり。彼等は陛下の御信任によりて其の内閣を組織しながら、却て、それを多數人民の意志を代表せる政黨の當然の權利なりとの様に思惟したりき。民政主義は即ち個人主義なり。個人主義なるが故に、君主は國家の主權に非ずして代表者なりと思惟せらる。民政主義は非君主政體なり。非君主政體なるが故に、君主は國權の本體なれども行用の權なしと思惟せらる。かく觀來れば民政主義は畢竟所謂三權分立を理想とするもの也。如上の意味に於ての民政主義が到底我が國體國性と相容れざることとは問はずして明なるべし。されば政黨以外の社會は一致して是れに反對せしが、世界主義者流のみ獨り口を極めて是れに謳歌し、帝國教育會の席上に於て公然勅語撤回の希望を演説せしものすらありき。

是の時のくりなき一個の事實は、民政主義と國體との關係に就て最後の斷案を促しぬ。それは他にあらず、時の文相尾崎行雄氏がなし、所謂共和演説是れなり。所謂共和演説をなし、尾崎氏の心事は、今更是れを問ふの要無かるべし。もし是れをして平時にあらしめば、是の如きは有勝なる瑣細の失言のみ、素より深く齒牙に懸くるに足らざるなり。而も世論が是の瑣細の失言を捉へて窮追して假借する所なく、事の結果をして尾崎氏の退官と憲政黨内閣の瓦解に終らしめたるは、又以て突飛なる民政論に對する反抗の氣勢の如何ばかり當時の社會に充滿せしかを想像するに足らむか。共和演説は畢竟民政主義と國體との關係問題を呈出し、國民をして十分是れを考覈し、解釋するの機會を得せしめしものなり。尾崎氏の退官と憲政黨内閣の瓦解とは、即ち是の解釋が事實の上に著はれたるものと見るを得べけむか。されば吾人は、我國民、殊に幼稚なる政黨者流をして我國體の概念を痛切に會得せしむるの機會を作りたる一事に於て、共和演説の大いなる價值を認めむと欲するなり。

され、尾崎氏の退官と、是れに續いて起りたる所謂政黨内閣の瓦解とは、所詮民主思想の敗北を證せるものに外ならざりき。世界主義者流の落膽如何ばかりなりしぞ。事の隠諱にか

かはるもの、彼等の無謀を以てしても流石に明らかに言ひ表はし得ざりけむ、微言警諭によりて塵に其の憂憤を漏らすもの、今日に到るも尙ほ絶えず。其説の詭激に互るや、往々吾人をしてそが公安に累するなきやを疑はしむるもの無きにあらず。例へば某新聞の一記者が、『國家は一面に於て明に人民の爲に存在す、君主も亦隨に其一面に於て人民と共に國家てふ機關體の主要成分をなすもの也』と述べて民政主義の眞理を説き、若しくは某雜誌記者が英國の例を引き我國體に比擬し、『女皇は君臨して治めず』の套語を以て立憲君主政體の眞相なりと論ぜしが如き、何れか民政主義の失敗に對する世界主義者流が憂憤の激語に非ざるべき。然れども大勢の赴くところ、區々の反抗また何爲るものぞ。國家主義が肅々として社會の實勢力を把持すること故の如し。

六 結 論

日本主義と世界主義との消長として見たる過去一年の國民思想は、是の如し、されば今後の思潮を如何すべきか。社會の事は民人の意志の活動より成る、よろづ自然の徑行に委ね

去らむは、やがて人類自由の意志を放擲し去れるものなり。

國家主義に反對するものは、動もすれば言ふ、「吾等は國家國體の語を聞き飽きたり、日本國民にして其國を愛せず其君に忠ならざるもの何處にかあるべき」と。果して然る乎。惟ふに是の如きは未だ國家主義論者の憂とする所を解せざるには非ざるか。吾人を以て見れば、國家主義は是迄よりも幾層の熱心を以て説かれざるべからず。聞き飽きたるものをして欲するがまゝに聞き飽かしめよ。我國民の國家的精神にして、未だ覺醒せられざるもの尙ほ甚だ多き以上は、國家主義論者は是等の昧者の目覺むるまで、聲を限りに叫ばざるべからず。我國家は今日是の如き昧者の爲に如何ばかり苦しめられつゝあるか。

吾人をして事實を語らしめよ。社會は公共心乏しき民衆によりて如何に苦しみつゝありやを思へ。公園の樹木だに警察の監視あらざれば保護し難きに非ずや。人は己れあるを知りて他あるを知らず、況や國あるをや。慈善は虛名の爲に爲さる、自己の名を高く標榜せらるゝに非ざれば、一錢の寄附にだも應ぜずと云ふ。萬一國家事ある時、位爵誘ふ能はず勳章勸むるに力なくば、何によりてか國民の義勇心を鼓舞すべき。學術界は國家的觀念なき學者の多

きが爲に殆ど死相を現せむとす、世利國益と爲す所無くして如何に自ら高ぶるとも、所詮は死學のみ。世末にして事多し、國民荷擔に疲弊せる今日、國家其の資を抛ちて教育に力む、國家と爲す無きものを養ふの謂はれやある。是の際、學者にして大に國家的精神を振作する無くむば、所詮は死學者のみ。文學は國家的觀念に乏しき詩人小説家によりて衰頹の極みに陥れり、國民の欲求は毫も顧みられず、彼等は詩人、小説家の私有私念を聞かせらるゝに倦み果てぬ。精靈界の慰藉を與へむもの、今や其の人甚だ乏しきなり。國家的精神の政治界に乏しきや、政府も政黨も議員も選舉人も、目指す所は唯私利あるのみ、政治家の其の節を賣るは猶ほ藝者の其の藝を賣るが如し。個人主義を唱へたるもの、何時しか國家主義に變じ、平民主義を説きたるもの、忽ちにして藩閥の奴隸となり、超然主義の本尊にして憲法中止をさへ唱へたるもの、其の都合の爲には何時にても政黨と提携するを憚らず。政黨の進退は一に黨略に出で、黨員の左右も亦私利に本づく。目的は手段を辯解すとは恐らく彼等の金科玉條とする所なるべし。されば手段としては虚言を忌まず、偽善を憚らず、而して其の目的や私利のみ、野心のみ。中心相猜疑して肝膽相照らすと揚言し、陰に兩端を持って慎重の態度と稱

す。國家の公職を以て自黨の爪牙となし、若しくは選舉の利害を慮りて正理を枉屈するが如き、彼等が日常の行爲也。而して己れ悔いず、人咎めず、詐謀を以て機敏となし、構陷を以て政略となす、蕩々然として百鬼夜行の有様なり。是の時、誠意を以て國家を言ふものあるも、徒らに迂濶の譏を買はむのみ。

國家的觀念に乏しきものは獨り政府、政黨、黨員、議員のみならず、實に全國の選舉人、商工業家、概ね然らざるは無し。試みに地租増徴案に反對し若しくは賛成せるものに視よ。反對せるものは農民地主にして、賛成せるものは商工業者なるは奇ならずや。農民の反對せるは地租増徴が直接に彼等に不利なればなり、商工業者が賛成せるは彼等に有益なればなり。あはれ是の間に何の國家的意義ありて存せりや。國家が地租増徴の案を立てたるは、軍備擴張てふ國家的事業の爲なり、之を賛否する者は却て自家の利害より打算し來る。あはれ國民と國家との關係は是の如くにして圓滿なるを得べしとするか。吾人は一朝有事の日に際せば、かくの如き民衆の甚だ頼み少かるべきを憂へずむばあらざるなり。かゝる民衆の選舉せる議員等も亦偏へに選舉區の利益を先にして國家全體の休戚を慮らず、畢竟選舉人の歡心を買は

むが爲には如何なるものをも犠牲となすを避けざるなり。吾人は一旦緩急あるの時、かゝる議員も亦國家の爲に甚だ心細きものなるを思ふなり。選舉人となり、被選舉人となる、一方の利害素より關心するを要すと雖も、是れを統率する所の國家的精神を缺如せば、議院は最早や國家的の議院に非ざらむ。局に當るものの迷ふは強ちに恕すべからざるに非ざるも、國民を擧げて恬として怪訝するある無し。吾人はかゝる國民の亦等しく頼もしからざらむを憂ふるなり。

是の如き事例は社會に充ち満ちたり、社會人民の大々多數の國家的觀念は、尙ほ未だ覺醒せられざるなり。吾人は覺醒せられずと云ふ、そは我國民が先天的に忠君愛國の情緒に富めることは、吾人が國民の名譽によりて固く信認する所なればなり。誰か人性の善なるを以て教育を要せずと謂ふものあらむ、さらば何ぞ獨り國家主義論者の言を以て贅疣なりと謂ふや。吾人の見る所によれば、日清戦争このかた、國家主義は名のみ唱へられて實はむしろ遺りたり。教育者は倫理の時間に勸語徳名を講ずるを以て國家主義の道德を訓へたりと心得、教育の全系を包有的に統率する所以を知らず。政論家の國家を言ふものは、國性國體の觀察に

本づかず、外邦の成見を假り來り、時に隨ひて機宜の辯を弄ぶもの多し、其説に根柢の抜くべからざるなく、系統の貫ける無し。固陋なる國體論者は世界の太勢に疎くして其説や保守に過ぎたり。是の際、高上の理想に本づき、正大の見地に據り、中正不偏なる國家主義の福音を遍く海内に宣傳し、以て國民精神の統一を大成せむは、獨り國內民人の利福の爲のみならず、外世界に面して一國の光榮を揚耀するに於て最大急務ならずとせむや。吾人は我國の前途に於て國家主義論者の働くべき事業の遙に前日に倍蓰せるものあるを認む。

(明治三十二年一月)

欠

欠

の眼を以て其の所説の大綱を領會せむことを務めざるべからず。若し猜疑、嫉妬、憎惡の見を以て之に對すれば、一片の塵影も盈尺の美玉を曇らすに足るべし。吾人の見るところを以てすれば、今日幾多の新聞紙上に表はれたる日本主義の反對論の多くは、是の批評の第一義に於て闕如せるもの、其の所論亦多くは淺薄輕浮にして、吾人と共に日本主義を語るに足るもの甚だ少きを恨む。

狹隘なり、排他的なり、と云ふの理由に據りて日本主義を難するものあり、是れ笑ふべきなり。若し日本國家の健全なる發達を以て國民的道德の原理となす事を以て、即ち世界、人道と言ふが如き平等遍通なる抽象觀念を離れ、別に國家を以て實際倫理の標準と爲す事を以て狹隘なりと稱するを得ば、日本主義は素より狹隘なる主義なるに相違なし。日本主義は、國家を以て至上の権力と認め、其の利福を以て道德の規準となし、苟も之に反するものは盡く之を排斥す。苟も主義として立つ所あるもの、自から然らざるを得ず、又然らざるべからざるなり。是の意味に於て日本主義は慥に排他的なり。

然れども、當に狹隘なるべくして而して狹隘に、當に排他的なるべくして而して排他的な

る、又何の不可がある。反對者は未だ日本主義を解すること能はざりしなり。

日本主義は倫理、宗教に於て、所謂世界主義、及び個人主義を排し、國家主義を唱道す。

而して宗教は其の本來の性質に於て遂に國家主義と兩立する能はざるを以て、茲に日本主義は一切の宗教を排撃す。其の理由の如きは明々白々、苟も迷信の中に困睡せる宗教徒、若しくは曖昧遲疑、私情の爲に公明の進退を敢てし得ざる二股學者の外、識者の夙に認むる所なりと雖も、左に簡單に之を述べむか。

人動もすれば世界と云ひ、人道と云ふ。然れども、個々獨立し、各自主我的活動に餘念なき國民の雜然秩序なき集合を外にして、いづこに世界、人道なるものあるか。世界人道の名によりて存在する實際の勢力は果して何處にありや。人文史上、人類共有の利害の漸く増進し來り、茲に人道 (Menschheit) と云ふが如き觀念の發達を見るに至りたるは事實なり。然れども之れ人道其物が實際の規準となりたるの結果に非ずして、全く國家の發達進歩に伴へる自然の現象に外ならず。『世界の公民』とは、古より往々唱道せられたることなりき雖とも、之れ只、一片の空語のみ。吾人は國民としての外は現世に存在すること能はず。國家を離れた

る世界、もしくは人道は全く現實の生活に關せざる抽象的はた理想的觀念に過ぎざるのみ。

人類は何が爲に殊に國家と云ふが如き差別的團體を作れりや、何が故に個々孤立して獨善の生活を營まざるか、將た又何が故に一般世界と共同無差別的生活をなさざるか。是の單一なる事實の解釋は、即ち是れ國家主義が實際倫理の最高標準たるべき理由の最も確實なる説明に非ずや。若し人類の間に性情の睽違なく、利害の衝突なく、強力の壓制なく、進歩の希望なく、勢力の不均なる分配無くむば、世界主義もしくは個人主義は事實の上に於て已に發現せられたるなるべし。然れども吾人は個人の上に家族をつくり、家族の上に社會を作り、更に其上に國家を形成して以て統率一致の主權を認めたるは、人類幸福の維持増進に於て必然の徑行に出でたるなり。國家の職分は社會の平和を保ち、利福をすゝむるにあり。強力以て之に臨むは、無數個人の一致の運動を須要とすればなり。其の國外に向つて獨立を保ち權勢を張るは、畢竟自國と利害を殊にする他の勢力の侵凌に對して國民の自由なる發達を擔保するに外ならず。所詮國家は、人類生存の目的、即ち人生の幸福を大に圓滿に實現せむが爲に建立せられたるものなり。別に個人を離れ、初めより國家なる形式ありて吾人の自由なる

活動を拘束したるに非ず。

已に人生の幸福と云ふ。之を主觀的に見る時は、畢竟個人の幸福に外ならず。何となれば、幸福とは自我の意識を豫想し、意識は個人を外にして見るべからざればなり。(國家を以て人格となし、其の活動に心的現象を擬するは、所詮是れ形容にして心理上全く意味無きことなり)。然れども之を客觀的に見る時は、個人の幸福は必ずしも個人の人格に於て終始するものにあらず。家族、社會、國家及び一般人類に關係するところ少からず。自愛を擴充して家族より世界に及ぼさむとするは、實に吾人の理想とするところなり。是の如く單に人生の幸福を主觀的に見るは即ち個人主義の依つて起る所以なり。然れども是の二者は單に空想上の理論としては、多少の興味無きに非ずと雖も、現實世界に於て吾人が行動の實際的主義としては、毫も其の價值あるものに非ず。何となれば、是等は吾人が生活の必然唯一の形式なる國家の利福を損害するものなればなり。

今之れを人文發達の歴史に案するに、宗教及び道德は相並びて、初めは純ら客觀的、はた自然的なりしが、轉じて純ら主觀的、はた省察的となり、再轉して所謂世界的となり、終に

國家的となるに至りて初めて其中正の見地に到達したるが如し。太古素朴の民が務めて自ら抑畏して一に天然を崇拜し、高大無限なる天地を以て信仰の對象となすは第一期なり。此時代の道德は血族團體に對する個人の盲目的服従にして、個人存在の意義の如き、全く知られざりしなり。よし一個人が其の所屬の血族團體に乖離したる場合に於ても、そは個人、もしくは人權の名によりてなされたものに非ず。漸く進みて自己も亦宇宙の一部なるを自覺し、眞の宗教は神を外に拜するに非ずして内に觀するにあることを認むるに至りて、宗教はこゝに主觀的となり、道德はこゝに獨善的、はた省察的となれり。然れども基督教の出現は、間もなく是の主觀的傾向を打破して、再び博大なる世界主義の建立となり、近世佛國に於ける個人主義の唱道ありしを外にして、大いなる反對を見ずして今日に至れり。然れども十九世紀の末葉に至り、國民の自覺心の發達につれて、是の如き平等主義の漸く排斥せらるべき時期に到達せり。基督教の創唱せられたる時代は、人生に於ける國家及び生存競争の意義の未だ明白ならざりし時代なり。二千年の間、國家の發達に並行して不斷の調攝を怠らざりし基督教は、今日に至りては殆ど彌縫すべからざる破綻を暴露し來り、漸く其の本來の面目を亡ぶ

のみならず、終に國家以外に放逐せられむとするの非運を見る。蓋し勢ひの然らしむる所、又已むを得ざるなり。

國家を以て倫理の標準とする所の國家主義の道德は、常に人文史上最近の建設にかゝるのみならず、又其の最終の發達ならずばならず。吾人は素より主觀的には個人の無限の幸福を希ひ、客觀的には世界の平等の博愛を望む。之れたしかに吾人の理想なり、然れども之れ抽象的理想なり。是の具象有限なる現世に於て到底其の實現を望み得べからざるものなるを如何せむや。然れども吾人は現に其の生活を托し、其の發達を圖り得べき國家と稱するものをも有す。國家は吾人の勞働に報酬を予へ、吾人の希望に満足を與ふ。其の地盤は立ちて歩むべく歩みて進むべし。此の實をすて、彼の虚を選び、刻下の急務を捨て、空想の幻影を慕ふ、是の如くにして吾人は尙ほ且つ世界主義を憐愍すべき者なるか。

されば吾人が國家至上主義を唱ふるは、決して理論としての個人主義、若しくは世界主義を否定せるが爲にあらず、只國家に於て實行道德の標準、及び制裁を認識したるが爲のみ。蓋し國家は吾人の行爲を統一し、實力の權威を以て吾人に命令するものなり。個人、家族、社

會に於ける一切の進退行動は、國家の權力の下に絶對的服従を須要とす。只、是の國家の主義とするとともに背戻せざる限りの範圍に於て、是の如き個人、家族、社會は、各、其の活動の自由を有するのみ。而して國家が是の如き權能を有するに至りしは、畢竟個人の圓滿なる幸福を實現する唯一且つ必然の方式として歴史的に發達し來りしものに外ならず。是を以て國家の盛衰は、必ず是の國家を組成する國民利福の増減に隨伴すべし。所謂人類的情誼は、實に國民的昌榮の間に興起すべき自然の感情なりとす。歴史を見よ、博愛の精神の至醇なる發動は、實に近世の尤も發達せる國家的活動と相伴へるに非ずや。國家主義の進歩は、事實の上^{△△△}に於て、世界主義の進歩を意味す。國家主義を以て絶對的に世界主義に反對すと云ふもの^{△△△}あらば、之れ全く人文發達の歴史を知らざるものなり。

然れども、是の如くにして國家主義と共に發達し來れる世界主義は、基督教徒の一派の夢想する如く絶對的平等なるものにあらず、他愛的感情其物は決して制裁せらるゝを甘んずるものに非ず。若し成し得べくむば、一般衆庶に對して平等無差別の愛情を傾くるを得む。然れども吾人は實際上幾多の繫累に拘束せらるゝを如何せむや。其の親を愛せずして他人を愛

せば之れ悖徳なり、其の國を愛せずして他國を愛するものは之れ不忠なり。吾人の本國、敵邦と戦ふ、是の時に當りて、吾人は一派の基督教徒の言の如く敵邦に與して吾人の本國に双向はば如何。平等の愛は現世に於て決して行はれ得べからざるなり。彼の佛陀教、基督教の無差別的博愛主義は、國家の覆滅を計畫するものと云はざるべからず。吾人が偶然に生を受けたる邦土の如きは、吾が祖國となすに足らず、清國の爲に戦ふも、日本の爲に戦ふも、吾に於ては「のみ」と揚言する基督教徒の現に我邦に存在するを知らば、基督教徒は是の如き批難を陳腐として、關せざるを爲すこと能はざるべきなり。

(明治三十年七月)

宗教と國家

「基督教の王國を是の世のものとしてせむとするは謬見なり。人國は遂に天國たることを得べからず。國家は基督教によりて成立せず。又成立すること能はず。是れペーテルボルヒの監督僧

の公言したる所、豈宗教と國家の關係に對する、最も眞率にして、また最も明白なる宣言に非ずや。

基督教徒は必ずや言はむ、是れ舊時の教義のみ、基督教は活ける宗教なり、何ぞ時と共に推移せざらむや。今の基督教は個人主義なり、人類同胞主義なり、而して同時に國家主義なり。宇内の文明と人類全體の幸福の爲に、國家人種の差別を包容せる世界的王國の建設を以て、其の究竟の理想となす。regnum hominis と civitas Dei と、豈其の間を連結するの橋梁無しと謂はむやと。

嗚呼、吾人豈是の辯解を否定するものならむや。若し國家的體制の發達し來れる今日に於て、基督教徒獨り依然として中世紀の舊迷妄を維持し、國家の覆滅を明言して憚らざるものありとせば、之れ適者生存の原則に對して、一大奇蹟的除外例に非ずや。基督教徒と雖も自滅を好むものには非ざるべし。時勢と推移して其の教義を改易するが如きは、寧ろ當然の事なりと謂はざるべからず。然れども彼等基督教徒は果して是の如き「教義の改易」てふ現象の眞の意義を知るか。彼等は果して彼等が輕々辯解し去らむとする是の一語の中には、基督

教其物の死活問題の嚴肅なる響きを含むことを知るか。

吾人は言へり。基督教の創唱せられたる時代は國家の體制未だ整はず、随つて其の本來の意義の未だ明白ならざりし時代なり。而して二千年の間、國家の發達に並行して自家生存の爲に不斷の調攝を怠らざりし基督教は、漸く其の本來の面目を亡ひたるのみならず、國家との關係に於て殆ど彌縫すべからざるの破綻を呈露し來れり。今や世界的宗教の覆面は常に脱落せらるべきの時期に到達せり。今や明瞭なる國家的意識は是の如き異端の跳梁を容認すべからざるの時代に到達せり。是の大勢の集注せる所、所謂國家主義となり、更に吾人の日本主義となる。基督教徒が公正なる國民的自覺に本づける是の偉大なる主義を目するに、舊神道の復興もしくは一時の反動を以てするは、恰も垂死の病者にして強健なる少年の生長を危ぶむに似たり。

吾人の確信は人文史の證明する所なり。吾人先づ基督教の本國たる歐羅巴に於て、國家の發達と相關聯して其の如何に變遷し、其の如何に滅亡に近づきつゝあるかを一瞥せむ。基督教徒の見るところの歴史は、教會史にあらざれば神學史なり、彼等の謬見は素より其の迷信

に本づくとも、抑、亦公平なる史的研究に勝へざるの弊に坐す。

國家發達の歴史を見るに、古代は暫く言はず、西暦紀元後にありては、社會に二個の勢力ありて、頡頏關聯せるを見る、國家及び基督教會是れなり。是の二者は多くの場合に於て相反し、互に其の優勝を競ひたり。是の二者は其初めにありては、衝突支吾の憂ひなきものとして思惟せられたりき。即ち彼等は現在世の實際に關し、此れは未來世の理想を事とす。彼は法制によりて外部より社會を支配し、此れは信仰を以て内面より人心を指導す。彼等は物質的即ち形而下の人世を統御し、此れは精神的即ち形而上の世界を司掌す。其事に従ふ所、兩々相分れ、毫も牴觸すべからざるの區劃あるべきものと思惟せられき。然れども肉と靈とは同一の人格に於て統一せらるゝが如く、人生の事業は是の如く相絶縁せるものにあらず、其間豈永く衝突なきを得むや。

元來羅馬帝國が基督教を抱合したるは、當時人心の上に強大なる勢力を有せる宗教の力に依りて、帝國版圖の統一を幫助せむとするの一時の權策に出づ。而れども時已に遅かりき。否、帝國の没落は寧ろ基督教の認容の爲に速められき。由來教會と國家とは其の利害に於て

異る所あるを以て、教會の盛衰は是の世界的帝國の滅亡と相關せず。寧ろ却て帝國古代の傳説を利用して自家の教義に資し、現世的王國の建立を以て聖教弘布の方便として神の攝理に成るものとなし、帝王を以て是の如き方便を供給する使僕となせり。羅馬帝國の滅後にありては、教會は幾多の異りたる國民に通じて人心統一の唯一の機關たりき。然れども是の如き教會も神政を現するを得ず、國家現實の事業に關しては、何等直接の勢力を有したるものに非ず。政教二界は兩々相並行して尙ほ截然たる區劃を維持したりしなり。然れども兩者漸く其の職分を自覺して各、其の權勢を張らむとするの曉に及びては、衝突は遂に避くべからず。寺領地方權等が教會の手に入りたるは、實に基督教會が政教二界の上に絶對の權力を有せむとする希望の端緒として見るべく、教會が國家を蔑視するの傾向も亦漸く增長するに至れり。自家の職能に不明なりしが爲に、多年是の根本的反對主義と提携し來りし國家も、是に至りて漸く其の迷妄を脱し、宗教を嫌斥するの感情、亦漸く萌起し、遂に法王の命令に反對するの王侯を見るに至れり。夫のバイエルンのルード井ヒが公然たる告文によりて「教會は名譽と權力とを有すべからず、只國家の名譽と權力とに無害なる限りに於て、其の分を守るべし」と命令したるも、實に是の時代の精神に驅られたるものなりとす。

外部に於て漸く其の勢力を失墜せむとするに當りて、基督教は更に内部に於て、一大打撃を被れり。ルード井ヒが所謂 Macht und glanzlose Religion の設計は茲に其の實現を見るを得たり。内部の打撃とは何ぞや、他なし、所謂宗教革命是れなり。宗教革命と共に、教會は國家に隸屬し、其の教義の獨立、信仰の權力等は、一切の華麗なる外觀と共に悉く褫奪せられ終りぬ。毫も宗教革命に關係せざる邦國に於ても、宗教は全く國家の下に屈從し、數百年の間、支撐せられたる精神的獨立の教義は、以來國家的たるべしとの條件の下に、屢に其の殘命を保つて果敢なき運命に到達せり。是れはた國家の發達に伴へる必然の現象ならずむばあらず。

然れども今日の國家は最早や宗教改革時代の國家にあらず。其の體制に於て、其の精神に於て、遙に／＼進歩せるの國家なり。實に近世歐洲各國に於ける國家的統一の傾向は人文史上に尤も著るしき事實なりとす。今試みに其の二三を挙げむか。國民的自覺心の發達は國民的文學の勃興となり、更に國家的宗教の成立となれり。是に於てか、フス、井クリフ、ルーテル

の遺業は更に一層嚴密なる國家的の意義を以て紹述せられたり。又外にありては、國家の發達につれて起りたる國際の關係を規定するの法理は、更に翻つて一層國家の獨立を確定するあり。内にありては、群小貴族は漸く其の權力を失ひ、封建制度の遺習は次第に地を掃ひ、ますく國家中央集權の基礎を固むるあり。百般の文物一として國家權能の發達に幸せざるなし。是に於てか宗教の中、苟も多少の生命あり、活動あるものは、佛、獨、魯の諸國に見るが如く、何れも國家的假面の下に其の本來の面目を掩蔽せざるものなし。若し彼等にして教祖基督の眞意を享けて、*civitas Dei* を説かむか、彼等は一日も國家保護の下に生存することを得べからざりしなり。

蓋し基督教の眼中には世界ありて國家なし。個人ありて家族なし、人類ありて國民なし。人類は國家君父に反きても神に従はざるべからず。基督教史中の所謂血證死は所詮國家の叛逆のみ。まことに是の平等無差別的の理想は實に人類の到達すべき最高の境地なるやも知るべからず。然れども之を現實世界に訓ふるに及びて、基督教は常に國家の發達と衝突せざるを得ざりき。是に於てか自家生存の爲に國家に對して不斷の調攝を怠らず。其の平等の教義は差

別の利益の爲に曲解せられざるべからざりき。其の世界を獎めたるの口を籍して國家を説き、絶對的博愛を稱へたるの舌を以て忠孝を訓ふるに及びて、基督教は茲に全く教祖基督の眞教義を遺却し、其の經典解釋より生ずる矛盾の彌縫の爲に汲々として勞苦するに至れり。

所謂羅馬教は政教混合を以て批難せらる。之れ眞正なる基督教徒の口より出づべき當然の批難なり。然れども一面に、政教二者の間に一大鴻溝を劃する所の基督教が、漸次其の勢力を失墜し來れる事實は、他面に於て羅馬教の興起し來れる事實にあらずや。現今の基督教が政教一致の方針に傾き、其の經典を曲解して一に國民的たらむと務むるは、自家保存の已むを得ざるに出づ。政教一致、豈之れ基督教の眞主義ならむや。

歐洲今日の基督教は、所詮一篇のデレンマの上に横はれり。國家の利益を計畫すべしとの誓詞の下に國家の保護を受けむか、將た又其の保護を離れて甘んじて滅亡すべきか、兩者其一を擇ばざるべからず。而して其の本來の面目を失ふに至つては即ち一のみ。要するに基督教の歴史は變遷の歴史たると共に滅亡の歴史なり。會其の名稱と系統とを同じくするも、其の中心の教義に於て異らば之れ滅亡に非ずして何ぞや。

蓋し國家は動的にして宗教は靜的なり。國家の基礎は人類活動の實勢力を把持す、其の進
化は能動的なり、同化的なり。然れども宗教の性質たるや一定不變なり、之を以て國家に對
するの態度は常に受動的はた被同化的なり。歐羅巴に於ける基督教と國家とは其の性質に於
て已に早く乖離せり。而れども種々の讓歩調攝の下に國家の中に存在して今日尙ほ多少の勢
力を有するは、畢竟之れ二千年の情性のみ。東方亞細亞に邦して人種國體を殊にする日出帝
國の賢明なる學者は、何を苦しむて是の歐洲人文の廢物を珍重せむとするか。吾人の解する
能はざる所なり。

個人主義と人類同胞主義とは基督教の中心思想なり。若し各個人が各、其の義務と權利と
を自覺し、眞に國家の良民たるの道を訓ふるものを以て個人主義なりとせば、吾人何ぞ個人主
義主張者たらざらむや。若し人類同胞をして公共の徳義を守り、且つ之を進むることを訓ふ
るものを以て人類同胞主義なりとせば、吾人は奮つて之を非とするものを敵とせむ。然れど
も吾人は之に先だちて國家主義を唱道するものなり。主觀的に個人の圓滿なる發達を希ひ、客
觀的に人類の完全なる幸福を望むは、素より人間道徳の理想なり。然れども之を實現する唯

一の方法は只、國家主義あるのみ。吾人が生活の必然的形式たる國家を外にして、眞に個人、
人類を以て事とするものは、之れ破壊のみ、敗徳のみ、罪惡のみ。其志ありて其道を知らざ
るもののみ。憫れむべきかな、基督教徒の愚蒙なるや、彼等は國家主義は國家の幸福を始め
とするを以て個人人類の利益を没却すと云ふ。あ、彼等は歴史に於ける國家發達の意義を解
せざるものに非ずや。

之を要するに、國家の前途に關して忠誠なる國民の有すべき信仰は、國家主義あるのみ。
日本主義あるのみ。あ、國家主義なる哉、日本主義なるかな。人道の花も是の中に開くべく、
個人の實も是の中にみゆるべし。誰か日本主義を以て狹隘なりと謂ふか。日本主義に對する
紛々たる飛蟻的批評の如きは、眞に國家道徳の批判者の言に非ざるなり。今一々其の誤謬を
糾すの勞は、到底吾人の堪ゆる所に非ず。吾人は只、基督教徒が吾人に對する先天的反抗の
念慮を絶ち、公明なる熱慮によりて、一日も早く、反正の途に就かむことを切望す。

(明治三十年七月稿)

福澤諭吉氏

福澤諭吉氏の歐化主義は、近來の時事新報紙上に於て益々其の極端に走れるを見る。蓋し日本中心主義の勃興に對して知らず、是の激勵を致したるものか。是の翁が開國主義と歐化主義とは、三十年一日の如く、毫も時勢の推移に着目せず、維新草創の際に於て唱道の須要を見たりしもの、直ちに之を三十年後の今日に行はむと擬す。吾等は是の翁の末路に就て後世の批議を思へば、少しく氣の毒の思ひ無きを得ず。

教育社會の自尊排外熱を排斥し、保守論の根據を打破せむとするの意氣や壯なり。然れども之れ現今學者の唱ふる日本中心主義の真相に對する誤解に本づく。且つ其の論旨淺薄頑迷、東西文明の比較の如きは極めて皮相の觀察のみ。其の自卑自賤、一に外來の勢力を崇拜するの口氣は、慥に一部の論者が亡國論の痛罵を價するものなり。猥りに自ら高うして一に他を排するは、往時の國粹保存主義、もしくは皇學黨の事のみ。今日は公明なる國民的自覺に本

づきて審らかに東西文明の長短を商量すべきの時なり。己れを虚にして、一意他に聽從するは小兒の事のみ。福澤翁の意見は偶々從來の經歷によりて世間多少の注意を惹くと雖も、要するに時勢を知らざるの説のみ。吾等は是の翁、鬢邊幾根の白を加へてより、徒らに昔日の夢想を反復するのみなるを惜しむ。

(明治三十年九月)

愛國心を嘲罵するものあり

國を愛するの心は國民として最も貴むべき心なり。其の動もすれば排外自尊に僻し、頑迷固陋に陥るは、吾人の大に警戒せざるべからざる所なりと雖も、其の精神に至りては實に國家の元氣なり。一國の進歩富強は一に是の心の強盛に待たざるべからず。道は時と共に移り、徳は勢と共に變ずと雖も、愛國は國民至高の道徳なり。國民間に愛國心を嘲罵するの風習を生ずるは、是れ即ち一國元氣の實力なきを意味す。我邦今日往々にして是の如き徒輩を見るは、吾等の慷慨に堪へざる所なり。

(明治三十年九月)

我國體と新版圖

（羅馬沒落史を懷ふ）

抑、我國體の宇内に冠絶せることは、帝國國民たる吾人が中外に誇揚するに足る所なり。皇祖建國の初めより、萬世一系の天皇、億兆に君臨して一日も帝座の空しきこと無く、統治の大權は常に其の掌握する所にして、叛臣賊子の得て是れを覬覦するもの無し。時に世運の推移に隨ひ、朝臣武家の跋扈せるありと雖も、要するに主權行動の形式に變遷ありしのみ、主權の所在に至りては依然として天皇の掌裡にあり。是を以て政體時に更革せりと雖も、國體は百世を通じて動かさず、輒近大憲の制定によりて益、其の丕基を固うしたり。夫の外邦にありて主權の推移頻繁にして、同一の帝位、異姓の人を迎へ、華夷數、其の處を異にし、君臣動もすれば其の次を倒しまにするの例を以て、是の我が金甌無缺の國體に比すれば、彼此品位の高低管に霄壤の差のみに非ざる也。

是の如き天下無雙の國體は如何にして成立するを得たるか。其の遠因近縁、固より一にして足らずと雖も、畢竟君臣の特殊なる關係に歸するものの如し。惟ふに天孫是の國土に降臨し、萬世不動の鴻圖を肇め給ひしより、三世の後、神武天皇に至りて茲に中原を掃蕩し、海内を統一して都を大和に定め、爾來歷聖相承け、一系三千載、以て今日に至る。是の帝國の國土は實に皇祖皇宗の創定し給ひし所、其の國民は概ね神孫皇族の末裔にして、祖先以來、皆是の域内に生息し、一系の皇姓に奉仕したり。是を以て我邦にありては、皇室は國土及び人民の由來する所なり。夫の外邦に見る如く、數多の異人種群集し、契約若しくは強迫によりて君臣の關係を定め、以て國家を建設したるものと日を同うして論ずべからざるなり。一國と一家との比較は、殊に我邦に於て其の適例を見る。即ち皇室は宗家にして、臣民は末族なり、建國當初の家長制度は、二千五百年を経由して大いに其の範圍を擴張したるも、其の本來の精神に於ては毫も異變あるを見ざる也。

吾人は信ず、我國體の特性は、是の君臣一家てふ國民的意識に起原せる事を。吾人は是の君臣一家てふことが、果して嚴密なる歴史的批評によりて確證せられ得べきや否やを知らず

と雖も、是の如き國民的意識の牢乎たる結成が、現に國民的生活の根本的動機となり居るの事實は、何人も否定し能はざる所なりと思ふ。良し又嚴密なる歴史的批評の結果として、多少異民族の血液を混ずることの立證せられたりとするも、吾人は、是の如き立證が到底吾人の現實の意識を搖撼するの力を有し得べきことを信する能はず。何となれば、團結の強固、他に比倫なき國民的生活の二千五百年の歴史は、多少の異分子をも鎔鑄して、是れを國民的團體の主腦に同化するの勢力を有すべければなり。是を以て、吾人は今日に於て君臣一家の國體論を唱ふるを以て、敢て事實を曲解して一時の民心を鼓舞する方便主義なりと思惟する能はず。

世に一種の論者あり、一家の國體論を難じて曰く、「君臣一家を以て我國體の基礎となさむか、爲に一家ならぬ民人を我國民の中に包含し易からざること明らかし。そは血統團結に重きを置くことの強きほど、血統を異にするものを同團結中に包含することの難かるべければなり。君臣一家に重きを置くことは、果して能く我國の膨脹的國是と相容るべきか。試みに問ふ、如何なる眼を以て新領土の民を見むとする乎」と。是の說一見甚だ理あるが如し、然

欠

欠

國民に非ざるなり。是の國體を認めて尙ほ且つ是れを維持するを不利とするか、是れ全く事理を辨せざるものなり。一國は尙ほ一人の如し、其の據つて以て立つ所の特性あり、是の特性を離れて又國無きなり。山河舊の如く民人依然たるも、其の特性にして亡びむか、是れ已に一國の精神的滅亡に非ずや。是れ猶ほ精神病の爲に自我意識を更迭したるもの前後同一人を以て見るべからざるが如けむ。是を以て眞正の國民は常に國體國性に殉ずるの覺悟あるべきなり。況や是の如き國體國性を維持することは、嘗り彼等基督教徒の杞憂するが如く、國勢の擴張に不利ならざるのみならず、實に其の最大至要の條件なるに於てをや。試みに人類の功過録たる歴史が、到る處に吾人の所説を立證するを見よ。昔者基督教徒は、今日吾人に告ぐる所のものを以て羅馬人に訓へたりき。而して彼等の多くは、羅馬の滅亡を以て是の帝國が基督教の精神を奉行せざりしが爲なりとなす。而も事實は全く是れに反對す。羅馬滅亡の一原因をなしたるものは實に基督教主義なりとす。

羅馬帝國は今日學者の所謂都府國家なり。其の權力の中心は羅馬の一府にあり、之を掌握せるものは是れが市民たる羅甸民族なりき。是の羅甸民族の團結強固なりし間は、即ち羅馬

帝國の全盛時代にして、一族の民人が結成したる國體及び國性は、世界の四隅を擧げて、主權の下に隸屬せしむるを得たりき。羅馬の基礎は是の國家の幹部若しくは主腦に存し、是の幹部主腦と幾多屬邦民族との間に權用上截然たる主從の區劃を有せし間は、羅馬一市の中央集權は以て地中海の四岸に號令するに足れりき。想ふに、羅馬以前に於ける東洋戰勝國の膨脹は、一に組織無き暴力に據り、國民と國家との間に何等の結帶を存せず。是を以て波斯は三戰にして亡びたり。希臘は其の國民間に於ては共同的精神を維持したりと雖も、被征服者に對しては爲す所を知らず、是を以てアレキサンドロスアレキサンドロスの王國は坏土未だ乾かざるに忽ちにして四分五裂したりき。然れども羅馬は其の尠大なる版圖に對して常に至強なる中央集權を忘れず、羅匈民族は國家の中心核子として幾多異民族の上に超然たり。チベロ河上の七丘府は、世界的王國の中心として絶對的權力を有すてふ觀念は、あらゆる手段を以て屬國間に普及せられたり。故に西羅馬帝國没落の後においても、羅馬の一語は無意識的畏敬を以て發言せられき。羅馬の公法は實に是れ羅匈民族至上主義の權化にして、永く後世專制政治の模範となれり。フリードリヒ・バルバロッサの獨逸帝國、若しくはセント・ルイ、及びファリップの

佛蘭西王國の如きは、主として是れに則れり。是の羅匈民族が國家の幹部若しくは主腦として、絶對的權力を挾みて世界に號令したるの事實は、實に羅馬帝國存在の第一義なりき。

羅馬滅亡の原因は一にして足らずと雖も、是の羅匈民族至上主義の破壊が其の主要なるものなりしことは、何人も否定する能はざるべし。是の民族は其の人口を以てすれば屢々一旅の衆のみ。戦ひ連りに勝ち、領土亦擴張するに及びて、其の純粹なるもの漸く地方に分散し、爲に異民族を收容し、以て幹部の勢力を補充するの己むを得ざるに至れり。是に於てか從來蠻族として輕蔑せられたるもの、今や羅匈民族と共に市民權を得、其の勇兵將帥は多く、備兵を以て充たされき。事茲に到りて羅馬の國體及び國性は半ば崩解したりと謂はざるべからず。アウグスチヌスは其の著「神の都府」に於て是の事實を表白して曰く、

異教者よ、爾等が喋々する所の愛國心を消耗したるものは爾等の帝王には非ざりしか。吾人基督教徒何ぞ是れに與らむ。彼等がガリヤ人、埃及人、亞非利加人、フン人、イスパニア人、スリア人に與ふるに羅馬の公民權を以てせし時に當り、彼等は愚にも是の如き尠雜なる群衆が一個の以太利の都府、而も彼等が久來怨望したる其の都府を、誠心誠

意を以て保護し得べしと思惟したりし也。國家の成立は勢力の集中を必とす、是の如くにして如何ぞ人心の散漫を統一することを得べき。

是れ事實の真相を得たるの言なり。羅馬帝をして其の羅匈民族至上主義を捨て、一切蠻民に公民權を讓與せしめしものは、時勢の必要之れを然らしめたるものなるべしと雖も、然れども抑、又基督教徒が唱へたる平等主義の影響には非ざりしか。羅匈民族至上主義の抛却はやがて彼等が所謂精神上の統一に一步を進めたるものには非ざりしか。更に帝國の崩解は此方向に百歩を進めたるものに非ざりしか。彼等は國體國性の、國家の成立と如何の關係あるやを究めず、一向其の特性を打破して萬人普通の性情の上に一國を改造せむと欲す。是の如くにして成り得べきもの、或は彼等の所謂神の國たらむ、然れども是れ國家の滅亡を希ふもの也。然り、彼等は實に羅馬帝國の滅亡を希望したりき。アラリックの羅馬を陥落するや、其の市民たる彼等基督教徒は手を額にして相慶賀し、却て忠實なる羅馬府民の悲歎を冷笑したりき。是の時、彼等揚言して曰ひけらく、

異教者よ、爾等は我が羅馬府の陥落を悲しむか。吾人基督教徒は常に毫も悲しまざるの

みならず、却て天帝の優渥なる恩澤を感謝するなり。今や人類が休息すべきの時期は來りぬ、囚虜の歎願と祈禱とは終に聽かれたり。羅馬府を陥れたるアラリックは、ゴート族なりといへども、吾人と等しく一個の基督教徒なり。彼は彼れの同胞なる基督教徒を敬し、且つ爾等を救ふべし。あゝ國民の膏血に酔ひたる賣女羅馬府よ、爾の陥落は幸ひなる哉。（アツグスチヌス神の都府）

基督教徒は實に是の如き精神を以て羅馬帝國を見たりし也。彼等は陽に帝國の強大を希望し、而して陰に其の滅亡を利とす。彼等は帝國に勤むるに、其の國體と國性とを抛ち、彼等の所謂精神的統一を以て之に代へむことを以てせり。而して其の當然の結果たる國家滅亡に際しては、却て敵將を歓迎し、翻つて國家の滅亡は自教眞理の傳播の爲にせる上帝の攝理を出でずと説く。畢竟彼等は實に羅馬帝國の一大禍根にてありし也。

吾人、史を讀み、つらく古今邦家の盛衰を考ふれば轉々感慨に勝へざるものあり。羅馬の國家は羅匈民族と其の終始を共にしたりき。吵乎たる七丘府が、三天陸の版圖を擧げて一撮四隅に號令したるは、實に是の一旅の民衆が強固なる血族團體の力なりき。ガリヤ人や、埃

及人^や、イス^バニヤ^人や、由^來彼^等と共^に精^神的^の抱^合を^違け^得べき^{もの}に^非ざ^りき。あ、彼^此の^間に^華夷^主従^の區^別を^立て、純^ら權^力關^係を^以て^彼等^に臨^みたる^羅馬^人は^賢なる^かな。是^の壘^柵を^撤去^{した}ると^共に、^羅馬^の國^體及^び國^性は^又舊^時の^觀を^留め^ず、^帝國^は其^の精^神的^の死^滅と^共に^土崩^瓦解^{した}り。

嗚呼讀者よ、吾人を以て徒らに羅馬史を談ずるものと爲す勿れ。諸君は現に新版圖を統一せむが爲に我國體を捨てよと説くもの我國民の間にあるを知らずや。是の輩の俗論素より深^く意^とする^に足^らずと^雖も、^基督^教的^の精^神の^一發^表と^して^是れ^を見^る時^は、^吾人^は慄^然と^して^寒心^せず^むば^あら^ざる^なり。あ、彼等^は國^民の^本分^に戻^らず、^國家^社會^の安^寧秩^序を^妨害^せざる^限りに^於て^信教^の自^由を^擔保^{した}る^憲法^第二^十八^條の^保護^に對^して、^日夕^國恩^の廣^大海^の如^きを^感謝^せざる^べか^らざ^るな^り。

(明治三十年十月)

國民精神(時代精神)の統一を論ず

獨逸にZeitgeistの語あり、茲に時代精神と翻す。一時代の人文の全部に貫通して、其の活動進歩の動機となる所の根本思想の義なり。

一定の歳時及び方處に於ける時代精神は必ずしも唯一ならず。否多くの場合に於ては、諸種の傾向互ひに交貫離合して其の歸向する所同じからざるを常とす。是れ社會的範圍の廣きに隨つて、おのづから萬人の思想の統一せられ難き事情あればなり。人文發達の上より見る時は、是の時代精神の統一は必ずしも希望すべき事に非ず。沈滯固陋なる形式主義の打破せられたる曉には、從來の強制的統一に對する反動として、社會人心に數多の異りたる理想を惹き起すべく、斯くして惹き起されたる數多の理想の追求は、將に來らむとする統一時代に到達するの準備として極めて必要なる事也。

今一例として文藝復興期の美術を挙げむに、中世紀の宗教的形式を擺脫して個人的自由を

發展せむとする是の時代の精神につれ、美術も亦古代傳説及び宗教の繫縛を離れて、自家獨立の進歩に向ひぬ。中世の美術は徹頭徹尾宗教によりて統一せられたり。建築も、彫刻も、繪畫も、一に宗教の願使に任じたるを以て、其間に一致融合の存在するあり。是の一致融合てふ形式的事實は、甚だ嘉みすべしと雖も、是れあるが爲に各科美術は其の自由の發展を拘束せられ、沈滞腐爛に陥るを免れず、是れ統一の利益に對せる弊害の一面なり。是の弊の究まる所、一切の製作は教會の名に依りて立ち、美術家の名稱は多く埋滅し、其の題目及び内容は、一に宗教的傳説の決する所となり、美術家の唯一の職能は唯、纔に刀鋸の技巧にありき。文藝復興期に萌發したる近世的精神は方、是の繫縛を打破すべく起りぬ。今や、良し教會と美術と全く分離するに及ばずと雖も、美術家は超然として傳説證典の外に立ち、宗教的題目に關しても一に自家獨立の思想によりて解釋し、古來陳套の資材に新生命を與へたり。さしも中世紀に賤しまれたる天然も、今や彼等は快潤なる胸襟を披拂して其美を包容し、荒唐不自然なる從來の美術に更に一段の寫實的分子を貼襯せり。是に於てか人體解剖、遠近投射の研究漸く行はれ、光線空氣の影響は素より、色彩濃淡の完美を究めたり。人體を以て汚穢の

肉塊と觀じたるの風全く地を拂ひ、優雅なる人物畫、風景畫は盛んに行はれ、憂鬱なる世界は茲に一種愉快の空氣を以て充たされたり。是に於て中世紀に於ける抽象理想主義全く仆れ自由なる自然主義は旭日中天の勢ひを以て當代の美術界を風靡せり。建築、彫刻、繪畫は、宗教の束縛を離れ、各自其の獨立の進路を取りて自由の發展を求め得たり。美術史上希臘のペリクレス期を外にして、他に比類無きラファエル時代の全盛は斯の如くにして發現せられき。此を以て是れを見れば、文藝復興期は美術界に於ける精神的分裂の端緒を開きたり。然れども是の如き精神的分裂は、中世の固陋なる形式主義の統一を壞り、近代美術を啓發するに於て寧ろ大いに必要なりしなり。是れ分裂の弊害に對する利益の一面也。

是の例に於て見るが如く、時代精神の統一必ずしも喜ぶべきにあらず、其の分裂も必ずしも悲しむべからず、要は進歩に益するの如何にあるのみ。然れども人文發達の極致は、形式上素より分裂にあらずして統一に存すべし。而して是の極致に當るべき統一は、外部の壓力を以て一時の合同を強ゆるものに非ずして、必ずや各部分の自由なる發達を包容せる内面的調和に存すべし。故に時代精神の分裂の時として喜ぶべきは、是の如き極致の統一に達する

の一階段たるの場合に於てのみ、分裂其物は毫も希望するに足らざるなり。文藝復興期に於ける美術の分裂が、中世の統一よりも喜ぶべしとなすは、是の分裂が永久のものにあらずして、彫刻と繪畫と建築との三者が個々相獨立して其の内部の發達を成就したらむ後、更に其の結合を再びするの時あらむを思へばなり。

翻つて我邦の現状を観ずれば、吾人は時代精神の分裂漸く其の主力を磨滅し、今や方に其の統一の機に迫りつゝあるを見る。統一の弊や則ち沈滞腐爛、分裂の害や即ち扞格齟齬、其の弊たり害たるに至つては即ち一也。吾邦の今日は方には是の扞格齟齬の害を被りつゝあるにあらざるか。乞ふ吾人をして少しく是れを陳べしめよ。

そもく本邦國民が徳川氏の司配の下に三百年の太平を樂しみしや、所謂時代の精神は江戸覇府の權力を代表せる一種の封建的形式主義によりて、兎も角も其の統一を保ちたり。政治、宗教、文學、美術等一切の文物は、是の形式主義の圈套に拘禁せられ、互に其の否塞をかこちながら、兎も角も調和一致せりき。然れども維新の革命と共に、社會の活動の大頭腦大把握たる封建制度の顛覆せらるゝや、多年形式主義の壓制に困しみし人心は、茲に激烈なる反

動を起して個人自由の發展を主張し、奔放騰逸、左支右吾、一時は其の停まる所を知らざるの勢ひありき。一方には福澤氏の所謂桶權論の如き争あり、他方には中江氏の民約論の譯書の都鄙に歓迎せらるゝあり。箕作氏の勸善訓蒙、もしくは西村氏の智氏家訓の如き個人的倫理主義は、孝經、論語に薰陶せられたる從來の人には如何に異様の觀ありしぞ。眞政大憲、立憲政體略の如き政治書は、百ヶ條の徳川憲法を見慣れたる眼に如何に奇怪に映せしぞ。功利主義、民約主義の西洋思想が急進者流の間に汎濫せし時に當りて、他方には國學神道の再興あり。平田流の所謂皇學は、幕府の下に忍びたる久屈の餘勢を振起して一部の人心を風靡せり。觀來れば紛然雜然、其の歸向する所を知らず、保守と進歩と、外國と内國と、政治、宗教、文學の上に到る處に衝突刺戟せり。今日より見れば、かゝる思想の分裂は一見甚だ奇怪なりと雖も、當時國民思想の不定なるや、是の如き異なる物を包容して毫も其の弊害を自覺せざりしなり。

是の渾沌たる状態は明治十年以後に到りて漸く剖判の氣運に向ひたり。維新このかた引續きたる改革の精神も漸く靜穩となり、無謀なる急進と頑迷なる保守とは、靡ろけながらも漸

く自他の長短を覺識し、民約論的急進派も彼我國情の差別を覺りて自ら猛省し、皇學的守舊派も漸く世界の大勢に鑑みて其の反動の氣焰を收め、茲に共に眼を放ちて自國の世界に對する位置を考察し、以て國家將來の方針を打算し來らむと企てぬ。徳富氏の「將來の日本」、志賀氏の「南洋時事」一類の書が、一時洛陽の紙價を貴からしめしは、所詮是の氣運の高潮に乗じたるを以てなり。

願ふに維新の革命は鎖國の覆面を轉落し、國民をして自國以外に世界あることを知らしめたりき。喩へば猶ほ多年暗室に拘禁せられたる人の、一朝白日の下に放たれたるが如き也。一時外物に眩惑して自ら爲す所を知らず、手足の觸る、所、情意の催す所に隨つて、儉合苟容是れ事とせしは、寧ろ自然の勢ひのみ。是れ明治十年以前の國民が殆ど無意識に盲動せし所以なり。然れども其の以後に於ける國民思想の經過を依傍すれば、暗移默徙の間、おのづから一理の貫通するあり、照應收繳、以て其の根本的動機を成しつゝあるを見る。何ぞや、國民的自覺の發達は是れなり。而して吾人は是の國民的自覺の發達は時代精神の統一に向つて着々其の歩を進めつゝあるの事實を認む。

そもく其の國民的たると個人的たるとを問はず、なべての自覺は三個の階段を経由して發達するを常とす。其初めは純客觀的にして、中ごろは純主觀的となり、終には主客兩觀の比量に本づける眞正の自覺に到着す。蓋し自覺の概念は第一自他の差別を預想す、自己の自己たるを覺るには、先づ自己ならざる他物の認識を須要とす、是れ素より論無きなり。而して自己存在の眞意義は自己と俱存せる一切の實在物と自己との關係を知了する上に存す。是れ亦當に然るべき也。唯、是の自覺の眞境地に達し、自他の公平なる比較を遂げ得る前には、或は主觀の一面に偏依し、或は客觀の他面を過重す。是れ振子の中正を得むが爲には左右の擺動を免れざると一般、亦自然の數なりと謂ふべし。

今我邦にありては、維新の改革は即ち國民的意識を覺醒せる曉鐘なり。吾人が一個の國民としての生活は、實に是の時を以て初まれりと謂ふも敢て不可無き也。唯、創めて國民的意識に目覺めたるものが、頭を擧げて當眼先づ西洋諸國の燦然たる文物に眩惑したるを以て、他を擧げて己れを卑ふし、偏へに外邦の事物を移植して我が土壤を飾表せむことに務む。是れ國民的自覺の發達上所謂純客觀の階段にして、極端なる歐化主義の行はれたる時代なり。是

れを宗教的意識の發達に比すれば、太古素朴の民族が天地の崇大に接し、自ら抑畏して自然現象を神として拜するが如し。然れども是の如き極端なる歐化主義を實際に行はむとするに臨み、其の民情國性と相調和せず、往々柄鑿相容れざるものあるを経験するに及びてや、茲に初めて各國人文の特性に想到し、彼と我と素と獨立獨歩の發達を爲すべきものなりと斷定し、翻つて自尊排外の精神を振起するに到る。是れ明治十年前後に於て皇學の勃興に伴へる保守論の精神なりとす。是れ國民的自覺の發達上純主觀の階段に屬す。是れ猶ほ自然宗教に反對して所謂主觀的宗教が萬有に遍在せる神は亦吾人の精神中にも現はるべきを信じ、隨つて眞正の宗教は神を身外に拜するにあらずして、心内に觀するにあることを認むると相似たり。是の純客觀と純主觀との二個の傾向は、實際上必ずしも截然相繼承せず、時に隨つて盛衰起伏するを常とす。然れども維新以來、國民思想の變遷が其の消長と提挈左右したることは争ふべからざる也。殊に近來兩者の主張漸く極端を遠ざかりて中正に近づき、先の楠權論と皇學論とは中ごろ歐化主義と國粹主義とに移り、今や形を變じて世界主義と國家主義との對峙を觀るに到れり。是等の名稱は主として倫理上に關せりと雖も、百般の文物多少同一の影

響を被らざるは無し。

吾人は以上の觀察によりて、最近三十年間に於ける國民的自覺の發達が時代精神の統一に向つて着々其の歩を進めつゝあるを確認す。試みに今の世界主義を以て往日の歐化主義に比せよ、若しくは現時の國家主義を以て曠昔の國粹主義と較べよ、其説く所の正偏優劣、素と日を同うして論ずべからざるものあり。是れ畢竟國民が多年の經驗に指導せられ、漸く他の間に公平なる商量を遂げ得る所の吾人の所謂眞正なる國民的自覺に接近しつゝあることを示すものに非ずや。而して是の眞正なる國民的自覺を代表せるものは、所謂世界主義の極端に走らず、所謂國家主義の固陋に陥らず、國性民情の特質及び其の發達の理想を自覺して世界人文の我れに及ぼす勢力を商量し、其の生存及び進歩に必要な條件を以て中正なる國家主義に歸する所の日本主義即ち是れのみ。吾人は時代精神の統一を以て日本主義の天職なりと信じ、且つ是の統一が目下の急務なるを認む。

先にも言ひし如く、時代精神の分裂其物は決して喜ぶべきことに非ず、唯、更に完全なる統一に達せむが爲の準備として其の用を見るのみ。吾人は思ふ、維新の改革と共に四分五裂し

たる國民思想は、爾來三十年間の獨立の發達によりて、既に其の分裂の結果を收め了りたるには非ざるか。而して今や方に其の統一せらるべき時期に到達せるには非ざるか。國民的自覺の發達につれたる時代の大勢は、暗移默徙の間におのづから是の統一の氣運を形成せり。然れども已に是の大勢を自覺したる吾人は、其の自由意志の活動によりて是の氣運の進行を幫助するの責なきか。況や當に統一せらるべき時代精神の依然として分離せるが爲に、幾多弊害の蘊釀せらるゝの事實を認むるに於てをや。

吾人と反對の意見を有する一派の學者あり、以爲く、「人生の多趣なる、是れを一主義に捕へむこと難し、故に經世家は成るべく寛容の精神を以て反對の見解を等しく思想の大海に游泳せしむるを要す」と。是の派の論者また説を爲して曰く、「今の世に於て日本主義もしくは國家主義を以て國民の精神を拘束するは、維新の改革によりて端緒を開かれたる啓蒙時代の精神を半途にして遮斷するものなり。若かず、福澤流の極端なる歐化主義をして更に其の自由の發達を遂けしめむには」と。吾人遂に其意を解する能はず。

人生は多趣、多面、多岐なる、洵に論者の言の如し。而も然るが故に思想の統一を否定す

るの理由何處にかある。吾人を以て是れを見れば、人生愈多趣にして、統一の必要愈加はる。人生を説明する方法は盧山の八面によりて人々見る所を異にす、吾人は是等の説明の何れをも否定せざるなり。唯、其の實行の主義に至りては則ち一ありて二無し。論者の如きは畢竟説明と實行とを混同し、而して二者の概念各別種の範疇に屬するを覺らざるの弊に坐す。或は言はむ、一主義を活如たらしむるは反對の主義なり、其の反對の存するは他方の苦痛とする所なれども、其の苦痛は却て之をして腐朽枯死せしめざる所以に非ずやと。是れ寧ろ笑ふべきなり。試みに問はむ、健全なる體軀は何の苦痛ありてるか健全なりや。夫の外部の刺戟によりて、其の生存を繼續するものは、未だ自動自覺の境地に達せざる自然物のみ。滯水腐敗の例を以て、明瞭なる自覺を有する國家もしくは個人に比擬せむとす、甚だ幼稚の見と謂ふべき也。若し夫れ今の我邦には時代精神の統一尙ほ早しと謂ふが如きは、吾人を以て是れを見れば、所詮時勢を見るの明無き也。

見ずや、論者の所謂啓蒙時代の精神は已に其の極點まで發展せられ、國民は今や方に其の過度の弊に苦しみつゝあるを。士風の廢頽、節義の衰微を效したるものは昔日の桶權論的功

利主義にあらずや。日本は我が母國とするに足らず、支那の爲に戦ふも、日本の爲に戦ふも「一のみ」と揚言するものを出だしたるは世界主義に非ずして何ぞ。基督教は日本臣民をして聖影を冒瀆し、之に對して禮拜を拒ましめしことあらざるか。是の如くにして歐化主義、世界主義の發達は尙ほ且つ足らずとするか。言ふ勿れ、是れ其の弊のみと。然り弊ならむ、而も其の必然の弊なるを如何せむや。今や兵士を勵ます聲は、「名譽」に非ずして「義務」なり、「報酬」なり、是れ豈古の武士道ならむや。夫の天下の人をして拜金宗の門徒たらしめしものは神道か、大和魂か、將た歐化主義か。吾人は現今人情の澆季、風俗の廢頽を以て主として是の歐化主義に本づける拜金宗の勢力に歸せむと欲するなり。其の弊是の如くにして論者は尙ほ且つ歐化主義の勢力を足らずとする乎。

人事は偶然にして成らず、社會の發達は吾人の力行に待つもの多し。今の時は時代精神の統一を要するの時にあらずや。吾人が自然の氣運に先ちて是の必要を認むるは、畢竟國民的自覺の發達に職由す。是の機に乗じ、嶄々然として天下の公義を喚起し、是の紛々たる思想の分裂に一振攝を加ふるもの、豈吾人の義務にあらずや。政治や、宗教や、文學や、國家の人

女に對して素一體たり。須らく一大精神を以て是れを統一し、萬派飛流注いで一壑にある底の大觀を成さざるべからず。凡て大事業を成就して典型を後世に遺すの時代は、上下百方を通じ一國猶ほ一人の如く、一線以て萬條を貫き、部勒、法あり、大將數十萬の兵を將るて呼應牽聯、一步も亂れざるが如くなるべし。山奔海立の歴史的勳功は是の如くにして初めて成し得べし。而して今の日本に於て是の國民的精神の大頭腦、大把柄たらむものは、吾人遂に是れを日本主義に待たざるべからざる也。

(明治三十年十一月)

群盲撫象

嗚呼、天下の人、何故に他に聴くことを欲せざるか。試みに吾人の言説に對する世評を列ね來れば、殆ど群盲撫象の觀を呈露せむとす。

誰か日本主義を狹量なる排外精神の鼓吹となすか。日本主義は天下の公理に立つ、外を排

するに非ずして己れを立つるのみ。難者徒らに虚洞の言を爲さずして具さに證左を擧げよ。誰か日本主義を以て積極的に傳道的性質を有せずと謂ふか。國民精神を發展して國家道德主義の確立を期す、天下の積極的事業に非ずや。排宗教的傾向の如きは其一飛沫のみ。誰か日本主義を以て一時の方便策なりとするか。其の國家主義は人生倫理の大法、歴史是れを證して火を暗るが如し。夫の私己の恩怨に泥みて公明の議論を作す能はざるの輩は、少しく吾人の言に學ぶ所あれ。片言隻語を以て嘲罵し去るを止めよ、日本主義は正に是の輕佻の徒に向つて國家國民の眞意義を訓ふるものなるを知らずや。

（明治三十年十一月）

國家至上主義に對する吾人の見解

吾人が日本主義の一唱道者として國家至上主義を執れることは既に數々説きぬ。今や世上

往々にして吾人の説を誤解するものあり。是れ説き得て未だ明ならざるが爲なるか、讀むもの解するを欲せざるが爲か、抑、又預じめ成心を挟みて他の言意を忖度するが爲なるか。兎にも角にも吾人は茲に一言の要あるを見る。希くは偏へに己れを立せむが爲に人に聴くもの、及び他を解する能はずして生中の批判を喜ぶものは、吾人の文を讀むこと勿れ。

吾人は國家を以て至上の権力と認め、其の利福を以て道德の規準となす。是れ何が爲なるか、人生の幸福は獨り是れによりて圓滿なるを得べければなり。

人生の目的は幸福にあり。所謂道德なるものは是の幸福を實現する方法に外ならず、幸福は形式上證する所自我の満足なり。其の内容如何に就ては、説明の方法殊なるに隨つて幾多學説の異なるあれども、主觀的に見て自我の満足てふ一事は、一般道德の理想と云ひ極致と云ふも敢て不可なかるべし。是の幸福の内容の説明より其の實現の方法に移るに及びて、倫理學は茲に説明的より實踐的に遷る。所謂國家至上主義は是の實踐的倫理學の唯一原理也。既に國家至上主義を以て實踐的倫理學の唯一原理となす、是の主義は人生幸福の實現に關しておのづから唯一の方法ならざるべからず。而して是の唯一の方法なる事に就きては、國

家至上主義は確乎動かすべからざる歴史の根據を有す。

國家至上主義は、是の歴史の立證の上に立つ。苟も是の主義を否定せむと欲するものは、第一是の歴史の立證の全部に就て左の反證を擧げざるべからず。

一、人類過去の歴史は是れを集合生活の點より觀察すれば、國家的體制の發達に非ざること。

二、歴史上、國家的體制の發達は人類幸福の進歩の唯一なる所依に非ざること。換言すれば人類幸福の進歩は國家的體制の發達と必然なる因果もしくは俱存の關係を有せざること。

三、將來人類の集合生活は、必ず國家以外の形式に依るべきこと。

吾人を以て是れを見れば、以上列擧したる三ヶ條は、文明史上、苟も歴史的眞實を蔑視せざる限りは、決して立證し得べきものに非ず。國家至上主義は是の歴史上の根據に立てるものから、それが如何なる意味にて至上主義なるかを説明するに非ざれば、大いに淺見者流の誤解を招き易し。今の是の主義を批難するもの、若し心を盡にして吾人の是れより説く所に傾

聽せば、甘んじて非を遂ぐるものに非ざるよりは、必ずや翻然として悟入する所あらむ。

人生の目的は幸福にあり。國家至上主義は是の幸福を實現する方便なり。是の方便なるの一事、是れ國家至上主義の見解に於て見逃すべからざる要諦なり。世上の誤解、多くは是の主義を以て人生の目的となすより起る。幸福以外に人生の目的あるべき謂はれ無し。

方便の主義にして、而も至上なるの理由は如何。世人は是の皮相の疑惑に把擧せられて、俸々の辯を弄す。吾人は今の批評家の素養に就て恨み無き能はず。

國家至上主義は實踐道德の主義なり。人生幸福の性質、理想等、即ち道德的意識に關する説明とは全く其の範疇を異にす。既に實踐道德の主義と云ふ、人生幸福の内容に就きて仔細の點檢を経由したるは素より論を俟たず。然れども、かくして執立せられたる主義は、一般理義の説明と大に其の性質を異にす。主義は現下當眼の事物に就て吾人の行動を規定す。而れども、説明は只、斯の如き行動の全系に就きて其の理義を指示するのみ。指示せられたる理義は如何に精細なるも、歳時方處の規定無きが故に、目前當路の實務に對して何等適切の訓誨を授くること無し。是の如き訓誨は一に主義の與ふる所なり。故に主義は一般の説明と目

前の事實との交渉せる邊りに生じたる應用原理なり。故に是の三者は互に函数的關係を保持せるものと見るを得べし。隨ふて主義の不變に必要な條件は、説明の遍通なることと、事實の同一方面に向つて同質的の發達を繼續することなり。

國家至上主義は其名の示すが如く、主義なり、説明には非ざるなり。是の區別を明に了解せむには、其の「至上」なるべき所以の理もおのづから明なるべし。若し主義に必要な一切の所依を離れて人生の幸福を觀せむか、見様によりて或は個人説とも見らるべく、世界説とも見らるべし。説明としては、何れも一面の真相を得たるものなり。それを如何にとならば人生の幸福と云ふもの、畢竟是れを意識するものにとりてのみ幸福なること勿論なるべし。而して意識を有するものは世に個々の人を外にして是れあること無し。然らば則ち一切の幸福は、其の内容は如何にもあれ、凡て個人の幸福なり。是の如く觀する時は、幸福の説明は個人説(主義に非ず)となるべし。良し又或一派の學者の説に隨つて、國家に人格あり、且つ其の幸福を意識する頭腦を具備せりとするも、個人たるものは自己の幸福と關係なきことを知りつゝ、國家の幸福の爲に盡力すべき謂はれ無し。是の主觀的説明によれば、個人説(主

義に非ず)は槌に立せられ得べし。又是れを客觀的に觀する時は、幸福は個人の幸福なるに相違無きも、是の幸福の内容を検すれば、決して個人間に終始するものに非ず。近き例は、國家衰亡して尙ほ獨り幸なるものは無かるべし、故に其の幸福は家族、社會、國家及び一般人類の幸福と相關聯すべし。けに自愛を擴充して一般の人類にまで及ぼさむとするは吾人の究竟の理想なればなり。是の點より見る時は、幸福の客觀的説明は世界説(主義に非ず)となるべし。

是の如く、人生の幸福は説明の方法によりては、或は個人説となり、或は世界説となる、理論としては共に是なり。然れども是の説明を以て直ちに主義となし、所謂個人主義と所謂世界主義とを唱ふるものあるに至りては、大いに謬れりと謂はざるべからず。人生の幸福てふことは、個人説もしくは世界説によりて説明せられ得べし。然れども是れによりて實現せられ得べからず。家屋の性質目的等の説明は、直ちに移して是の建築の方法となすべからず。説明を移して直ちに主義となさむと欲せば、是れに先だちて歴史的發達の一契點たる當代の社會を根蒂より打破せざるべからず。是を以て是の如き大膽無謀なる主義は所謂啓蒙時代に

ありて塵に行はれ得べきのみ。若し夫れ個人説と世界説との間に立ち、一個否唯一の實踐主義として奉行すべきものは國家至上主義のみ。

國家至上主義に對するもろくの誤解は、多く是の説明と主義との差別を沒了せるに起因す。吳々も吾人の注意したきは、是の主義てふことの明瞭なる解釋なり。夫の道德的意識の全範圍に於ける一切現象の説明を以て國家至上主義に要め、而して其の能くせざるを見て、是れ立せられ得べからずとする輩は、須らく退いて吾人の言を三思すべし。國家至上主義は道德の究竟原理にあらすして、究竟主義なり。帝國憲法が國家至上の法制なると同一の意味に於ての道德的至上主義なり。當眼の實務に對して吾人の行動を規定する主義は、時と處とに限られざる一般の道德的現象の説明を能くせざることは素より當然のみ、實行と説明と其の範疇に於て異ればなり。國家至上主義を説明的原理と思惟する輩は、先づ自ら這般の問題に對する自己の無能力を呈露し來る。

是の主義が實踐道德の上に於て至上の權能を有すべき所以は、主義の唯一なるものなればなり。人生の幸福を實現する方法にして同時に二以上あり、而して是の二以上の方法にして

効力に優劣なしとせば、吾人は其の何れを選擇するも自由なり。是の際、特に其一を至上とすべき謂はれなし。然れども若し是の方法にして唯一無二ならむには、是れ當然至上なるべき方法なり。何となれば、依りて以て人生の目的を達すべき方法にして唯一ならば、吾人は專念一向是の方法に依傍するの外、行爲の規準とすべきもの無ければなり。是の場合に於ては、名は即ち方法なりと雖も、實行上目的と同等の價值を有す、ハルトマン氏の所謂方法目的 (Mittelzweck) と稱すべきものなり。是の方法目的の觀念は、國家至上主義の至上なる所以を了解する上に於て必要な條件なり。

蓋し目的なるもの、其の概念の要求する必然の性質として、現在以降に於て實現せらるべきものなり。而して現在と其の實現との間を連結する所ものは所謂方法是れなり。方法は素より目的の研究より打算し來る。然れども吾人の行爲に對する上に於ては、實に實際的の權能を有す。而して是の方法にして唯一無二ならむには、是の如き權能は當に至上なるべし。目的が時として吾人の心に一定の數學的效力を有する如く見ゆるは、實は目的自身にあらすして、是の目的實現の爲に打算し來られたる方法の權能の現はれたるなり。是の意味に於て

方法^{メソッド}は實際^{アクチュアル}的目的^{目的}と稱^呼するを得べし。ハルトマン氏が別^レちたる方法^{メソッド}目的^{目的}と究竟^{エンディグ}目的^{目的}とは、正に吾人の今説^レきつゝある所の方法^{メソッド}と目的^{目的}との關係^{関係}を文字^{文字}の上に釋^レ了^了せるものと謂^フふべし。國家至上主義^{國家至上主義}は究竟^{究竟}目的^{目的}に非^ズずして方法^{メソッド}目的^{目的}なり、夫れ唯^レ方法^{メソッド}目的^{目的}なるが爲^ニに、茲^レに至上主義^{至上主義}なり。是の如く論斷^レし來れば、是の主義^{主義}に對^シする群疑^{群疑}は一^ニに恢^レ々然^然たらむ。

以上説明^{説明}と主義^{主義}との區別^{區別}を明^明にして、國家至上主義^{國家至上主義}が、其名^{其名}の示^示すが如く、主義^{主義}にして説明^{説明}に非^ズざるを辯^レじ、而して其^其の當^當に至上^{至上}なるべき所以^{所以}は唯一^{唯一}なる方法^{方法}、即ち方法^{方法}目的^{目的}なるが爲^ニなるを説^レけり。故に吾人の論斷^レには尙^尙ほ一個^{一個}の假定^{假定}あり。即ち是の主義^{主義}の唯一^{唯一}なりとの證據^{證據}如何^{如何}と云ふことは是れなり。是の疑問^{疑問}を簡約^{簡約}すれば、

- (一) 國家^{國家}は人類^{人類}集合^{集合}生活^{生活}の至上^{至上}なる唯一^{唯一}形式^{形式}なりや。
- (二) 更に換言^{換言}すれば、人類^{人類}幸福^{幸福}の統一^{統一}的^的司配^{司配}を有^有する集合^{集合}生活^{生活}の形式^{形式}は國家^{國家}以外^{以外}に是れ無^クきか。

に歸着^{歸着}すべし。是れを歴史的^{歴史的}の方面^{方面}より觀察^{觀察}して左^左の疑問^{疑問}となすを得べし。

- (三) 人類^{人類}集合^{集合}生活^{生活}の至上^{至上}形式^{形式}は、過去^{過去}現在^{現在}の歴史^{歴史}及び事實^{事實}に徴^徴すれば國家^{國家}なり。然れ

ども將來^{將來}國家^{國家}以外^{以外}に、他に更に高上^{高上}なる集合^{集合}生活^{生活}の形式^{形式}の組織^{組織}せらるべき理由^{理由}ありや。

吾人は(一)及び(二)に對^シしては無論^{無論}然^然りと答^フふべし。是の證明^{證明}に歴史的^{歴史的}と現實^{現實}的^的との二あり。歴史的^{歴史的}には、世界^{世界}文明^{文明}史^史の上^上より人類^{人類}集合^{集合}生活^{生活}が國家^{國家}體制^{體制}の發達^{發達}に向^向つて進行^{進行}したる事實^{事實}を明^明にし、國家^{國家}が人類^{人類}社會^{社會}の實際^{實際}的^的勢力^{勢力}の把持^{把持}者^者として一切^{一切}文物^{文物}を統一^{統一}し司配^{司配}し來りたる傾向^{傾向}を詳^詳にし、現實^{現實}的^的には、現在^{現在}社會^{社會}の包^包有^有的^的批判^{批判}によりて、人生^{人生}幸福^{幸福}の實現^{實現}と國家^{國家}てふ集合^{集合}生活^{生活}の形式^{形式}との間に、必然^{必然}離^離るべからざる關係^{關係}あることを證^證するにあり。想^想ふに、苟も歴史^{歴史}及び人生^{人生}に着眼^{着眼}するものならむには、是の二個^{二個}の事實^{事實}は必ず承認^{承認}せざるべからず。吾人も亦是^{亦是}の短論^{短論}文^文に於^テて曲盡^{曲盡}せず、其^其の論證^{論證}を他日^{他日}に期^期せむ。若し夫れ(三)の疑問^{疑問}に對^シしては、聊^聊か辯明^{辯明}の急^急を要^要するものあり。

現在^{現在}及び過去^{過去}の事實^{事實}に徴^徴すれば、國家^{國家}は人類^{人類}集合^{集合}生活^{生活}の至上^{至上}形式^{形式}なることを認^認むる人も、往々^{往々}にして將來^{將來}に於^テても亦^亦然^然るべきや否^やに就^テて疑^疑を挾^挾み、是の點^點より國家^{國家}至上主義^{至上主義}を拒否^{拒否}せむと務^務むるものあり。是の拒否^{拒否}の理由^{理由}に就^テてはおのづから二説^{二説}の提案^{提案}せらるべきを見る。

第一、國家は現に人類生活の至上形式たるに相違なきも、今日仔細に人文發達の傾向を揣摩すれば、國家以外の他の更に高上なる形式に向つて趨走するを見る。故に今日に於て國家至上主義を唱ふるは、故らに社會過去の狀態を保存して將來發達の新局面を壅塞するものには非ざるか。

第二、良し社會の現狀に就ては、現在の國家以外に何等人類生活の新形式の將來に興起すべき理由を認識し得べからずとするも、過去に於ける歴史上の變遷によりて推測する時は、必ずや是の如き新形式の興起すべきものあらむ。故に國家至上主義を唯一なる方法目的として推獎するは不可なり。

第一は事實問題なり、而して其の批判は全く包有的なり。第二は類似推測にして、其の批判は全く超絶的なり。吾人は、是の二者の何れをも虚偽且つ淺薄として排斥するもの也。

第一の批難に對しては、吾人は全く(假設的)難者と反對の事實を認む。吾人の見る所を以てすれば、史家の所謂最近世に於ける國家體制、及び其の權能の發達は實に驚くべきものに

して、百般の文物は盡く國家的意義を有せずば已まざらむとす。茲に國家的とは國家の主權に對する服従と其の發達に對する利益とを意味す。素より人文の進歩によりて人類共同の利害は益、進歩し、人道の名によりて幾多の事業は爲されたり。然りと雖も、其の實際的權能の所在は、徹頭徹尾國家にあり。平等博愛の事業は、國家體制の完備に伴へる必然なる俱存的現象と見るを妥當とす。政治史家が十九世紀の三大傾向と稱する所の、人種國民的傾向、中央集權、及び立憲政治は、是の國家生活が政治の上に發現したるものに外ならず。這般の事情を叙せむには、厪然たる一大冊を要すべきを以て、茲に詳にする能はずと雖も、今日世界の大勢は何れの事物に於ても國家體制が究竟の集合生活の形式なるべきことを指示して極めて明晰なりと思惟す。夫の世界王國と云ふが如きは、時務に疎きものの空想なること勿論なり。且つ今日倫理學者は何れも國家を以て人類集合生活の上に於て至上の形式なることを認めざるは無し。

第二の批難は、前者よりも一層淺薄なるものなり。是の説にはおのづから二個の預想を含む。第一、現在の國家體制外に他の體制の興起すべきことを想はしむるに足るべき一個以上

の歴史的事實の存在。第二、是の如き事實の存在を根據とせる類似推測、是れなり。吾人は事實問題に於て第一の予想を否定し、論理問題に於て第二の予想を否定す。

人類の集合生活は一見すれば個人より家族、家族より社會、社會より國家と順次に發達し來りたるが如く見ゆるも、實は初めより國家てふ理想形式に向つて進み、其の人文の發達は即ち國家體制の進歩に伴へるものなり。是れ素より事實解釋法の差違なりと雖も、國家體制を以て人類の歴史と共に其の發達を共にせりと觀むかた、遙に客觀的事實に稱へりと謂ふべし。良し又假に百歩を譲りて眞に難者の云ふ如き事實有りとするも、是の單一の事例に基き、所謂類似推測の方法に依りて個人より家族、社會、國家にまで漸次其の統一の範圍を弘めたる同一の傾向は、幾多國家をして更に一世界王國、若しくは人道と云ふが如きものに合體せしむべしと斷言するが如きは、甚だ謂はれなきもの也。元來論理學の所謂類似推測は、推度法中の最も薄弱なるものなり。内部に何等因果もしくは俱存の關係を認むること能はず、唯他の場合に於ける類似事例によりて是の場合も亦然るべしと推測するものに過ぎず。故に是の立證方法にして多少の依信を繫住せむが爲には、是の如き類似の事例の非常に多數ならむを必

とす。而も如何に千萬の類似事例を萃め得たりとて、今立證せむとする事實の中に、或る包有的即ち内面的必至の理由の發見せられざる限りは、決して客觀的確實を稱するに足らず、故に千萬の類似あるも一除外例によりて打破せらるゝを得べし。今や難者は是の如き類似の僅少なる事例を根據として國家至上主義を否定せむと擬す。論據の薄弱なる、或は俗目を瞞著するを得むも偶、以て識者の一嘘に資せむのみ。

元來自己は其の當に然らざるべき理由を發見する能はず、却て其の當に然るべき所以を認識するも、而も二三の類似推測に於て其の然る能はざるが如き事例を見たるの故を以て、其の確乎たる認識を消却せむと務むるは、極めて怯懦なる所爲なりと謂はざるべからず。今の學者が其の所信を公言して一世批議の衝に當るの勇氣なきは、畢竟其の識見の短少と共に、是の意志の薄弱なるに依らずむばあらず。深く恨みとすべきなり。

以上は國家至上主義に對する吾人の見解なり。今日、吾人の主義に就て疑ひを挾むもの多し。然れども其の難問する所、多くは幼稚淺薄、未だ十分吾人の意見を了解するに及ばず、況や批判するに於てをや。夫の侍々の辯を弄するもの、須らく更に氣を平にして吾人の説に

聴くべき也。

最後に一言注意したきは、國家至上主義の見解に關して吾人と竹内楠三氏一派との間に多少の差違あることなり。然れども是れ國家てふ事實に就ての説明の差異にして、實踐道德上國家至上主義を是認し主張するの點に於ては、毫釐も逕庭なし。是れ吾人が竹内氏と共に日本主義唱道者として其の運動を一にする所以なり。

(明治三十一年一月)

時世を知らざる者の言

『日本主義は野に呼べる預言者の聲に非ず、中に熱誠無く、理想無く、人物無し』。是れ早稻田文學記者の評なり。

日本主義は愚民の迷信に訴ふる所謂宗教に非ざる也。其の道德主義は一時の方便に非ずし

て、歴史と學理とに動かすべからざる根據を有す。故に其の訴ふる所は、國民の明瞭なる理性にあり。實に吾人は國家萬世の利福は、一時の宗教的狂熱の如きものによりて企畫せらるべからず、須らく冷靜なる理念に鑿刻せられたる磨滅すべからざる合理的確信によりて成さるべきを認むればなり。

預言者の時代は既に過ぎ去れり。迷信の焰を煽ぎ、愚民の盲動によりて事を成し得べき宗教的時代はた永く逝きぬ。今の世に於て、預言者と宗教とを以て教化の事に従はむとするもの、何ぞ一に事理に通せざるの甚しきや。

日本主義に熱誠無く人物無しとの批評に對しては、吾人更に言ふべき所を知らず。何となれば、日本主義は今の群小雜誌記者の所謂熱誠、所謂人物に欠如せることを誇るものならむも亦知るべからざればなり。獨り其の理想無しと謂ふに至りては、誣妄を以て是れを責めざるべからず。國體民性に遵ひて日本建國の精神を發揮す。一個主義の理想として天下何物か是れより明ならむや。

(明治三十一年二月)

國粹保存主義と日本主義

何ぞ世人の褊狹にして、他の言葉を正解する能はざるや。預じめ成心を挟みて他に臨まむは、若かず、寧ろ初めより人に聴かざらむには。吾等は、讀みて而して解せざる者を咎めず、そは、其の知見の進むに隨ひて早晚解し得るの時あるべければなり。されど解し得べくして而して解するを欲せず、若しくは解し得て而して尙ほ其の成心の非を遂ぐるものは、けに思想界の外道とこそ云ふべけれ。

眞理は天下の眞理なり、一人の眞理にあらざる也。是を以て吾人は其の言を探るものの爲に説かず。年齢の老弱を問ひ、出世の先後を見、而して其人の弱齡にして後進なるを見れば則ち後れ到りて事を共にするを屑しとせず、斯の如きは一人の私見に雷同するのみ、天下の眞理に殉ずる所以に非ざるなり。かゝる襟度なく雅量なき者は、畢竟何事をか爲し得べき。吾等其の所信を告白し、同志を天下に求めて其の運動を共にせむことを望むや切なり。されど斯

の如き賸々者流に向ひては、むしろ吾等の説を讀まざらむことを希ふ。

今日に於て國粹保存主義と日本主義とを混同するものあるは、吾等の甚だ遺憾とする所なり。是れ畢竟吾等の言説に對して眞摯なる包有的批判を施さざりしが爲なりと雖も、抑、又日本主義の由來せる歴史的徑行を審にせざるの弊に坐せずむばあらず。

國粹保存主義は如何なる時代に興り、如何なる主張の上に立ちたるか。是の二點を明にすれば、そが日本主義との關係及び差別はおのづから瞭然たらむ。

國粹保存主義は如何なる時代に興りたるか。抑、明治の初年以來、歐化主義の勢力は、燎原の枯草を燒くが如く、社會の全部に蔓延し、徹上徹下、底止する所を知らず、一二皇學者流の反動ありと雖も、例へば、一掬の水を以て車薪の火に濺ぐが如し。其の勢力の政治上に表はれたるもの、民選議院設立の建白となり、愛國公黨の組織となり、高知立志社の宣言となり、民約論的佛蘭西思想は一世を風靡せり。「我輩の政府を見ること、斯の人民の爲に設くる所の政府と看做すより外無かるべし」とは、愛國公黨の「本誓」にして、「政府は約束より成り、納税の義務は參政の權利と相對す」とは、民選議院建白の主腦なりき。かゝる幼稚な

る自由主義が政治界に大流行を極めつゝある間に、社會は盛んに英米の功利主義、平等主義を歓迎し、君父に對する義務よりも己れに對する義務を重んじたる勸善訓蒙、智氏家訓等の翻譯的倫理書は、公然として國民教育に用ひられ、殊に西南戰爭終りを告げて西洋心醉の政治家等が内閣を組織するに及び、外尊自卑の氣風は上下に普ねく、有形無形一切の事物を擧げて西洋を摸倣するに至れり。天賦人權説は男女同權論を産出し、「板垣死すとも自由は死せず」と云ふ夢の如き言葉は、殆ど聖者の福音の如く傳へられ、和漢の學は敝展の如く、淺薄なる翻譯書は殆ど無上の聖權を以て迎へられき。今の外山博士が「漢字に反對するものには、何でも賛成する」と公言して、羅馬字會、かなのくわいを起したるも是の時代なり。西洋風の假裝會、舞踏會は盛んに獎勵せられ、大學學生と女學生と混じて英語演劇を催したるも是の時代なり。所謂愛國の志士が民權自由の詭辯を弄して連りに好んで囹圄の人となり、革命戰爭に關する翻譯小説の盛んに行はれしも是の時代なり。政治界に於ける帝政黨と、教育界に於ける弘道會とは、多少反動の氣勢を示したれど、南風遂に競はず。佛教徒は是等守舊派と聯合して、「破邪顯正」の旗幟を翻したれども、其勢ひ亦遂に振はず、基督教が歐化主義の後

援に頼りて前後比類無き全盛を極めたるも是の時代なり。凡そ明治七八年より二十年に至るまでの十數年の間、國民思想の大勢は歐化主義によりて壟斷せられたりき。是に於て二十一年の新經驗、新時勢に教育せられたる國民は、漸く中心に於て是の極端なる歐化主義の弊を覺り來りぬ。

國粹保存主義は是の如き時勢に乗じて起りたるなりき。然らば則ち國粹保存主義とは如何なる主義なるか。

雜誌「日本人」を機關として、三宅、志賀等諸氏の唱道せる所は、今日より見れば甚だ漠然たるものなりき。既に名づけて國粹保存主義と云ふ、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや素より論無し。然れども、是の如き「國粹」の何物なるか、何故に内外萬千の事物の中、是の如き「國粹」の特に保存せらるべき價値ありとするか、社會經營の全局面に於て所謂國粹保存てふことは幾何か國家國民の幸福を増進するに益すべきか。是等諸般の問題に就ては一も明示する所なかりしなり。諸氏の説く所は、單に「猥りに歐米を摸倣する勿れ、我が國粹は是れを保存せざるべからず、一も二もなく外邦の文物に心醉して我れの長所、美所、即

ち國粹を拋棄するは甚だ不可なり』と云ふに過ぎず。是れ雜誌「日本人」の初號に徴して尤も明なりとす。

是の如く、是の主義の興りたる時代と其の依りて立つ所の主張とを比照する時は、吾等は國粹保存主義の歴史的位置に就て最と明瞭なる概念を得べし。蓋し明治思想の歴史は即ち國民的意識の發達の歴史なり。明治の初めにありて、國民は外來文物の新奇と盛大とに眩惑し、未だ世界各國の人文は其の國民的性質の必然の所生なることを覺らず、專念一意、歐米を崇拜し、追従し、摸倣して日も尙ほ足らざらむとしたり。是の時に當つて國民は未だ自己の存在と獨立と特性とを覺悟せず、其の意識は全然外界に投射せられ、偶、駭目驚心の事物に遭遇し、茫漠渾沌の中に其の無我的活力を放散したるに過ぎず。既に我れ無し、随つて我れと我れに非ざるものとの明白なる差別を知らず、目的なく、考察なく、唯、本能的に盲動したるのみ。夫れ唯、盲動なり、故に外物を摸倣せむが爲には、其の數千年の歴史を打破するを憚らず、是の歴史によりて陶冶せられたる特性を損害するを顧みず、猶ほ小兒の我れを虚うして偏へに他の顰笑に擬するが如きなり。明治の初め、歐化主義が國民思想の虚漏に乗じて一

世の人心を風靡したる事實は、是の如くにして解釋せられ得べきのみ。

然れども小兒は長へに小兒たらざる也。國民性の彈性極限に達したる極端なる外物崇拜と摸倣とは、茲に端なくも國民的意識の反省を促がし、遂に多年の抑壓を忍びたる國民的特性をして猛烈なる反動を提起せしむるに到るは蓋し尤も自然の數なるべし。國粹保存主義は即ち是の如き反動に外ならざるなり。而して是の如き單純なる反動の性質として、其の外を排して己れを伸ぶるに急にして、未だ顧みて自他内外の得失を比量するに遑あらず、是れ國粹保存主義論者が消極的に歐米を斥くるに急にして、積極的に自家の主張を暢ぶるに遑無かりし所以也。是を以て彼等は漫然國粹を呼ぶ、然れども其の所謂國粹の何物なるかに就ては一も明言する所あらざりき。當時反對者が是の主義を目して攘夷論の再燃となしたるは、素より誤解なるべしと雖も、而も國粹保存主義其物の性質として、是の誤解を招致すべき因縁を具足したりしに依らずむばあらず。是れを要するに、國粹保存主義は思想發展の歴史に於て國民が外來勢力の抑壓に反動し、翻つて自己の存在を自覺し初めたる一契點を標示せるものなり。夫れ唯、存在の自覺に止まる、自己の依りて以て存在し、發達し得る所の諸般の制約

に就ては未だ一も思料する所あらざりし也。其の言ふ所は全く抽象的なり、全く形式的なり、國粹を口にすれども其の國粹の何物たるを説かず、彼れの長を取りて我れの短を補ふべしと言ふと雖も、何物が彼れの長にして何物が我れの短なるかを明にせず。抑、又是の如き折衷は如何なる制約の下に成立し得べきものなるか、換言すれば依りて以て外來勢力を同化する所の主腦力、中心力は何處に求むべきかを説かず、唯、嘗々然として國粹保存を唱へたるのみ。

且つ夫れ國粹保存主義論者の唱へたる所は、其名の示す如く、單に國粹の保存に止まる。故に其の外來勢力に對するの態度は全く受動的なり。彼等の所謂國粹を見るや、猶ほ古物の如し。其の中何等發達の活力を具せず、何等進歩の性質を包有せず、只、務めて其の舊形を保ち、故色を失はざらむと欲するのみ。彼等は國體國性の特質が一國人文の大把柄なることを明知せざりしのみならず、未だ是の如き概念の依りて立つ所の國家及び國民の眞意義をだに解せざること、彼等の言論に徴して尤も明白なる所なりとす。彼等の主義や、素より國民の反省に本づく。然れども國民的意識の發達の上より見る時は、從來物我を分たざるもの、茲に初めて自他内外の差別を自覺したるに過ぎず。未だ一國文明の特質を明にし、其の國體

及び國性を以て國民的思想の中心となすに至らず。所詮は幼稚單純の主義なりと謂はざるべからず。

然れども吾等は歴史上の一思想として國粹保存主義の功績を否定するものに非ざるなり。少くとも國民的意識の覺醒に一步を進め、從來徹上徹下に全盛を極めたる歐化主義の適否に就て國民に一大反省を促がし、兎にも角にも獨立の日本思想に據りて歐化主義に對壘したるの一事は、明治思想史上に特筆すべきものなり。是の點に於ては國粹保存主義は槩に今日の日本主義の先驅たりと謂ふべし。

是に於て吾輩は勢ひ日本主義に就て一言せざるべからず。けに是の主義や、其の系統に於ては國粹保存主義の後を承けたるものなりと雖も、其の内容に於ては日を同うして論ずべきものにあらず。今其の差別を説明するに先だち、便宜の爲に世上の論者の誤謬を指摘せむ。而して是の如き誤謬の一例として水城學人(建部氏)の日本主義論を擧ぐべし。實に吾等は水城の如き少壯有爲の學者にして尙ほ且つ是の幼稚の見を持つるを見て、成心私情の如何ばかり論理の公明を累はすかを想へば、覺えず悚然たらずむばあらざるなり。水城希くは心を慮

うして吾等の説に聴け、而して靜に省みる所あれ。

水城が明治思想の變遷を論じて、是れを人間思想開展の三大段に擬し、第一を獨斷の時期となし、第二を懷疑の時期となし、第三を合成的建設的の時期となせる事に就ては、吾等茲に異議を唱へざるべし。唯、水城が所謂第二期の懷疑説たる國粹保存主義の一時の反動的復興として日本主義を觀察したる事に就ては、眞に是れ菽麥河嶽を辨ぜざる夙斷なりと謂はざるべからず。水城、説を爲して曰く、

摸倣と自覺の二大主義、明治の思想界を振盪するや、第三期的開展は日尙ほ遙にして、乃ち這般二大主義の反動的復興は起れり。摸倣主義の反動的復興は即ち西園寺公望氏等の唱説に係る所謂世界主義即ち是れにして、自覺主義の反動的復興は近來一派の儕輩の呼號に於ける所謂日本主義即ち是れなり。所謂世界主義は單に過去に於ける歐西の文物思想を以て文明の究竟的理想と爲す漠然たる淺見にして、所謂日本主義は十年前國粹主義が夙に既に道破し了せる所を取りて、新なる衣裳の下に之を衆人の前に開陳する靦然たる陋見なり。

而して日本主義は國粹保存主義の單純なる摸倣に過ぎざるを證せむが爲に、二者の類似を

比較して曰く、

雜駁なる思想の範圍に坐して、社會上國家上の實務に關し未だ一定の識見を立するに至らざるは兩者同軌の一なり。思想開展の理勢に通ぜず自個の地位を覺知せざるは、兩者同軌の二つなり。第十九世紀の末葉に於ける世界文明、世界思想の大勢を了せざるは、兩者同軌の三つなり。大勢上より觀るに於て大波瀾の後の小波瀾として、反動的復興の現象として、自動的態度を具有することなきは、兩者同軌の四なり。

終りに大いに日本主義を罵りて曰く、

所謂世界主義の時勢に後るゝこと數舎なるは更に言はず、所謂日本主義も亦國粹主義の後に出于て同一思想を反復する、若し以て新と爲すか則ち迂、若し自ら其の陳套なるを知ると雖も且其の貌を新にし其の聲を大にして以て自ら售るに資せむとするか則ち鄙。鄙なる者と迂なる者と、日本主義や必ず一に此に居らざる可らず。苟くも學識氣力に於て日本思想の先覺者を以て任ずる者、固に宜く斯の如くなるべけんや。明治思想界の病的現象は、吾れ世界主義及び日本主義に於て之を看る。

水城の言や洵に壯なりと謂ふべし。然れども如何ばかり確的の論據ありて水城は斯かる壯

語を敢てし得たるぞや。是れ吾等の茲に問はむと欲する所なり。

苟も明治思想の歴史を理解し得たる人ならむには、國粹保存主義と日本主義との間に一の著大なる差別あることを認識せざるべからず。是の著大なる差別は内にありては即ち國民的意識の明白なる自覺なり。外に表はれては即ち内外事物の眞正の性質に據りて其の取舍撰擇を決し、其の方法の全く研究的なることなり。但し兩個の主義は、日本を主とし外邦を客とする事に於て、素と同系の思想に屬するが故に、是の差別は根本的なりと謂ふを得ずと雖も、其の懸隔の大なる、殆ど將に天淵の別あらむとす。水城是の二大差別を看過して而して尙ほ『明治思想の變遷』を論じ得たりとする乎。未だ慎重なる學者の意見と謂ふを得ざる也。

然らば則ち何をか日本主義に現はれたる國民的意識の自覺と云ふ。他なし、國家及び國民の眞意義を解釋し得たる事、即ち是れなり。抑、國家及び國民の概念が自覺的に國民思想に上りたるは、明治二十二年以後の事なりとするを妥當とすべし。其の以前にありても是れを言説せるもの素より渺からざりき。然れども國家と國民の依りて以て其の獨立の存在を維持し得る所の國體及び國民性に就て明白なる概念を有せざるは言を待たず。當時國家と言ひ

國民と謂ふ所のもの、多くは單に外邦の思想を借り來りて漠然たる觀念を構成せしに過ぎず、我が國家、我が國民に就ては殆ど思料する所なかりしなり。國粹保存主義は、是の間に一段の反省を齎らしたりと雖も、畢竟未だ遽かに國家主義と云ふを得ず。明治廿二年に發布せられたる欽定憲法は我國體の特性を明にし、政治上に於ける民主主義者流の空想を打破し、以て國民の政治思想を統一し、同じく二十三年に煥發せられたる教育の大詔は國民道德の大綱領を指定して以て國民の道德思想を糾合し、茲に國家主義の精神は初めて社會の人心を支配するを得たり。然れども是の如くにして成立したる國家主義の思想や、未だ國民の明白なる自覺心によりて執立せられたるものにあらず、多少頑迷固陋の嫌ありしは時勢の然らしむる所、畢竟國民的意識を覺醒すべき十分の刺戟を缺きたればなり。もし當時國家及び國民の概念にして明に會得せられたらむには、夫の教育宗教衝突論に際し、本來基督教と共に非國家的なる佛教徒が、井上博士に左袒して却て基督教を攻撃したる笑ふべき矛盾も無かりしなるべく、又一史學者の論文に對し、國學者神道家流が國家主義の名によりて無道の迫害を加へたるが如き醜態も無かりしなるべし。是の如き尙ほ幼稚なる國民思想を根底より搖撼し、